797-179
1200501607039
797
9

新潮文庫

第四百三十三編

プッリト・プッレフ

北原白秋著

新潮社出版

帝國圖書館藏

新潮文庫
第三十三百四編

プッリト・プッレフ

北原白秋著

新潮社出版

昭和十五年
帝國圖書館藏

797
179

目次

揺れ揺れ帆綱よ……七
海上の饒舌……二五
小樽……三七
おおい、おおい……五九
安別……九三
パルプ……一一
眞岡……一三五
多蘭泊……一四〇
本斗の一夜……一五五
樺太横斷……一八六
小沼農場……二一六
イワンの家……二三九

豐原舊市街……二五三
樺太神社……二六一
豐原よりの消息……二六五
木の扇……二七〇
笛……二七四
敷香……二九六
海豹島　その一……三一三
第一光景……三一七
第二光景……三二〇
第三光景……三二三
海豹島　その二……三三一
ハーレムの王……三三三
巻末に……三六二

フレップ・トリップ

―樺太紀行―

フレップの實は赤く、トリップの實は黑い。いづれも樺太のツンドラ地帶に生ずる小灌木の名である。採りて酒を製する。所謂樺太葡萄酒である。

搖れ搖れ帆綱よ

心は安く、氣はかろし、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

おそらく心からの微笑が私の滿面を搖り耀かしてゐたことと思ふ。私は私の背後に太いロップや金具の緩く綏くきしめく音を絶えず感じながら、その船首に近い右舷の欄干にゆつたりと兩の腕をもたせかけてゐる。

見よ、組み合せた二つのスリッパまでが踊つてゐる。金文字入りの黑い革緒のスリッパが。

心は安く、氣はかろし、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

私の今度の航海は必ずしも物の哀れの歌枕でも世の寂栞を追ひ求むる風狂子のそれでもなかつた。ただ未だ見ぬ北方の煙霞に身も靈もうちこんでみたかつたのである。殆ど境涯的にまで、さうした思無邪の旅ごころを飽滿さしたかつたのだ。南國生れの私として、この念願は激しい一種の幻疾ですらあつた。いまこそ私は年來の慾望を果し得ることを喜んでいい。私はまさしく樺太觀光團の一員として、この壯麗な高麗丸の甲板上にある。

心は安く、氣はかろし、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

ハロウとでも呼びかけたい八月の朝風である。爽快な南の風、空、雲、光。
なんとまた巨大な通風筒の耳孔だらう。新鮮な藍と白茶との群立だ。すばらしい空氣の林。
なんとまた高いマストだらう。その豪壯な、天に冲した金剛不壞力の表現を見るがいい。その四方に齊整した帆綱の斜線、さながらの海上の寶塔。
ゆさりともせぬ左舷右舷の吊り短艇の白い龍骨。
黄色い二つの大煙突。
あ、渡り鳥が來た。耿として羽裏を光らせて行くその無數の點々。

煙だ。白い湯氣だ。その無盡藏に涌出するむくりむくりの塊り。
しかも、見るものは空と海との大圓盤である。近くは深沈としたブリュウブラックの潮の面に擾亂する水あさぎと白の泡沫。その上を巨きな煙突の影のみが駛つてゆく。
北へ北へと進みつつある。
ハロウ、ハロウだ。

心は安く、氣はかろし
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

そこで、私は支那服をつけてゐるのだ。初めてつけたこの麻の支那服の著心地のいいことは、實に寛々としてさばさばしてゐる。その薄藍いろの上衣には唐草模樣の釦どめが鮮かな黄の渦卷をなしてゐる。五つも六つものポケットだ。それから雪白のだぶだぶとしたズボン、利休鼠のお椀帽。
今朝から變裝してみて、すこしく氣恥かしいが、私には却つてこの方がしつくりする。悠々とくつろげていい。
なんと青い深い耀きをもつた空の色だらう。私はマッチを擦る。抓みの厚い土耳古煙草に火をつける。

香炎、香華、香雲、香海。

心は安く、氣はかろし、
揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

いい旅だなと、私は思ふ。

かうして海洋の旅を續けるのは、私としては小笠原渡航以來十三年ぶりのことである。だが、曾ての南の空は明るかつたが、私の眶は重かつた。今の潮(うしほ)は暗いやうでも、私の心ははればれしい。人生の浮沈といふものは一向に測りがたいものではあるが、とにかく今の私は平穩である。少くとも幸福である。

今度といふ今度、廉物ではあるが私は腕時計といふものを初めて購つた。それからこまごまととのへたものには洋杖(ステッキ)蝙蝠傘、藤いろ革の紙幣入、銀鎖製の蟇口、毛絲の腹卷、魔法罎、白の運動帽、二三のネクタイ、艾いろの柔かなズボン吊、鼠いろのバンド、獨逸製のケースにはひつた五六種の藥劑、爽やかな麥稈帽、ソフトカラアにハンカチーフに絹の靴下。白麻のシャツに青玉まがひのカフス釦までつけ換へて、これはどうだいとうれしがつた。私は山莊の住人で、平生、竹や草や昆蟲ばかりの中に立ち交つてゐるので、身のまはりなぞは清潔にはしてゐるが、少くとも野趣そのままにちがひ

なかつた。それがアルパカの黑背廣に黑の小さな鞄を肩から引き掛けて、「左樣なら、行つてまゐります。」だから、それは瀟洒な、(色が黑くて肥つてはゐるが。)さぞ好紳士に見えたことだらう。

ましてや、誰よりも私のこの長旅行を喜んでくだすつたのは私の兩親であつた。その前夜には、二人の弟もその妻たちも妹もそろつて大森の兩親のもとに集つた。さうして一同が私の爲に盛んに杯をあげてくれた。友人としては私の所謂隣國の王と稱する(それは童話國の王だからだ。)「赤い鳥」の鈴木の三重吉が、それこそ上機嫌でぴちぴちして、「ええのう、ええのう。」で意氣が昂つたすゑには、それはまことに枯淡閑寂な鰌すくひを踊りぬいて、赤い農民美術の木の盆と共に危ふくひつくり返りさうになつたほどだ。それから私は兩親の寢床の間にもぐりこんで、長い白髯を引つ張るやら、皺くちやの乳房にかじりつくやら、ひとしきり困らしてゐたやうだが、いつの間にかぐつすりと眠りこけて了つたらしいのだ。

當の七日の正午には、私は櫻木町から稅關の岸壁を目ざして駛つてゐる自動車の中に、隣國の王やアルスの弟や友人たちに押つ取り卷かれて嬉々としてゐる私自身を見出した。それから高麗丸の食堂ではそろつて麥酒の乾杯をした。驚いたのは同行すべき筈の庄亮(しやうりやう)(歌人吉植君)が解纜五六分前に、やつとリボンもつけない古いパナマ帽に尻端折りで、「やあ。」と飛び込んで來たことである。「あつはつは。」と豪傑笑ひをしてちよいと頭を搔くと、首をすくめて、

「なに、いや、そのう、銀座でこれをやつてゐたんでね。」と左を利かせる。あくまでも飄々として

ゐたものだ。

「こりやあ、あぶないぜ、吉植君、これから上陸する時には、よほど氣をつけないと、それこそ鬼界ケ島の俊寛ものだよ。」誰やらが一本參つた。

「いや、大丈夫、僕がついてるから。」

「その兄さんがまたあぶないからな。」

「そこは俺が引き受ける。」

「どうだか、二人ともさぞきこしめすだらうな。こいつあ。どつちもけんのんだ。」

また後ろで奇聲をあげたのがゐた。

ヂヤラン〳〵〳〵と銅鑼が鳴ると、稅關前に降りた一同はしきりに萬歳をとなへてくれた。それから各自にカメラを向ける。活動寫眞を撮る。私たちは帽子を振る。次第に遠く遠く、小さくなつて了つた。

イッテクルヨ　ランランラン

から私は小田原の妻子へ打電するやうに弟に頼んだが、船が出ると船員が私の前に「電報がまゐつて居ります。」と私を探しに來た。

イッテラッシャイ　バンザイ　パパ　バンザアイ

私は微笑した。さうして竹林の中の草深い私の家を、土間の篠竹を、また紅い芙蓉や黄のカンナを、

妻と二人の子を、その一人は生れてやつと一と月にしかならぬ篁子のことを、夜はまた滿天の星座と浪の音と蟲の聲々とに闌けてゆく壞れかかつた二階のバルコンと、寢室とを、私はまた心にふり返つた。

健在であれ。

心は安く、氣はかろし
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

とにかく、幸先はわるくない。私はまた紫の煙草に火をつける。

や、鯨だ鯨だと騒ぐ聲がする。下甲板だらう。

まあいい。そこで、今度の話は印旛沼の庄亮君の宅を訪ねた時に初まるのだが、彼は鐵道研究會員の一人で、新聞聯盟の外報部長であるところから、鐵道省主催のこの觀光團に五六人の同勢と乘り組む筈になつてゐた。そこで私も勸められたが、その時には何故か浮きたたないで、行くとも行かぬとも確答はしずに酒ばかり飲んで歸つた。が、妻に相談すると、連れはいいし、またとない好機會だから是非行らしつたがいいと、しきりに煽り立てた。と、急に足元から鳥の立つやうな騒ぎになつて切符を申込む、印旛沼へ電報をうつ、それでももう締切にぎりぎりとかで二等の最後の切符がやつとし

か手に入らなかつた。ところを、研究會の同勢が沙汰止みになつて、庄亮君一人となつた。で、私はいい工合にその寢室として當てられた最上の特等室に割込ませてもらつた譯なのだ。むろん增金は出したが、私の爲に庄亮君が宣傳これ努めたお蔭であると言つていい。

何と言つてもこの船一の特等室である。談話室と寢室と便器附きの廣い浴室と、三室續きの豪奢なものだ。つい前まで關釜連絡船としてのこの船のこの特等室は朝鮮總督の使用室だつたといふのである。私の親愛な友人は私を大きな寢臺に寢かしてくれて、自分は談話室のソファを假寢臺にこさへさして寢た。さうして、さて改まつて私を朝鮮の王樣と披露した。

朝鮮の王樣もおもしろい。萬事のんびりとやつてやろ。

そこでこの支那服だが、これはむろん私のものではない。昨夜、さうだ、この船での第二夜、一等の食堂で、期せずして私たちの間に童謠音樂會が開かれた。どうせみんなが醉つてゐた。私の周圍にはいつのまにやら三等客の學生達が有りつたけの蠻聲を張りあげてゐた。ピアノを彈く者もゐた。踊る者もゐた。それをまた覗きに來て、ぞろぞろとはひり込む人々で食堂がいつぱいになつた。方々の窓にはまた黑い赭い白い顏と手とが鈴なりにぶら下つた。その時、大柄ののつぽうの、それでゐていつも棗のやうな顏をして眼の細い、何か脫俗してゐる好々爺が著て來たのがこれであつた。

「これはいい、僕が貰つとく。」

そこで、私の麻の浴衣と脫ぎ換へさして了つた。すると、背の低い小さい小さい實直さうなお爺さ

んの頭にのつけた鼠の頭巾が眼についた。

「お爺さん、その帽子はいただきますよ。」

小さなお爺さんはちよこちよこと私の前に來て、その頭巾を「へい、どうぞ。」と差し出した。

「朝鮮の王さま、出來ました。」と誰やらが頓狂に叫んだ。

一同禮拜、ハハッ、であつた。

かうして身につけて了つたのであつたが、朝になると、浴衣と帶とは談話室の椅子の上に疊んでキチンと載つけてあつた。となると支那服は返さねばなるまいが、どうにも欲しい。で、朝から兩手に櫻ビールをかかへ込んで遊びに來た九州は福岡の讀賣新聞の支局長だといふY君に、

「どうだね、これは貰つときたいが。」とやつた。

「かまひませんさ。私が話しときますたい。著ておいでなさい。」

欲しいものは貰つたがいいだらうと私も思つた。

「ちよつとさう言つて來ますたい。」と、とつかはY君は飛び出した。やつぱり九州人はいいなと思つたものだ。

「大丈夫、くれます。」

「しめた、どうしたい。」

「何ですたい。」と、どかりとソファに身體を彈ねかへらして、薄い口髭をちよいとひねつた。圓い

はじきれさうな赭ら顔のすこしく釣つた眼尻を仔細らしく細めると、兩腕をテーブルに、そして肩を怒らした。どう見ても快活な佐賀男だ。

「話してみましたもんな。あの爺さん、何でもあれを神戸で買うて來て、たつた一度しか手をとほさないち言ひましたけんな。なに、ちつとばつかり惜しか如しとりましたたい。そげんかこつ言うたつちやでけん。あげなさい。何か書いてもらうてやるけんよかたい。そげんか支那服いつでん金ば出しや買はるつぢやろが。よかよか、俺が善うしてやるち、うんと恩著せて置きましたたい。そしたら喜んで進上しますと言つとりますばい。」

「しかし、惜しがつてるのを無理に貰ふのはいけないな。」

「うん、よかよか。とつときなさい。短册でん呉れてやんなさり。そつでよかたい。」と片手を仰山にうち振ると、それからまたビールをグツとひとあふりだ。

「あん爺さんもおもしろか。何でん、下の關で車輛會社をやつとるち言よつたが、うん、やつぱり變つとる。いまに酒でん提げて來させまつするたい。」

元氣旺溢である。

「そりから、まだえれえ奴が居りますたい。肥前の呼子ち知つとんなはろが。彼處ん王さまん如つとたい。よか親子ですもんな。三等に乘つとりますばつてん、そりや貴族院議員の資格もあるち言よりましたばい。鯨ん罐詰ばこさへとる。全國に出しますもんな。彼ば引つ張つて來う。今度呼子におい

でたなら、そりやよか、學校ん生徒でん何でんお迎ひ出すち言よる。」

「鯨の髭さ。ありやうまいや、粕漬だらう。君。」

「鯨ん鼻ん骨ですたい。輪切がえらかもんな。そりや珍らしか。好いとんなはるなら送らせまつしう。うむむ、後で連れて來う。」

ここで話が一轉して、もう一人の支那服の白髪のお爺さんの噂へ移る。

私はそのお爺さんが初めから眼についてゐた。日本人には珍らしい、若い時はさぞ秀麗だつたらうと思へる、禿げ上つた頭のそこらに、眞つ白い縮れ髪がもじやもじやして鼻の太くて高い威風堂々とした朱面の持主である。タゴールそつくりと言つていい。いや、それよりも嚴ついかも知れぬ。それが白い麻の支那服を著て、一等の談話室の、ラヂオの黑い喇叭が二つ背中合せに立つてゐる綠の大卓を前に控へて、ポケットから大きな眼鏡を取り出すと、白髪頭をひと振り振つて兩耳へ掛ける。何か書類をいつぱいに擴げて、それは精密に書いたり調べたりしてゐる恰好を見てゐると、まるで白い牡牛のやうな活氣と精力とが充ち滿ちてゐさうであつた。

「おい。」と、昨日の朝だつたか、庄亮が私の袖を引いた。

「あのお爺さんどうだい。みんながね、白秋さんはどの人だらうと探してゐる樣子だから、ひとつ、あのお爺さんがさうだと言つてやらうかね。おもしろい。」

「莫迦言へ。あんな白髪のお爺さんにされちやあ困る。」

「いや、いいよ。あれだあれだ。」と頭をかかへて笑ひ出した。

その話がまた出ると、

「まあいいさ。ゆうべですつかりお里がわかつちまつたんだから。」

「あのお爺さんも餘程おもしろかつたと見えて、おしまひまで、一緒に飲んだり跳ねたりしてゐたぜ、君。」

「知つとる、知つとる。ほんに酒好きけんな。飲ます事ちなか、とてん偉えお爺さんの如る。」

「それでむしやうにうれしがつてゐたぜ、君。そして君のことをまるでやんちやの赤ん坊だ、あれでなくちや詩も歌もできまいと。」

「君の稲葉小僧の新助もだらう。」

あつはつはつと、政友本黨では幅利きの吉植庄一郎氏の令息で、法學士で、政治ぎらひの、印旛沼は出津の開墾家の、お人よしの、どこか抜けてゐる坊さん風の、歌人の、わが友庄亮が頭を叩いて、

「閉口々々。」と元から細い眼尻を一倍細くして、赤い顔をした。

何でも、今度の觀光團は面白さうだとなつた。一同で選擧した團長が日露役の志士沖禎介の親父さんで、一等船客の中には京大教授の博士もゐれば、木下杢太郎の岳父さんもゐる。中學校長もゐれば有名な富豪もゐる。銀行の頭取、牧畜家、材木業者、それに二三等にも山持ち、汽船持ち、藝術寫眞のKさん、小學校長、學生、西洋畫家、宿屋の主人、等の種々雜多の階級の人たちが全國から三百幾

人と集つたのだ。それが、まだしつくりとはとてもうちとけないで、何かしら氣づまりで固く鯱こばつてゐたのが、昨夜の童謡音樂會でさらりと流れ、ふはりと和らいで了つた。

「とにかく、あれでよかつたんだ。」

さうだとも私も思つた。

と、「先生はおいでですか。」と誰やらがいきなり飛び込んで來たものだ。

「明日(あした)假裝會をやるんださうで騒いでゐますが、皆さんに御賛成を願ひます。なんでもこちらに出ていただかないと、どうもなりませんで。二等船客總代といふ格で伺つた譯なんですが、是非どうかひとつ御聲援を。ええ。」

「うむおもしろか、やろ。」とY。

「これでいいんですか、この支那服のままで、それならかまひませんよ。」

「やあ、結構です。ではお願ひします。どうせまた明日(あした)引つ張り出しに來ます。」

「いやあ。」と言つてゐるうちに、またポンと飛び出して了つた。

心は安く、氣はかろし、
揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

まつたく汽船の旅はいいなと思ふ。ことに夏の海上ぐらみ爽快なものはなからう。

第一日は室内の整理やら、入浴やら、何かとそはそはとして暮れて了つたし、明るい食堂の晩餐をも虔ましく片隅に寄つて濟ました。それから一等の談話室を覗いたり、甲板の籐椅子へもたれてみたり、自分の寝臺へ歸つて仰向いたり、まだ十分の落ちつきは得られなかつた。甲板での活動寫眞の催しも、いたづらに人寄せの技師が不馴れで、ただ急造の白幕に白い圓ばかりを出して、そのままコチコチ〳〵で中止になつて了つた。

ただ、「J・O・A・K、こちらは東京放送局であります。」と、はつきりと大きくは唸つたものの、すぐとその後から、ガウ〳〵〳〵と何處かの無電がしつきりなしに邪魔をしかけて、それからの義太夫も太棹も、聽いてる方ではまるで頭を鑪でこすられるやうで、苦しかつた。

翌朝はまだ暗いうちから取り騒いだが、大洋の黎明は何とも言へずすがすがしかつた。そのうちに珈琲が來る。謄寫版刷の高麗丸新聞が配られる。この第二日もいい風であつた。私は午後無線電報を續々と諸方に打つて貰つた。昨日の御禮である。

妻子には、

トクトウニカハツタ　イマヨコハマヨリ二〇〇ノツト

イチロヘイアン　アア　ヒロイウミ　アヲイウミ

また、ある東京の友人にはかうも打つた。

アア　ソラトウミ　ナミヲハシルハエントツノカゲ

私はまた環投げの遊戯に加はつた。それに正午にはまだ可なりの間があるうちから、しきりに腹が空いて、晝餐の合圖の銅鑼ばかりが待たれて困つた。ベルを押すこと、ベルを押すこと。

「紅茶を二つ。」

「こんどは珈琲だ。」

「菓子、菓子。水菓子。林檎々々。」

遠い、いささか薄紫に煙つた北方の空を鷗が幾むれも翔つた。

ひろいひろい大うねりの黑い波間には、小さな鴨ほどの海鳴が搖られ搖られて浮いたり、沈んだり、滑つたり、落ちたりしてゐる影も見た。何といふ落ちついた叡智の持主であつたらう。その羽は黑く紫に、その嘴は黄色く、よく横向に尻尾をあげあげ滑つた。

それに舷側に添つて亂れて駛りのぼる青い腹の、まるで白龍のやうな新鮮な波の渦卷と潮漚とをつくづくと俯瞰しては、何とか歌にまとめようと苦吟もしてみた。

午後になつて、左舷の遙かに金華山らしいのが眺められたが、航路といふものは、海岸線には添ひつつも、なかなかに近くへは寄れないとみえて、おほかたは空と海とのかぎりない大圓盤ばかりを周りにして進んで行くのだ。

「ここまで來れば、何も彼も忘れて了ひますね。」と、ある船客は幾度かの深呼吸の後で、哄然として

その笑ひを放つた。

「無だな。」とまた誰かがその言葉を飛ばした。

「ロウリング、ロウリング、ロウリング。」と、ある少年は兩手と兩足とを思ふさま踏み鳴らして舞つて廻つた。

何處やらでは、のうのうと、聲をそろへて羽衣を謠つてゐた。

笛を吹く人もあつた。

まつたく、大洋はいいなと思つた。

何が世の騷壇であらう、幽人高士のあまりに少い今の亂脈さは、その氣品の低く、香氣の薄く、守ることの淺い不見識は、あの市井無賴の徒たりとも口にすることを恥づる暴言と、態度の賤鄙と（いや、それよりも下俗な覆面の殘虐と私情の惡罵と。）あの卑劣とは何事であらう。あの狹隘さは、あの某々雜誌の喧々囂々はいつたい何事であらう。あの無秩序な、無差別な、玉石も眞贋も混淆したあの評價は、あの妥協は、あの美に對する放恣な反逆は。

私が若し秦の始皇帝ならば、焚くべき書、埋むべき坑はいかほどあるか。私は相應に知つてゐる。決して文藝に就いては風俗壞亂のみを狙ふべきでない。しかもその行使はほとんどが美への冒瀆が多い。寧ろ秩序紊亂の罪惡がどれだけ藝術の正しい品位を破るか。近代は澆季なりと時の人が歎いたあの戰慄すべき保元平治時代よりもまだまだ今日の藝術界の一部は淺ましい。墮落しきつてるやうな氣

がする。

藝術とはあんなものでない。大乘の、大雅なものだ。

この空を、この雲を、この風を、この海を、この光耀を見たがいい。

私は今日も、空を吸ふ、雲を吸ふ、風を吸ふ、海を吸ふ、この光耀を吸ふ。

ハロウだ、まさしく。

心は安く、氣はかろし、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

また、腹が空いた。もう晝餐の銅鑼が鳴るのもぢきであらう。

どれ、ケビンの甲板に下りてみようかな。

や、ゴルフをやつてるな。

誰だ、いつたい。あの桃いろのスカートを跳ね跳ねして、まるで乳房の張つた馴鹿（トナカイ）のやうに躍つてゐるのは。

すばらしい、すばらしい。

心は安く、氣はかろし、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

海上の饒舌

銀の雄辯と言ひたいが、これは銀鍍金の饒舌だ。
また、何と恐ろしくしやべる、ちよつぴり髭の赤いぺらぺらの舌であらう。
私は呆れて見入つてゐるのみだ。
時は八月の九日午後二時——三時、處は横濱を北へ去る少くとも五百海浬の海上、今やまさに津輕海峽の中間を進行しつつある觀光船高麗丸の後甲板。
演者は誰ともわからぬ。
俗間に濶歩するお一二の學生帽に紅の帶紙を貼りつけ、黑い髭をぴんと生やし、詰襟の黑服の右肩には紵繩か何かのまがひの金モールを卷きつけ、兩の筒袖にはまた銀星をちりばめた幅廣の紅紙を卷き、腰にはブリッキの手製のサーベルをさへ吊るし、さて、そのサーベルの柄頭に左の手を後ろへ廻り氣味に當て、腰をかまへ、りゆうと胸を反らすと、右の手で黑骨の金に大きな朱の日の丸の玩具の軍扇をサッと擴げて、口元近く煽いだり裏返したり、上げたり下げたり、時には「えへん。」と聲づ

くろひをしてからに、得意氣に、やや諛つて、ええ、さてと、帽子の鍔を一つ叩くと、

まづ、初めは、「近頃流行の安來節」と、手前口上で、一歩退ると、えへんとやつたものだ。さて、この海軍參謀、ちよんがらちよつぴりの小男でござい。

安來千軒、名の出たところ

コラサッと、この時、笊を前のめりに、ひよろひよろと、横つ飛びに蹌けかかつた黒んぼがある。此奴の面の黒いこと、鍋墨の墨汁とを引つ掻き交ぜて、いやが上に、處きらはず塗り立て掃き立てたとみえて、光るものはただ兩つの白眼ばかりの、部厚な唇だけを朱紅に染めてから、てつぺんから孔のあいたお釜帽子に、煤いろの襤褸の腐れ鰊の臭氣でも放ちさうなのに、繃帶をだらしなく前結びにして、それも畫きちらした髯むじやの黒い胸をはだけ、手も足も、それこそ眞つ黒々に汚しきつて、すなはち早速の鰌すくひと來た。

コラサッ。

それは頓狂な、兩肩兩腕を大袈裟に振り立てる。爪立ち、蹲んでくるりとやるかと思ふと、ひよくりと後足で跛をひく、とん〳〵〳〵と笊を拍子で、スッと掬ふと、また腰を使ふ。右を見たり、左へ傾いだり、眼を剝き、でんぐり返すと、そのまた、反り頤を突き出し、突き出し、またひよくりとや

る。鼻はこする、水つ洟はかむ。笊の中は掻きまはす。嗅いでみる。おくびはする。穢ならしいの、厭らしいのといつたらないのだ。淫猥とも俗悪とも、それがその悪達者なだけにとても見るに堪へない代物なのである。

社日ざくらに十神やま

やんややんやと、觀衆が笑ひこけこけ喝采する。手をたたく。それをいいことにして、

「ええ、今度は詩吟入り、おなじく安來節。」と日の丸の軍扇が胸を叩く。

「よし來た。コラサッと。」

黒んぼの奴、すつかりお調子に乘つて、いよいよ出でていよいよ妙ちきりんな姿態をする。跳ねる、飛ぶ、眼で媚び、股でひねる。日の丸も負けず劣らずである。味をやる。きいきい聲を出す。

ああ、日は小さくもないのにな。夜になれば夜で、月も星も光るのにな。

思ふに、踊にも高下がある。それは踊る人の氣品によるのだ。すぐれた氣品は表現以上の心法の鍛錬から來る。つまりは内から映發するのだ。奥の奥の人柄の香氣だ。藝は道也。深く心を潛めてこそ行爲にも光る。詩を生むのも踊に現はすのも、その精神とするものは凡ては一つで、二つはあるまい。この流通こそはおのづからに現はれて來るものだ。だから、たとへば、私も踊る。ではあるが、私の

踊は父とも母とも妻とも子とも弟ともをどれる踊だ。三重吉の鰌すくひも、あのままがあの人の藝術と同じ高さの心で現はれる。踊の玄人にしろその心の鄙しさをその巧妙な手振りでは蔽ひかくせぬものがあらう。だから、これは教養だ、人だ。

鰌すくひはそこらの百姓が踊ればそこらの鰌はすくへるであらう。だが、月の光は、星のまたたきは、田水の、または根芹のかをりは、土の香は、青い鰌の精靈は、品の低いともがらにはすくへない。

月の光を切々とすくふ鰌すくひの端嚴さは曾ての鏡花散人も見たものだ。

それに、何ぞや、この日の丸は、黒んぼは。

さて、それでも黒んぼの鰌すくひ、流石におしまひにはへとへとに疲れたとみえて、くる〳〵〳〵と小鼠のやうに轉廻する、と、右手に竝んで取り澄ました假裝團のまん中へ、どたりわアところげて了つた。と、白粉べたべたの洋裝婦人の立膝がもろくもぶつつぶれて、「あ痛つ、こん畜生。」となる。大笑ひだ。

ところが、金モールの日の丸の意氣はいささかも衰へないから呆れたものである。

「さて、この度は追分。」

やや仰向き加減に眼を細め、口をすぼめて。それでも美い聲は出る。

大島ア……小じまアの……

あひとほ……るウ……ふねエエエは……

江差し……がよ……ひかアよオ……

なつかし…イイ…や……

「もうひとつ。」

帶も……十勝……に……

その…ま……ま……ねむ…ろ……

落石…イイ……なみだ…は……

ほろい……づ……ウウウ…ウ…み……

「うまいぞッ。」と聲がかかる。拍手々々。

「ええ、今度は新潟甚句。」「ええ、さてその次といたしまして三がい節。」「關の五本松。」「さのさ。」「喇叭ぶし。」「キンライライ。」「へらへらへ。」「八木ぶし。」

鈴木主水といふさむらひは
女房こどものあるその中に、
けふもあすもと女郎買ひばかり。……
カツタカタア、カツタカタ。

「ええ、こんどはストトン節、籠の鳥、枯すすき、鴨緑江、まつたくもつて休憩なしのぶつつづけとござい。」

それがやつと濟むか濟まぬに、また姿勢を立て直すと、やりもやつたり、

「ええ、さて、今度も一人で代りあひまする事なり、流石に代りばえもいたしませぬが、えへんのえへんのえへん、烏賊捕口説とどうぢやいな。」

勵む、サーイ、勵む勵むと烏賊釣商賣、今日はよい風、日も入りござる。勝浦、法木の島船、小船、浦の眞船の出鼻を見れば、姐も妹も皆乘り出して、艪をおし押し、にまきの先に、おせなおせなせなとさふかぜ通れば、風もいし、かつまを通れば、せじた宵烏賊、せがらし宵烏賊、ながせながさき流れて通れば、風は南風(みなみ)で、下り帆

が早い、おしやく沖から錨を下ろす。波も靜かでねぶりすりすり、簑鞘はづす。空のすんぼり、荒崎沖よ。明星(あけぼし)出れば船足遲い。遲い船足たのしり沖よ。これでなるまい、楫をかきかきおとぢをはづす。おとぢはづせば法木の前よ。ちかちか明の鴉の鳴くこゑきけば、首尾えい首尾えいと島中に告げる。内の婆さまたち早や眼をさます。にまにつきたる子供のはても、遊ぶひまなく大漁繁昌で暮らす。ヤンレ。

「ええ、地藏舞歌とはどうぢやいな。」

なにかかにか出さうだ。なにかかにか出さうだ。何舞とかに舞と、地藏舞を見さえな。地藏舞を見さえな。地藏よ地藏よ。地藏は尊だから、何して鼠にかじられべ。鼠こそ地藏よ。鼠こそ地藏なら、何して猫にくはれべ。猫こそ地藏よ。猫こそ地藏なら、何して狼に負けべ。狼こそ地藏よ。……

「さて、東西々々、魚(さかな)づくしはどうぢやいな。」「野菜づくしはどうぢやいな。」「鰹捕口説はどうぢやいな。」「何とか何とかどうぢやいな。」「謎々何とかどうぢやいな。」

何とか何とかで、何とか何とか申すなら、何とか何とかべい
しやらで、何とか何とかべえしやらで、そのまた何かが何とかで、
ええ、何とか何とかどうぢやあ……

立板に水といふが、これはまた高粱畑(コーリャン)に機關銃の彈丸でもぶつ放すやうに、カタ〳〵〳〵パラ〳〵パラと、よくその舌のまはることまはること、一人で二時間立てつづけの、早口の、とても眼にもとまらねば耳にもとまらぬ薄つぺらの赤い舌の先のプロペラではある。

「えろう、早うおまんな。何と言うてやはるのやな。」

「へへん、雲雀の生れ代りだつせ。あかん。」

「あやつァくざい、氣狂ぢやらうのう、あんまり饒舌(しゃべ)らすもんな。」

「どうしましたい。まだやつてますかい。やれやれ。」

「驚いたね。よくもあの舌が廻るもんだな。ハーン。」

「えれえ、えれつちや。」

「ヤハハイ、ヤハイ。」と少年たち。

「止しやがれ。」ピーと誰かが口笛を奔らす。

「ああ、ああ。」

「ああ、ああ。」

「ああ、ああだ。」

「はあ、へえだ。」

初めはその諧謔、淫靡、精根、類の無い饒舌の珍らしさに、後から後からと黒山のやうに群つて、盛んに拍手し喝采もしてゐた聽衆も、あまりの眼まぐるしさに、それに長い時間をたつた一人で遮二無二押しとほすその單調さに、ぼつぼつと、ああ〳〵と欠伸し出して來た。

「誰だい、いつたい、彼奴は、船客かい、船員かい。」

「誰だか、何だか、海坊主でも甫ひ上つたもんらしいぜ。これからそろそろ韃靼海だからね。」

誰ひとり、銀鍍金の饒舌家を知る人は無ささうに見えた。何でもうまく變貌してゐたにちがひない。

ところで、前に書く筈なのを、うつかりしてゐたが、ちやうど、この日の晝餐が濟むと、直ぐから、二等船客發起の假裝行列なるものが、それこそヂヤランヂヤラン騷ぎでケビンの甲板を一周し二周したものだ。私までが幾度も幾度も引つ張り出されたが、今更となると、どうにも氣恥かしいのだが、後からただ蹤いてまはるには蹤いてあるいた。おそらく、何の工みもなく、ただ支那帽に支那服

のままで、いつもの通りに自然にあるいてゐたのは私一人だつたらう。だが假裝と言へば言へるであらう。素面と言へば素面であらう。紛飾するのみが假裝ではないのである。

壞れバケツに金紙の兩眼を貼り、金の髭をつけ、それを一人が冠つて、その頭から青毛布の波を躍らしうねらし、一人がその尻にもぐつて擔ぎあげて、飛んだり跳ねたり、それが日本醫專の獅子舞であつた。このバケツの獅子を先頭にして、箒を負ふもの、炭取函を首から掛けるもの、例の黑んぼ、赤い風呂敷のスカートの紅毛婦人、支那人、宣教師、按摩、軍人、ヤンキー、アイヌ、似ても似つかぬ世界各國の人種共がそれは滑稽百出で練りあるく。見るから汚らしくて亂雜で愉快でないところの非美術的な一列であつた。それが、觀客のなだれに押しまくられ突きまくられて、とどのつまりが船尾の一端に坐り込みの、藝づくしといふことになつたのである。

だが、青毛布のバケツ頭の金の眼の獅子の勇氣は譬へやうもなかつた。まことに獅子こそは百獸の王だと見られた。しかしだ、それも二度か三度か跳ね廻ると、意外にもくたくたと解體して、青毛布は尻尾の方にづるづると持つて行かれて了つた。それから黑んぼの鰌すくひだが、これも汗みどろの大吐息で、顏から手から白斑になつて了つた。ヤンキーでもアイヌでも歌はせれば歌へさうにも立ちつ坐りつしてゐたが、それもただ千年も萬年も續けば續きさうな日の丸の獨り口說にいよいよ氣を腐らしたものか、または八月の暑熱に倦んじて輕い眩暈でも起したものか。うとうとりと、傍から傍から寢ころんで了つた。

それにもかかはらず、「何とか何とかどうぢやいな。」はたつた一人でもおかまひなしの、ペラペラで、いつになつたら止まるものか、さうした氣配の微塵でも見えぬ根氣よさには、いかな辛抱づよい靜觀者の私とてもひた呆れに呆れて、ただもうおとなしく引き退るよりほかはなかつた。

で、私は甲板をひと周りした。どうにも頭が病めてしかたがなかつたのである。

が、私はその後甲板へ歸つて見ると、それこそ目を瞠つて驚かねばならなかつた。

あのペラペラが、日の丸がフッと搔き消えてゐたのである。そればかりではない。假裝の連中も觀客の一人の影さへ、もう其處には見られなかつた。ただ、一面に日の照らしが白く明るく、板と板との繼ぎ目の塵埃屑のにじみさへが光り耀いてゐた。午後四時過ぎの涼しい靜謐が其處にはあつた。帆綱や欄干やケビンの何かの影も映つてゐた。

それは一時間と經つことか。たつた十分か十五分のほんのちよつとした短時間のことである。それがどうだらう。あの恐るべき饒舌の何の名殘も、あの金扇や日の丸の朱も、チョビ髭も、サーベルも、金モールも、お一二の帽子も、何一つとして、其處には影の影だに止めて居らないのだ。初めから何の踊も口說も演歌も、あの淫靡も惡趣味も、其處には起らなかつたかのやうであつた。さうしたことを夢みるのはまるで痴人のたわいもない幻想としか考へられなかつたのだ。

「何と驚いたお饒舌り家だつたらう。だが、何と驚いた雲散霧消だらう。まるでお饒舌りの神樣見たいな奴だつたが。いや、お饒舌りの神樣だつたかも知れんて。」

私はまたあたりを眺めまはした。

津輕の連山は幽かであつた。だが、北海の丘陵は右舷に近く迫つてゐた。何といふ雜草の青の新鮮さ。

海はまたかぎりなく明るかつた。やや紅と金とを交へた牛酪いろの、一面のはるばるしい漣であつた。

いよいよ夕凪だなと、私は私の船室（ケビン）の方へ、穩かに、また安らかに歩みを返した。

小樽

旅にまで來て、十五六年前の幽靈を擔いで廻るのは何といふ愚かなことだと、私はつくづく朱筆を投げて了つた。小樽の色內町の井旅館の二階での歎息である。私は處女歌集の、「桐の花」の改訂をやつてゐるので、その校正刷をここまで提鞄にしこたま詰め込んで來たものである。しかも私の校正なるものは普通の校正ではない。ともすると改作になる。改作といふより全然の新作が加はる。

乳綠のびろうどの河豚責めふくらし昨日も男涙ながしき

かうした歌を校正してゐるうちに、

さみどりのちひさ河豚の子上げ潮のしほさゐ安く群るるこの頃

といふ風の歌が出來る。さうした時には、私はきつと二十七歳の夏の私に還つてゐる。恰度第二詩集の「思ひ出」を上梓した頃だ。私は筋肉炎といふ未だ曾て聞きもしなかつた病氣にとりつかれて、蠣殼町は岩佐病院の一室にほとんど五十日餘も入院してゐた。大手術を受けたのであつた。その病後の療養に、私は小田原の御幸ケ濱へ一と月ばかり程轉地してゐたことがあつた。ああ、あの頃だつたなと思ふと、私の追憶には青い青い廣重の海の色や朝夕の潮騷の音が響いて來る。何かにつけて涙ぐましい自分であつたなと思ふ。

あかしやの花さく見れば水の上にはかなき夏の夢もやどりぬ
片戀のわれをあはれと鈴麥の花さく傍を通ひ來にけり
夕青き微光の中をあがりゆく脚長蜂は脚を垂らせり
玉赤き蠟マッチする草のなかすでに螢の臭氣むせべり

かうした所緣の深い新作が增補として、「第二桐の花」としてでも加へられねばならない戀々たる氣持にもなる。何といふ情癡であらうと果敢なくもなつた。

ああ、あの頃だ。私は若かつた。木下杢太郎も吉井勇も長田秀雄も若かつた。ゲエテの門番の孫で、伊上凡骨の弟子の猿づらの彫刻家獨逸人のフリッツ・ルムプも若かつた。桐の花とカステラの時

代だ。綠金暮春調の時代だ。紺と白との燕や骨牌の女王の手に持つた黃色い草花、首の赤い螢、ああ屋上庭園の青い薄明、紫の弧燈にまつはる雪のやうな白い蛾、小網町の鴻の巢で賞美した金粉酒のちらちら、植物園の茴香の花、大蒜の花、銅版畫は司馬江漢の水道橋の新綠、その紅と金、小林清親の橫濱何番館、さうして私たちの「パンの會」、永代の一錢蒸汽と吊橋、小傳馬町は江戸の白い竝倉と新しい東京の西洋料理店、椅子に三味線、紅提灯に電灯、切支丹伴天連の南蠻趣味。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ
歎けとて今はた目白僧園の夕べの鐘も鳴りいでにけむ
鐸鳴らす路加病院のおそざくら春も今しかをはりなるらむ
草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寢て削るなり
いつしかに春のなごりとなりにけり昆布干場のたんぽぽの花
手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ
橫網に一錢蒸汽近よるとまはるうねりも君おもはする

かうしたわかき日の抒情歌にうき身をやつした輕い背廣の私ではなかつたか。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
やはらかな秋の光にちるぞえな。

あの小唄は私の爾後の歌謠體の機緣を開いた。永井荷風氏が褒め、新しい「白樺」の人たち武者小路、柳、志賀、里見、萱野の諸君までがロダン號の卷頭に寄せ書して、あれを讀んで片戀の身に相成候とか何とか盛んな慇懃を通じて來たものだつた。さうだ、あの少し以前に、私たちの雜誌「屋上庭園」は私の官能の色濃い新詩「おかる勘平」で發賣禁止になつたものだ。恰度その晩に、小傳馬町の參州屋の階上で、荷風、有明兩氏をはじめ私たち「パンの會」の一連が集つて盛んに鬱憤を晴らしてゐると、その席へ有島生馬君の携へて來たのが白樺の創刊號であつた。それから時代が次第に羅曼派から人道主義に轉々して行つたものだつたな。それに所謂新感覺派の藝術と言へさうな開放運動はあの以前木下杢太郎や私なぞが夙うに濟まして來たものだつたな。

だが、時は過ぎた。赤い蒸汽の船腹の過ぎゆくごとくである。

「かを、かを、かを、かあ、くるつくるつ。」

や、鴉だなと私は向うの電柱の頂邊を眺める。無數の白い碍子と輝く電線、それに漆黒の鴉が四五羽も留つてゐる。紫に見える。

「くるつくるつ。」

これは鴉の獨語である。實に圓い音をころがす。上機嫌の場合にそれが限るのである。

鴉は竝んだり、向きを換へたり、上へ跳ねたりする。子鴉だなと私は見てゐる。と、葛飾の生活が眼に浮んで來る。私は子鴉とよく話をした。よく遊んだ。然し、それが今に何の係りがあらう。

この現實の灰色の亞鉛屋根ばかりの、それでゐて尖つた舊式の裝飾頭をつけた棟の連續、汽船の煤煙、薄ら寒い輝かぬ海港、雲の群れて曇つた空、さうした見馴れぬ北國の風物に直面してゐる私である。埃と雨との沁みついた硝子障子はことごとく閉めきつたままだ。習慣とは恐ろしいものだなと思ふ。それにどの敷居にもただ一筋しか開閉の途がついてゐないのだ。それでゐて、流石に夏は夏である。暑い、蒸される。それでゐてまた、硝子障子がガタガタと響く、風が吹きつける。

だが、せめて北の方でも一枚ぐらゐは開けてもよささうだと、私は卓上電話の受話機を採る。と、その埃りつぽい薄膜(うすかは)の耳がポロリと落ちる。それを慌てて繼ぎ合せて「もしもし」である。

鷺のやうな大鴉がまたしつきりなく屋根から屋根へとわめく。

「小樽といふところは鴉の多い港だよ。」私は小田原の我が子へ書く。

スキクワダ、スキクワダ、ランチ、ランチ

つい、著いたばかりに發信したが、あの高麗丸から海岸の西瓜の山を瞥見してそれこそ子供のやうに小躍りした鮮新さや、青や白や鼠のランチの馳せちがふ、やや煙で黒つぽい油繪風の畫趣からも、今はもう午前十時の觀想は離れて了つた。

そこだ、現代の未來派でやつつければ、

鴉、鴉、鴉、鴉、

灰色、灰色、灰、灰、灰、亜鉛、亜鉛、亜鉛、

尖塔、電柱、線、線、線、

＋×△□、！！！！！

幽靈、H_2O_2 過酸化マンガン。チリチリチリン。

である。

私はまた「桐の花」の校正刷に眼を移す。船中でもこれのお蔭で隨分と陰鬱にもされた。弟の書肆では急いでゐる。初版通りで濟ませば濟むものを、旅先まで昔の幽靈を背負つてあるく自分も自分だなと心の底から深い溜息も出る。それでも、何とか一二字を生かせば生きるあの頃の眞實も眼につく。青春は二度とない。見果てぬ夢の香氣と色とは今だに聯想の林に薄紫の桐の花を靉々と匂はしたくなる。考へるとまだまだ歌ひ殘したものが夥しい。かと言つて、あの現實と空想との限界もつかなかつた年少の恍惚とほの甘い感傷とは、この頃の集には入れられないのだ、正面から歌へもしない。昨今の私の詩歌は燻製の鰊だ。燻製の鰊と桐の花と一緒にされるものか。ほんのかりそめの煩惱であるが

今のうちに一寸でも昔に還つてみたい。いい機會だ、この機會を取りはづしては永遠に寂しい私になりさうな氣もする未練である。ないしよで、こつそりと、こつこつ、ほのぼのである。やつぱり夢は見たいのだな。

が、何といふ鴉だらう。話にきくと、北海の鰊場には三角眼の不良鴉が跳梁してゐるさうである。子供の頭には乘つかる、突き飛ばす、赤銅色の漁師の腕はすり拔ける、嘴衆の洗濯物はばたつかす、猾智で放埒極まるものださうである。まるで鴉の王國といつた風ださうである。初めて私はこの小樽でそれを思ひ當つた。

今の私は以前の私ではない。現實といふ黑い鴉が私を見てゐる、燻し鰊の私を。

白き猫膝に抱けばわが思ひ音なく暮れて病む心地する

この浮薄と衒氣とを省みると、何が音なく暮れてだ、何が病む心地するだらうと赤面する。そこで朱線を引いて了ふ。

白き猫ひそけき見れば月かげのこぼるる庭にひとり戯(あそ)れぬ

これと換へよう、どうだと、昨日も船の中で庄亮の方へ向くと、それは觀想が深過ぎるといふ。昔の歌ではない、今の君の歌だと云ふ。それでも越前堀の月夜の庭で、眞實に同時に見たものだと私が答へる。ただあの時は見てはゐたが歌へなかつたのだ。それが今の技巧で出て來たのだ、構やしないだらう。と私は意地を張る。だが、ちがつたのは技巧ばかりぢやないよと彼は言ふ。ふふむ、あの頃の生活といふことを考へると、今度の新しい歌集にも入れられない、かと言つて、「桐の花」ともちがふとすると、仕方がない、逆戻しかとまた私が折れる。その方がいい、過ぎ去つた昔の歌集に入れるのは惜しいぢやないか、今更誰だつて新しいものとは見てはくれまいと庄亮が言ふ。それから、幼稚でも濟んだ昔なら仕方がない、諦めるさと又言ふ。それもさうだ、一旦吐いて了つた自分の息は取り還せるわけはないからな。ではいつそ、何も彼も初版どほりにまた遣り直しだな。それも大變だな、印刷所が今度は怒るぜ、さんざん直させてまた逆戻しとは人を莫迦にするのも程があると言ふにきまつてゐる。呆れはてたものだなと私が頭をたたいた。それでおしまひかと思ふと、まだ、上陸するとからここの卅旅館で、あの無數の意地悪鴉を恐れ恐れ、それこそ極内密でまた、こつこつ、ほのぼのである。何の因果かと思ふのだ。

*

「種馬の牧場でも見に行つた方がよかつた。」と私はまた灰色の空と海とを眺める。

それはかういふことなのだ。

いよいよ高麗丸が錨を下ろすと、船中が一齊にざわつきだした。私たちもすつかり身支度を濟ました上で、ともかく甲板の腕椅子へ凭つて、初めて見る小樽港の眺望を物珍らしく取沙汰してゐると、「やあ。」と麥稈帽をとつた紳士があつた。名刺を出すのを見ると、札幌鐵道局の電氣課長のA君だ。庄亮とは學友なのださうだ。そこで庄亮がまた「やあ。」と立つてゆくと、その人は一寸物かげへ引つ張つて行つて何か手眞似してゐた。

「やあはつはつ。」と庄亮が頭をかかへて、顔を赤くしながら笑ひ笑ひ出て來た。「どうしたんだ。」と訊くと、

「そのなんだよ。」と生眞面目になつて、「種馬の交尾をないしよで見せたいと言つてるがね、君、どうする。」

「ほう、何處で見せるんだ、それは。」

「道廳の牧場だと言つてゐたぜ。すばらしいんださうだ。」

「そりやさうだらう。だが、今晩の歡迎會はどうだ。」

「それもだが、君が校正を濟まさないと、僕は鐵雄さんに申譯がないがね。晝間中は勉强してくれたまへよ。上つたらすぐ旅館に鎭座さして、誰一人寄せつけないことにするからね。」

「籠城かい。だが君、今日一日引籠つたところで、とてもできさうにないよ。だから、

「だが、僕は困る、ちやんと仕事させますと約束して來たんだからな。」
「驚いたな。君の監督も怪しいもんだぜ。」
「あつはつはつ、僕だけは一杯やりに行く。君の邪魔になる。」
「置いてきぼりかい、いやだなア。」
で、種馬見物は歸りにでもといふことにしてもらつて、ぞろぞろと出迎ひの歌人たちに交つて階梯(はしご)を下りかける、すぐにランチに飛び移ると、
「兄さん、おい、兄さん。」と別の大型のランチから、逞しい面の淺葱の背廣が呼び立てた。
「やあ、Oかい、ゐたのかい。」
「ゐたのかいもないでせう。わたしが小樽に來てゐることは、兄さんだつて知つてゐる筈だ。もう一年にもなるぢやないか。のんきだな。」
「のんきだと言つても、すつかり忘れてゐたんだ。あつはつ、ゐたのかい。」
「ゐたのかいもないもんだ。さつきから二度も三度も呼んでゐるぢやないか。」
「そりやあ誰か呼んでるとは思つたさ。だが、俺を呼んでるとは思はなかつた。君だつたかい。」
「さうさ、ランチまで持つて來てゐるぢやないか。早く此方へお乘んなさい。」
庄亮は「あれは僕の甥でね。やつぱり印旛沼だよ。あつはつ、すつかり此處にゐたのを忘れてゐたんだ。」と笑つた。甥といつても大きい甥御さんだつた。元氣潑剌としてござる。

そこで皆が大型の方へ乘り移ると、ぼうと汽笛が喚く。搖れる搖れる。煙が吹きまく。壯快々々。海岸には西瓜の山だ。丘だ。煙突だ。レールだ。そして防波堤だ。浮標(ブイ)だ。波を蹴立てて、風の薄寒い港内を一まはりすると、ランチが岸へ著いた。横濱を出て四日ぶりで陸地を踏むのである。うれしくないことはない。氣が輕い。それが一二町も歩くか歩かないうちに、旅館へ送られて了つた。
「實は、その、白秋君はね、仕事を持つて來てるんで、非常にいそがしいんだ。で、一人で置かないと勉强して貰へないのでね。とにかく奉つて、夕方の歌會の時に迎へに來てほしいんだがね。實言ふと折角A君が種馬の交尾を見せると言ふのを斷つたくらゐなんだからね。」
早速にその社中の歌人たちを歸すと、庄亮自身も飛び出して了つた。
やれやれと私は思つた。それからくるつくるつの子鴉の啼聲になつたのである。
私は浴衣の肩や膝や疊の上に卷煙草の灰ばかり落して、手は赤インキだらけになつて、それで何一つ片づきさうにもない。
午も過ぎたが、連れも歸つて見えない。電話はきらひだし、手はたたいてもきこえず、やつと廊下を通る草履の音を聽いて、そこで晝飯の支度を命じたが、待てども待てどもお膳は出ない。いつたい、北海道の旅館は悠長だとはきいたが、これには驚いた。
上陸する匆々一人でぽつんと膳に向ふのは寂しいものだ。ビーフテキの堅いことがまた、切れる筈

のナイフさへ徹らないのだ。女中はつつましいが、想像してゐたやうな東北辯ではない。楣間や床の置物などを見まはしてもやつぱり東京だ。で、寂しいが旅情といふほどのものは起らない。もつと違つた意味で寂しがりたい私の心もちはすつかり裏切られた。

全く私は北海道の旅館といへば、もつと暗鬱で、女中などはアイヌみたやうなのがゐて、言葉も碌に通じはしまいと、迂濶にも思つてゐたのだ。それがまた非常な興味を豫想させられたものだ。これは幼年時代の恣な童話的空想がそのままに頭の何處かに殘つてゐたらしく思へる。

二十一二の頃、さうだ、私が石川啄木に逢つてまだほんの二三度目の時だつたと思ふ。

「君のお國はどちらです。」と私が訊いたら、

「盛岡の在です。」と彼は答へた。

「さうですか。奥州や北海道は、僕の國では鬼でもゐさうなところだと思つてゐますよ。五六百里も北だからね。」それはほんの何の氣もなく、寧ろ親和の心で私は微笑して言つたが、それが彼の性來の癇癖にきつく障つたらしい。私には答へないで、すぐに、隣りにゐる人に向つて、

「I君、君も鬼のゐる國の人だね。」

と兩肩をヌッと怒らして言つた。それで私は吃驚して、

「君、君、僕の國だつて熊襲だからね。」と大眞面目であつた。

「ぢやあ、鬼の一種だね。」

「うむ、さうだよ、君の方から見れば鬼の一種だらう、やつぱり。」

あの頃も、何かといへば反抗心の強い、負けずぎらひの少年だつたな、啄木は。尤も細君は有つてゐたが。

「姐さん、ちよつと、このビフーテキを切つてくれないか。」

と、今も私は頼んだ。女中はカチカチやつてゐたが、その皿がお膳から反りかへりさうになつても、コチコチで、そのうち、カチヤカチヤ、くるりと、皿ごと廻つて了つた。

「牛肉と馬鈴薯」といへば、獨歩の小説から聯想しても、北海道には野となく丘となくふかし立ての馬鈴薯が雪のやうに積り、熊の毛皮を著た髭むじやのアイヌやシヤモが、その中に群居して埋まつて、それらの窓や戸口から、手や頭やを出すとむく〳〵もぐ〳〵馬鈴薯ばかりを食べてゐるやうな氣がした。いつたい誇張は藝術なりで、私は何でも大袈裟に物を考へるのが好きな方だ。だから、牛肉でも、あの牛屋に吊したやうな赤と白茶の片脚だけのが、内地は百姓屋の軒や周圍の荒壁にぐるりと掛け連らねた唐辛子、唐黍、大根の如く、いや、それを十層倍にしたぐらゐの大きさのものが、まるで牛肉の祭禮のやうだといいと思へたものだ。それがすつかり幻滅して了つた。

それに口取も猪口もお椀も、何から何まで、貝類ばかりなのにも弱つた。これでは夏の江の島へ行つたやうで、北の小樽とは思へない。

やつと食膳を片づけさして、またぽつねんと一人になると、やつぱり札幌の牧場にでも行つて種馬

の見物でもした方が、よつぽど有意義だつたらうと悔しくなる。雄大な自然の中で、奔放な種馬が跳躍し交尾し歡喜する壯觀は、それは稀に見るすばらしさだらうとも思へる。それに光り輝く光線、風、草いきれ。

それなのに、私は幽靈の二乘を背負つて、折角の眞夏の旅の一日を引つ籠つてゐるのだ。

たまたま下の洗面所に顔でも洗ひにゆくと、眼に入るものは、赤錆いろの鐵分の强い坪ばかりの池の水と、萎えきつて生色のない八つ手の一二本である。

*

二時頃になつて、庄亮が、小樽新聞社のM氏と連れ立つて歸つて來た。二人とも相當に醉つてゐる。氏は三木羅風君の義父さんだと紹介される。そこで羅風君の話が出る。つい此の出發の前夜に私たちが逢つたことも私は傳へた。M氏は庄亮のお父さんの永年の乾分だと自身をしきりに私に知らしてゐた。醉眼朦朧としてゐられた。

「何處で飲んだのだい。」と私は庄亮をふり返つた。

「いや、つい近所の洋食屋だがね。」と言つてゐるうちに、女中はトマトにマヨネーズソースをかけたのと、蟹のコキールとを二皿持つて來た。これらは感心に勉强してゐたので御褒美ださうである。

牛肉はコチコチだつたが、トマトの新鮮で美味なのには驚いた。流石に北海道だと思へた。

これは素敵だ、これは素敵だで、たうとう私一人で食べ盡して了つた。

さうして光りかがやく紅のトマト畠を想像して見た。さうした北國の野菜畠の外光はどんなに爽快だらう、さうした畠の斜面は。

嘗て小笠原の父島にゐた時、私は朝となく、夕べとなく、この赤いトマトを食べ恍(ほ)れてゐたものだ。だが、亜熱帶のそれは何かしら熱氣が深く籠つてゐて、これほどの冷え冷えとした舌觸りは無かつたやうな氣がする。

ただ、あの島の日光は全く金色に照り輝いてゐた。午後の二時三時になると、眞つ白い雪の光までが底深い金色にぎらぎらした。どんな油繪具でも、あの强烈な光は出せなさうに思へた。それに犬の男根のやうな若芽の護謨苗や、淺綠の三尺バナナや、青くて柔かな豆の葉や、深い綠のトマトの葉、褐色の鳳梨(パイナップル)やが、朱紅色の土の上に、まるで印度更紗のやうに、いやそれよりも生々しい極彩色の繪模樣として綴られてあつた。その中に鍬打つ人もその朱紅色の土の香を深く嗅いで、悶絶しさうであつた。素つ裸で。

と、島獨特の黃色い圓い面をした童子が赤いトマトの累々とつまつて盛り上つた竹の籠を兩手に擁へて、山坂などを上つて來る。その髮の毛に圓光が立つ。私は或日、とある山道の曲り角でさうした童子と、突然に遭遇(であ)つて實に驚いたものであつた。行き過ぎてからでも私は後ろを幾度振り返つたか。禮拜したくもなつた。

だが、小樽や札幌のトマト畠が果してどうした香氣の風景であるか。その漿水の發散は、光線の層積は、まだ私の眼には浮んで來ない。

「吉植君。君も印旛沼を開墾したらトマトをこさへろ。」

「こさへるとも。」

「五十町歩すつかりトマト畠にしてしまひたまへ。」

「やああ、それでは飯が食へなくなる。」

*

私の語法は現在格で進める。この方が樂だからである。

そこで、フィルムが變る。

夕方、庄亮の主宰する橄欖社の小樽支部の人たちや、此處で出してゐる「原始林」の同人たちが五六人で迎へに來る。私の仕事はそこで一と先づ明日の出帆前のことにする。入浴して、さて晩餐を濟まして、會場へ行かうといふのだが、宿の方の支度が中々整はない。

「どうも北海道は悠長ですよ。」と誰やらが言ふ。

「それも何處か雄大でいいさ。」と私が笑ふ。

「雄大は妙ですな。」

八時半にやつと總勢で自動車に乘る。

馳る、馳る、私は早朝上陸して、この夜になつて初めて小樽の市街を見るのだ。

「や、明るい明るい。」

全く、通りは廣いし、電燈飾は華美だし、雜沓する群集も眞夏の輕裝だし、一々にそれらが鮮新な發光體となつて游泳して、兩側のショウウヰンドウの中までが、まるで水晶宮のやうに水々しく照り反すと、花屋がある、植木屋がある、それから活動小舍がある、繪看板がある、幟が竝ぶ、銀座と六區とを一つにしたやうな殷賑である。

「緣日だね。」

と言ふ間に何か公園の入口らしいところで自動車が停まる。矢野倶樂部である。

二階の廣間へ上ると、四十餘名の會者がすでに集つて三方に居流れてゐる。床柱の前に二人がすゑられる。みんなが一齊にこちらを向く。さうして堅くなつてゐる。

潮音の舊い社友で、土地の歌壇で元老株のお醫者さんの山下秀之助君が一場の歡迎の辭を述べて、これが濟むと、また皆が私の方を向く。講演は嫌ひだから初めからお斷りしてある。それにどうも挨拶といつたところで、私なぞは結論が序論と一緒になつて了ふので、一言二言いへばいつもそれでおしまひになるのである。

ともかく、立ち上つて大廣間のまん中に進んでみた。

「エー、今晩は偶然の好機會で、かうして皆さんにお目にかかれたことを愉快に思ひます。何かいろいろお話したいと思ひますが、どうも私には結論が先へ來て困る、皆さんも顔だけ見ればいいと言はれる。で、兎に角これが私——白秋です。よく見て下さい、一寸と廻つてみよう。」

そして三遍同一點で、くるり〳〵と廻つたが、廻つてゐる中にをかしくなつて笑ひ出して了つた。

座につくと、「今のは踊の手が交つたやうですな。」と誰やらが言ふ。

「さうかな。踊ぢやないよ。」

庄亮はと見ると、本來が雄辯家だが一人で喋舌つてもわるいと思つたかして、簡單に、

「皆さん、ありがたう。」と頭を下げてすました。そこで一同が急に寛ぎ出した。笑ひ聲が方々に起つた。

それから歌會に移つたが、一方の壁に半紙一枚に一首づつ歌を書いて、四十餘枚の歌を一々に批評するのである。庄亮君は坐つたまま、

「このお歌を拜見いたしまするとう。」と一々に演說口調で言ふ。

私は貼紙の傍まで行つて、朱筆で、難點に傍線を引いて、何かと指摘しては、かうむつかしくしてはいけないかなとも考へさせられる。庄亮は手馴れたものだが、本來私には歌會の形式が好きでない。

思ふに運座とか互選とかは、かう大勢ではともすると無意義になるのである。一視同律であまりに

酷しく批判すれば、初心の人は怖け、又は恨むであらう、また眞に熱意の無い人が二三あるとすると、さうした人にいかにこちらから說話しても眞實に要を得させることはむつかしい。で、先方の心が眞に道を求めようとして動きかけるまでは、默つてゐた方がいい。と私は常に思つてゐる。一つには自分にも出來もしない癖に差し出るまでもないと思ふからである。

だが、この晩の歌會は非常に靜肅に了へた。よく統一されてゐた。

二次會は新中島といふ宏壯な家で有志の人たちだけで催された。煌々たるシャンデリヤの下で、置酒交歡、感興成つていつ果つべくも見えない。土地の美妓も數多見えた。半折や短册を後から後から と書かされる。初めには忸怩として差し控へたが、醉ふに從つて書くに從つてただそのことがうれしくてならなくなる。踊もをどつた。伊奈節や麥搗踊、一同が輪になつて踊つて廻つてゐるうちに夜がほのぼのと明けてしまつた。

「あまり書いてはいけないよ。」庄亮から叱られる。歸り途の自動車の中ではO君から、

「あまり踊つてはいけませんよ。」と、また叱られる。

「おもしろくてしやうがなかつたんだ。やあ。」

ちよいと頭をかかへて了つた。

*

「や、すばらしいトマトだな。」

若紳士戸塚君が實に清新なトマトを一籠提げて來た。

「これはいい、船で十分に食べられるぜ。」と庄亮が喜ぶ。

「大きいのは俺が食べることにする。」

「や、そりや兎に角、君は仕事はどうしたい。」

「もう止した。幽靈の重荷は御免だよ。それにとても間にあひさうにない。第一昔の歌ばかり改訂してゐたんでは、何のために旅行に出たかわからなくなる。陰鬱になる。君の監督はこれで辭任してもらひたい。將來に生きることをしないでどうするのだ。僕はこの旅行を全然樂しむ。」

「さうか。わかつた。もう何にも云はぬ。」

さあ出かけようとなる。決斷して了ふと、心から晴々しい。口笛でも吹きたくなる。往來に出る。

心は輕く、氣は安し、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く……

「やあ、先生。」と九州男子のY君が胸を反らして髭をひねつて來る。

「やあ、どうしました。」

「定山溪へ行たて來ましたたい、團員は誰でん行た。そりやあ面白かつた、盆踊が。ほんによか溫泉ですばい。それから、誰でん知らんばつてん、わしだけ上の方に今朝早う行たて見ましたもんな。よかつたあ。川に白い鳥が二羽浮いてゐましたたい。短艇も貸さすもん。お歸りなつとん行たてみなはるとよか。そりばつてん、熊ん出ますもんな。うむむ、まだ今は出んち言ひよつた。」

日本醫專の生徒の美少年のSがまた角帽で、繪具函を片手にぶら提げ、小躍りしながらやつて來る。

「先生、札幌はいいです。あかしやがいい。大通りの中に花畑があつて、子供が遊んでゐて、實際美しかつたですよ。東京よりいいです。それに大學や植物園の楡がいいです。素敵。」

「ほう、いいな。畫いて來た。」

「ええ、澤山。」

京都の若い警部さんで、溫厚で眞摯な紳士A君がまた眼鏡を輝かし輝かし歸つて來る。

「牧場はいいですよ。月寒の牧場は。雄大で羊がゐて。ええ、行つて來ました。向うに野幌の原始林が見えましてね。それに地平線までが綠ですからね。尤も月寒は夕方がいいさうです。夕日の頃が、羊を追つて歸る頃が。まるで日本ではありませんよ。」

惜しいことをしたなと思ふ。

と、飄々として下の關の車輛會社の中爺さんが來る。

「先生、ようべはお樂しみ。お盛んでしたな。へへへ。」

「や、あんたもあの家へ行つてゐましたかね、向うで騒いでゐたのはきつと、さうだ。」
「先生、鎌かけよつとばい。そげんすぐ欺されなはんならでけん。こん爺さん嘘言ひたい。なあん、小樽で遊ぼか、定山溪に行たとらしたですたい。」
「ふふ。」と爺さん笑ひ出した。
「わしあ、よか事した。今日たい。小樽へ歸つて來つと馬車ん一臺居つたもんな。そこで五圓札ば、うんち投げ出えて、何處つちやよかけん、五圓がつ汝がよか事駈けさせち言うて、ぢやらん〳〵ぢやらん〳〵駈け廻つたもんですたい。愉快でしたもんな。大臣になつたごたつた。」
ランチだ、ランチが出るぞう。
ぼうう……。ランラン、ラン、ジャン、ジャン、
「やあ、高麗丸だ、高麗丸だ。」
「幽靈退散萬歳。」
「さうだ、萬歳。」

心は輕し、氣は安し、
搖れ搖れ、帆綱よ、空高く。

おおい、おおい

光り耀かぬ波、一面に滑らかな乳黄色の波、何かしら薄ら寒い遠い眺めの海。明るいやうでも、それは燻されてゐる。何かしらまた空にも寒い靄がかかつて、窮みもなく日の光が光らずに流れてゆく。小樽を出てからの展望はいよいよ北海らしい感じを深めて來た。それに幾分は曇天でもあつた。ともすると明日あたりは雨になるかも知れないとさへ私にも思へて來た。
「見たまへ。あんなに日が當つても、波の面一つ光らないんだからね。」
私の友はかう言つて、甲板の籐椅子から延びあがつて見て、またのそりと腰を下ろした。ノートにしきりに歌を書きつけてゐる。
「さうだな、何だか急に晝が短くなつたやうだ。」
私も隣の籐椅子に凭りかかつて、しげしげと何か白い鳥の飛ぶのを眺めてゐた。
「お腹も空いたやうだな。君、何か食べないかい。」
「それより、お湯にはひりたいね。」

「さうだな、夕飯でまた一杯やるとして、その前にはひつとくかな。とにかく紅茶でもとらうや。」
「よく、君はいけるね。よつぽど健康な胃ぶくろだと見える。」
「健康だとも。いいかい。呼鈴を押すぜ。」
私たちはまた自分たちの談話室にはひり込んで了つた。
と、例の九州男のY君が、一人の實直さうな白面の若者を引つ張つて來た。
「やッ、先生、この仁ですたい。松浦王の息子さんですもんな。ほんによかけん。」
「ほう。」と私はその方を見た。「さあどうぞ。」とクッション附きの華奢な椅子の一つを指した。
Y君はどかりと窓際のソファに腰を下ろして、ぐつと後ろへ凭れ氣味になる。
「出して見なはり、その鑵詰ば。」と、それから此方を向いて、
「こつですたい、鯨の鼻骨は。粕漬ですもんな。まだ野菜漬もあつたろが。うむ、そりそり。」
と、またもう一つの鑵詰を新來の客に出させる。
「こりば、先生に上ぐつち言ひよらす。食べてみなはつとよか。そりやうまか。小樽で買うて來らしたたい。自分の家の鑵詰ですもんな。うむ、日本中の何處行たつちや賣つとる。」
小松浦王はまだ立つたままだが、溫和な微笑を面に漂はして、謙遜に、而かも何處かに闊達な意氣をひそめてゐる。口數が極めて少い。やさしい眼だ。
「それは有難う。それではウヰスキイでも拔くかな。」

そこで、角罎の栓がポンと鳴る。鈴の釦を押す。ボーイが來る。扇風機が廻り出す。
「へへへへ。」と赤ら顏の車輛會社のS爺さんがひよろりとやつて來た。もうだいぶきこしめしてゐる。
「お酒盛ですかい。先生、わしはお恨みを申しに來ましたがな。へへ。」
「どうしたのです。まあ、お掛けなさいよ。」
「ええ、有難う。」と、ソファの尻、Y君の隣に、ぐにやりとして、兩膝に手をついた。眼がとろんとしてゐる。鯨の赤肉みたいやうな顏の皮膚だ。
「支那服ですがな。支那服。あれは喜んで進上申すと、このY君にも言うときました。先生の御希望ぢや。それはありがたい。結構ぢやで、喜んで、進上と。」
「こん人醉うとる。もうそげんか事言はんちやよか。」Yは元氣だ。
「いや、お恨み申す。それをそのお返しになつた。これは理窟ぢやが、折角の志。」
「そりやあ、僕も欲しかつたんだがね、ちよつと惜しさうに、あんたがしてゐたと言ふから、お返したまでさ。人が物惜みするのを貰つたつてしやうがない。」
「物惜み。これはをかしい。いつたい、どの仁がさう申したか。怪しからむ事ぢやな。」
「俺が言うた。ほんな事ぢやろが。」とY君が口髭をキウと一つひねつて、
「うん、よかたい。一杯飲みなはれ。」
「いや、いただきますまい。わしがボーイを呼ぶ。さういふ事なら、一倍お恨み申す。わしの面目が

丸つぶれぢや。先生、御用心さつしやれぢや。今度こそはどえらい仕返しをし申すで。」

「よし、よし、わかつた。わかつた。」

「わかりやしませんがな。わしの子分を連れて來る。ボーイ、麥酒(ビール)だ、麥酒(ビール)だ。——おおい。」

ふらふらと立ち上つて、そのまま甲板へ出たかと思ふと、

「おおい、おおい。」

おおい、おおいと、海豹(あざらし)も
海のなかから呼んでます。
どうせ、薄雲、北の海、
おおいおおいで日が暮れる。

*

たうとう日が暮れて了つた。

いかにも何かしら物寂しい風と煙である。色と響である。光の無い上の世界と下の世界、その間を私たちの高麗丸のスクリュウが響く。機關が熱(ほて)る。帆綱が唸る。通風筒の耳の孔が僅かに殘照の紅みを反射する。

あ、書くのを忘れた。あの後、私は專用の雪白の湯槽の中に長々と仰向きになつた私自身であつた。船中でも入浴ほど心の安まるものはない。私は湯にひたり、薄紅い角の石鹼をいつまでも私の兩掌の中に弄んでゐた。なんと溫かな、いい匂であらう。私はまた蓮の實型の撒水器の下に立つて頭からさんさんと水を浴びた。新しい浴衣の下に、改めて薄いメリヤスの襯衣を著こんだのはそれからであつた。思ひなしか、ひえびえとした氣流が昨日とは何か變つて感じられたものだ。

私は船室(ケビン)の前に出て、空いてゐた籐椅子の一つに凭れてみた。一列にみんなが竝んで、誰もが蒼茫と暮れてゆく北海の薄明りを眺めてゐた。全く物寂しい風と煙であつたのだ。

フネガデルデル、カラフトへ

小樽を出る時、私は小田原の妻子へ、かう打電したものだ。つい三四時間前のことであつた。私達は一旦著換を濟ますと、しばらくは右舷へ集つて、應接に遑もない鮮綠色の海岸線を物珍らしく樂しんでゐたが、一人減り二人減りすると、私もまた左舷の自分達の甲板へ還つて來た。其處には先に言つたやうに遙々とした大洋があつた。あの光の無い、ただ明るいだけの波濤の連續が。

その波濤の面の金と紅とが乳黃となり、やや寒い瓏銀となり、ブリュウブラックとなり、重く暗くなり、さうして今は舷下の飛沫と潮溫(しほなわ)とがただ白く靑く駛つて、擾れて、機關部の汚水がタッタッと吐き出されてゆく。

一寸したウヰスキイの醉は、すぐにも發散したし、湯上りのやや肌寒を感ずるところへ、明日はい

よいよ樺太だと思ふと、何か氣も昂れば、引き緊つても來る。

「おい、何を考へてる。」

かうした時、ぽんと肩でも叩かれたら、私は恐らく顔を赤めたであらう。

「鄕愁だな。」

さうしたものだらうなと私は私自身にも答へてもみた。

私ばかりでなく、これは籐椅子、木の椅子、安樂椅子のこれらの一列の人々の凡ての顔にも表はれてゐる。

おおいおおいと誰やらが
海のはてから呼んでます。
どうせ、ぬか星、北の海、
おおいおおいで日が暮れる。

と、一齊に燈が點く。ヂヤランヂヤランと銅鑼が鳴る。

*

煌々たる食堂。それが却つて明る過ぎて、何か今夜は堅苦しい。誰でもが緊張して、以前とは樣子が違つてゐる。それは、札幌鐵道局の役人たちと、小樽からの新來客の二人とが加はつた爲の、ややし得ないであらう。それに一同の鄕愁である。とはゆかなくとも、近づいて來る目的地への期待と何となく油に水をそそいだ氣配もあつたかも知れぬ。その人たちにとつて初めての晩餐ではあり、匆々寬げもとない或種の武者ぶるひもある。

ここで、この一等船客の食堂について、多少の說明をして置かう。先づ食器棚の兩方の入口からはひると、奥の正面にはピアノが一臺裝飾的に据ゑてある。ピアノの上にはどす黑いラヂオの喇叭が載つてゐる。その室內には白いテーブルクロースを掛けた食卓が三列に流れ、中央のにはピアノを背にして船長が腰かける。船長はいかにも穩かな溫顏の人で、先づは無口に近い。やや前踞みでいつも默默としてナイフとフォークとを使つてゐる。それに向つて事務長が末座に位置する。長身のまだ若いが、職掌柄だけに凛として氣の利いた顏貌と風采の持主だ。左舷寄りの上席には門司鐵道局の船舶課の、可なりの上役らしい人がすわる。この仁は鼻も高いが、いくらか權高のすつかり官僚風にできてゐる。これらの三つの座席は必ず極まつてゐる。船客の座席はどれと定つてはゐない。自由ではあるが、中央部には、下の關や神戸から乘つたO・M・A・K・D、それにH夫妻その他が既に早やお極まりのやうに兩側に居流れてゐる。O氏は日露戰役の志士沖禎介氏のお父さんで、肥前は有田の辯護士である。もう六十を越えて、それで前額は禿げてゐるが、矍鑠としたシヤンとした老人である。鄕

里ではその子の禎介氏の記念圖書館の館長をしてゐられ、老後を全く壯烈な忠死を遂げた、その子の名譽を己れの圓光として生きてゐる人である。親としてはこれほどの光榮もなからうが、その子としてはこれほどの孝行もなからう。この人が團長に擧げられたのも忠孝竝びいたる禎介氏の功績が與つて力がある。少々は酒がいける。Mさんは神戸の綿商である。言ふところによると、美術院の大觀觀山等の極めて親しいパトロンださうである。飄逸な反り型の赤ら顔だが、どこかに俗つぽい、好きで醉ふと贅六句調で、變な唄ばかり歌ふ。A博士は電氣學者で京都の大學教授である。髪をキッと分けて、角ばつた頤の、眼鏡の奥に謹直らしい眼を光らしてゐる。絶對に禁酒家である。もとは可なりいけたさうであるが、今は何か病後でもあるといふ。一二度はその夫人も竝んで見えたが、すつかりこの頃は影をひそめて了つた。同行の令息とでも一緒かも知れぬ。令息ははつきりと覺えぬが三高の學生らしい。建築家のK氏は我が親友の木下杢太郎の姉さんの夫にあたる人で、彼を準養子にされてゐる。胡麻鹽頭の、金緣眼鏡をかけた、顔の白い、一寸學閥風の老紳士である。尤もらしい態度でやや中背だ。少しは飲めさうだ。津輕海峽あたりからそろそろよい機嫌になつて來られた。これは內密だが、一寸長唄に懸腕直筆で富士山の畫がお得意だ。D中學校長は溫厚そのものといつていい。圓い眼の笑へば眼尻が細くなる。棗面である。酒にはすぐに赤くなる方である。團員名簿に會社員と記されたH君夫妻は小倉から出て來た。土地では相當の資產家らしい。夫君はまだ若いが代議士の候補にも一二度は立つたとも誰かの話であつた。船員を除いて、この人ばかりはいつも黑の背廣を著て來る。

浴衣がけなぞにはなつたためしがない。髪をオール・バックにチックで反らして、美髯の、瀟洒な風姿であるが、何か氣取つて、笑ふにも聲もさして立てず、肯き肯きする。腕を拱む。ボーイに麥酒ひとつ呼んだことがない。夫人は先づ船中一の美人であらう。細つそりして、色が白い。身重で、時には面やつれがして見えるが、そのせゐか何かコケチッシュにも感じられる。童謠音樂會の時はこの奥さんが、私の「あわて床屋」をピアノで彈いたのが導火線になつた。だが一曲彈いただけですつと居なくなつて了つた。若い學生たちの亂酒と騷擾とに驚いたのだらう。食堂ではチンと澄ましてゐる。それが今夜は鼠色の眼鏡をかけて、急に寂しくなつた。

私と庄亮とはO氏やA博士やH君夫妻を向う斜めに見わたせる、船舶課側の窓際のクッションに凭れる。末席の方だが、このテーブルには若い船醫や京都府の警部さんのA君やと大概は同席である。だが、今は私たちの前には某銀行の重役のBさん夫妻が竝んでゐる。私たちの隣室の客だ。Bさんは下り眉の濃い眼尻のたるんだ中老の惠比須顔だ。サイノロジイらしいなと誰かが噂した。妻君は桃いろのスカートで、歩くときには、その健康さうな圓いお腰がくるりくるりと彈む。これも誰かが手眞似をしては怪しからぬ笑ひ聲を立てた。顴骨が高くて、さほど美しくはないが、近代的とも言へば言へる魅力を持つた顔だちだ。頭取さんは甲板ゴルフが好きとみえて、午前も午後もぶつ通しの、相手を集めては莞爾として杓子棒で玉を突いたり飛ばしたりしてゐる。下戸でその方は話にならぬ。ただお二人はいつも御一緒である。だから若い者がやきやき騷ぐ。

右舷寄りのテーブルには、音樂會の晩、私に利休鼠の頭巾を貸してくれた、小さな小さな商人風の、若山牧水に似た顔のお爺さんと、その連れの須田町のある旅館の主人だといふ、これも江戸つ子式の快活な中爺さんと、例によつて酒が賑やかだ。これは珍らしく向うの隅つこで氣勢を擧げる。

私たちの席はいつも私たちだけが殘されて了ふ。時には外のテーブルに鞍替してみるが、何處へ行つても殘されて了ふ。つまらない事おびただしいのだ。船舶課の側へずり上つたところで、何だかお役所風で話が堅くなるし、中央は占領されてゐるし、たまには例の白髪の、牧畜家の、活氣縱横な和製タゴール氏と對ひ合になることもあるが、まだまだ十分には雙方からうち解けない。

かう見わたしたところ、その他の船客たちも何れも相當な紳士ばかりで、至極々々におとなしい。それらが申し合せたやうに、今夜は不思議に靜肅である。庄亮までが、風邪氣味で咽喉を痛めたといふので、さして左が利かない。

「止すか。」

「うむ。御飯にしよう。」

何とまたH夫人の鼠色の眼鏡が寂しいことだ。

*

JOAK、こちらは東京、ガウ〳〵〳〵、放送、ガバ〳〵〳〵、局であ、グワウ〳〵〳〵、す、す、す、す、ヂヤオ〳〵〳〵。

「何だ、いつたい、こりやあ、しやうがないな。」

と、誰やらが、心細い聲を出した。まだ宵のくちの一等談話室のソファである。

「今頃は半七さ、グワウ〳〵〳〵。ヂャオオ。」

「ああ、ああ。」とまた一人が立ち上つた。

「ラヂオにもいよいよ見放されるのかな。」

と、また一人が、しみじみと、眼鏡をはづして、浴衣の袂で拭き初めた。

と、また新來の若い中背の紳士が、その臺の方へ行つてしきりに二つのレシーバーを耳に嵌めては、針を動かしてみたり、蹋(かど)んだり、透かしたりして見てゐたが、それも諦めたやうに、耳のをはづして、カチヤリと置くとこちらを向いた。美髪のどちらかといへば圓顔の眉の凛々しくつまつて、聰明な眼の、如何にも切れさうな態度でいい。餘程のラヂオ狂らしい。

「もういけない。ひどい無電だ。」

私はラヂオはどうにも好きでない。ラヂオを聽くといらいらしてくる。ああ、化物じみた、非音樂的の非人情の音響で、神經を刺戟されてはとても坐つてゐるに堪へられないのだ。一つには私が文明化された電氣といふものとあまりに交渉のない生活をして來たせゐかも知れぬ。この四五年こそ電燈の下で創作もしてゐるが、この十五年來、殆ど緣がなかつた。いや、ずつと以前にも、さうだ、明治

三十八九年の早稲田時代にも、私たちは下宿から下宿へ引越車の後を蹤いてゆく時にも、ニッケル製のランプを片手に捧げて、とぼりとぼりと歩いたものだ。大正の一二年にも相州の三崎ではランプであつた。小笠原では無論のこと。その後葛飾でも初めはさうだつたし、小田原へ移つてからも、二三年は煤けランプの油煙くさい臭氣をいつでも徹夜の曉には嗅がされた。それに電話は身ぶるひするほど嫌ひだし、田舍に引き籠つてからは、あの雜鬧する東京の電車にはとても飛び乘れさうにない。ラヂオ流行の時節にも到底救はれない舊人だとみえて、酒の座などで、いきなりワア〳〵〳〵と唸られると、それこそカツと癇癪が起つてくる。何で周圍に當り散らすのかわからぬ立腹が、たちまち私の眼先を眞つ暗にして了ふ。それがまた、地球外の不快な何かの囂々音らしい無電の妨害までが挾まつては、まるで惡魔の洞窟にでも墜ちたやうな氣がする。見放されてこそ仕合せだと思ふのだ。だが、日本內地からいよいよ私は離れつつあるのだ、それを思ふとまた、頼りない鄕愁も湧く。

「や、活動が初まつたな。」

總立ちに出てみると、もう、左舷の甲板は觀客でいつぱいになつてゐる。自分の船室への通路も全く塞がれて了つた。それよりか、丸窓もはひり口も燈が消されて、ほの青い光の中に、密集した低い高い黑い頭の壁際になつて了つてゐた。

で、私もその前に踞んで了ふ。

チカチカ〳〵〳〵、コチコチ〳〵〳〵、パッとまた幕面が白く明つてタイトルの圓が出る。

思ひがけない樺太風景である。

「や、鰊漁だ。すばらしい、すばらしい。」

現はれたる青い畫面には潑剌とした鰊の數千數萬本が飜る。小蒸氣とモーター船の甲板である。日光、漁夫、銛、舷側の飛沫。

影、影、影、光、光、光。

鰊だ、眼だ、腹だ、尻尾だ、雪崩だ、總雪崩だ。や。

密集、重積、氾濫、迷眩、混亂。

帆だ、帆だ、帆だ。

運搬、駛走、海洋、卷雲。煙、煙、煙。

と、碎氷船。

「大きいぞ。」と聲がかかる。

と、たちまち、船影は消えて、一面の氷結した極寒の海峽が眞白く、白く、暗い影の底から遙かに遙かに光る。輝く。寒い寒い雪だ。あつ、樺太だ、確かに。

と、來た來た、氷を蹴碎き蹴碎き、さつきの碎氷船が。

ピー。

あつと、一同が振り向くと、それは白髮の白い支那服のタゴール爺さんだ。吹きも吹いたり。とて

つもない鋭い口笛だ。「あつはつはあ。」「ヤハイハイ。」

バッパッパッ。「大泊(おほどまり)の光景でござい。」

雪、雪、雪、煙突、倉庫、店看板、防寒帽子、毛ごろも、手袋、がんじき、橇、橇、橇。スキーだ。スキーだ。

駛る駛る、樺太犬が、一四二四三四、五四六四、二列だ。

パルプだ。突進、突進、突進。

と、牛肉だ、肉塊だ、犬だ、頭だ、うおうおつ〳〵、頭、頭、頭、口、口、口、や、舌、舌、舌。

食慾だ。爭鬪だ。血だ、血だ、血だ。

「氷上の魚獲。」

靜かな月光、聲のない聲。雪白の幌内川(ほろないがは)の氷上に、ただひとつ穿たれたばかりの黑い穴。

ついと、こちらを見て笑つたギリヤーク土人の顏、しよぼしよぼの眼。毛皮の帽子。

や、また一人、二人、三人。

碎く碎く。一心に、懸命に、コツ〳〵〳〵〳〵。

振り上げた手、手、手。

跳ねた。水だ。や、魚だ。魚だ。魚だ。

黑、黑、黑、穴、穴、穴、穴、穴。

「馴鹿(トナカイ)。」

飛躍、飛躍、

角、角、角、

雪だ。パッ。「今晩はこれきり。」

ほつと、みんなが吐息をついた。

さうださうだ。これから今夜にも宗谷海峽を過ぎるであらう。

その先は韃靼海。

＊

「今夜は妙に濕つぽいぢやないか。」

「うむ、僕もどうも工合がわるい。あの、それ、いつか扇風機をかけつぱなしで寢たことがあるだらう。あれからのらしいのだ。咽喉が痛くて、惡寒がする。これはどうもいけない。」

「寢たまへ。今から病氣だと大變だよ。お、いい藥がある。」

私は立つて黑皮のケースを取り出して來る。

「獨逸製の藥品だがね。バイエルアスピリンといふんだ。かういふ時はありがたいね。」

「そりやいい、貰つて見るかな。」

「さうしたまへ。それから王様の寢臺は君にゆづるよ。交代だ。」
「しめた。俺も王様になるかな。あつはつは。」
「ははは、その元氣があれば大丈夫。ぢやあ寢たまへ。僕は少し仕事をしよう。何だか、やつぱり弟の方が氣になる。兎に角『桐の花』だけは濟まさう。」
「さうだな。さうしてくれるとありがたいな。僕も申譯がたつ。」
ぢやあといふことになつて、一人は別室の厠へゆく。一人は談話室のテーブルを引き寄せる。卓上には、水芋のやうな、青い縞入りの葉が大きいのと小さいのと二枚。南洋植物の一鉢である。電燈の光も靜かである。
「おおい、おおい、ボーイ。げつぷ、うえつぷ、げつ。」
ひよろひよろと、車輛會社が、セルの著流しで。
「や、御免。御勉强ですかな。これはお邪魔で。」
困つたと思つたが、さうも言へず、
「や、まあ、おかけなさい。」
「へえ、御邪魔なら、どうも失禮で。——歸りましよかな。」
「まあ、いいさ。」
「坐りましよかな。」

「どちらでも。」
「どちらでもとはおひどいな。そのなア、支那服の一件ぢやで、夕方、申しときましたろが。お恨みに存じ申すと、面目がつぶれた。わしの一分が相立たん。おおい、ボーイ。そこできつと仕返しにまゐると。なあ、さうでしたろがな。いけませんかな。げえつぷ、うう。」
「やりましたね。また。」
「へえ、どうもなあ、いやにその浪の音がな。どもならんというて居りますわい。」
「ははあ、弱つたね、それぢや。」
「弱りやしませんがな。支那服の仕返しぢや。飲みましよかいな。おおい、ボーイ。」
ぽんとボーイが飛び込んだ。
「拔け、P公。先生、これはわしの子分でな。いい男でせうがな。おい、拔け、コップを三つ持つて來おい。」
「持つてまゐつて居ります。」
「さうかあ。えらい奴ぢやのう。注げ。」
「へ、お注ぎいたしてあります。」
「やああ。これはどうも恐れ入る。よしよし。おつとつとうと。」
「君はSさんの附きかい。」と私はボーイの方を見た。

「は、さうであります。」
「軍隊式だね。」
「へ。」
實直さうな、それでなかなか怜悧さうだ。まだ二十二三だらう。小綺麗でいい。知識的な眼もしてゐる。
「これはな、先生。わしの子分ぢや。國のものでな。P公、うう、P公と申す。先生にお願ひがあるさうぢやで、わし、引張つて來申した。」
「どんなことかね。」私も笑つた。
P公は、「は。」と云つて、チラリとSさんの方を見た。
「申し上げ。なんで默つて居るのぢやな。よし、わしが言うてやろ。ええ、何かひとつ書いておもらひ申したい。さうぢやろ、何か書いて。」
「は。」と直立不動で、ニッケルのお盆を持つて、白服の詰襟である。髪を立てて撫で上げてゐる。
「持つておいで、短册でも、明日でいいだらう。」
「は。小樽で買つてあります。」と、ありがたうとは言へないで、頭を垂れた。
「そこでと、吉植さんは、おいでならんとかな。吉植さん。」
「吉植君は風邪で弱つてますよ。」

と、「やああ。」と寢室の方から、我が庄亮が浴衣の胸をはだけて、ぬつと坊さん頭を突き出した。ちよつと此方を見て眉を顰めたが、何思つたか、ついと出て來て、私の傍に腰を下ろした。
「どうもそのね、北原君は已むを得ない仕事があつて忙しいんで、困つてる。ビールは明日にしてもらへんかね。」
「これは御挨拶、痛み入る。然しぢや、先生はよろしい、飲まうと言うてござるぢやて、ようござりましよがな。お邪魔ならおいとま申す。それは失禮。だがな、どもならんさうぢやて、どもならん。」
「浪の音ださうだよ。」と私はまた笑つた。
「ええ、浪の音。さうぢや、あつはつは。いやにその。」
「まあいい。君寢てゐたまへ。障るとわるい。」
私はこれはやはりどもならんと思つたので、ビールのコップを執りあげた。
「困るなア、それではね、僕がお附き合ひしよう。よし、かまはぬ。さあ飲むぞ飲むぞ。」
「これはありがたい、夜あかしぢや。」
「夜あかしや困るよ。」
「あつはつはあはあ、そりや困る。」と庄亮が兩手で頭を引つ擁へる。やああとその上で手先を揉み上げる。
「や、Sさん、何處さん行かしたかと思つとつた、此處來とらしたたい。」とY君だ。はひるとどか

りとソファの端に腰を据ゑた。愛嬌のある圓顔の髭をちよつとひねつて、仰向いて眼を細めた。もう赤くなつてゐる。

「どうも。」と眉を顰めるとまた、赤つ面を振つて、

「さびしゆうしてならんけん。誰も彼もぐう〳〵鼾ばかりかいとつて、始末に了へん。甲板さん出てみたつちや、眞つ暗闇で、歩けもせん。星も出とらん。雨でん降りまつしゆごたる。」

「どもならんと言うて居りますわいだらう。Sさん。」

「へ、浪の音がな。その浪。」

「もうよし、飲まう飲まう。吉植君、君は王様の寢臺だ。」私も觀念した。だが、何か私とてもまんざら寂しくないことはない。キリ〳〵〳〵と帆綱の鐶も鳴つてゐる。

「や、僕も少しやつつけよう。飲むよ。飲むよ。」

そこで、三本にまた追加が五本、鯨の鼻骨に野菜の辛子漬。

キリ〳〵〳〵と帆綱の鐶。

浪の音がな。浪の音。

「おや、車輛會社はどうした。」

と、私は南洋植物の青縞の葉の下を透かした。

「や、行去した。オートバイでで逃げ出えたそな。」

「P公、P公、や、彼奴も行去たかな。」

「車輛會社にやかなはん。護謨輪でん何でんチャアンと持つとる。はつはつは。」

「おや、吉植もゐないぢやないか。寢たかな。」

「寢ましたくさい。弱つとらした。」

「弱るなア、僕も、寢ようかな。」

「でけん、でけん、行たて見まつしゆう。まだ誰か起きとるか知れん。」

「ぐうぐう鼾かいとつたといふぢやないか。」

「うん、あん時やぐうぐう言よつた。ばつてんが、もう誰か醒めとろ。車輛會社もパンクしとらすか知れんくさい。行たて見う、行たて見う。」

「行つてもいい。だが、ちよつと待ちたまへ。」

私ももう可なりに醉つてゐた。ふらふらする足取りで、隔ての青いカーテンを寄せると、所謂王様の大きい寢臺に近づいて見た。この寢室は全く廣くて贅澤な、それで清々しい好い室である。向うは浴室との戸になつてゐて、その横の壁にマホガニー色の裝飾を凝らした鏡附きの古風な化粧臺があつて、それに相當の空間をおいて、相對した壁に洋銀のダブルベットが備へつけられ、それには前面と

裾とに卵色の薄いカーテンが掛つてゐる。天井も同じ絹布で張つて、壁には網棚もある。平時は關釜連絡船で、このベットには朝鮮總督とか師團長とか最長官の用に供せられるのださうである。私は幾晩もこの白いシーツの上に白毛布を包んだ白いカバーを引つかけて眠つた。今夜は親友が寢てゐる。

私はそつと帷を開いて差し覗いて見た。すやすやと庄亮が眠つてゐる。少し斜めに壁の方に身體をねぢ曲げ氣味に片手枕で、毛布を蹴ぬいて、何かしら弱々しさうな息づかひである。

私は白カバーの毛布をはだけた彼の浴衣の胸まで引き上げて、それから、そうつと、その二分刈りの坊主頭の汗じみた額の上へと私の左の手を當ててみた。熱はない。が、私の掌には、その時、私の友の薄い眉毛の幽かなむづがゆさが染みついた。

私はまた差し覗いた、何といふ無造作な醉態だらう、この眠りざまであらう。

私は、ふらふらと、その足元に匍ひ上つた。さうして向き直ると、兩足をブランブランさした。

眠てゐる、眠てゐる、眠てゐます。
醉つてる、醉つてる、醉つてます。

「先生、何しとんなはる。行きまつせんか。先生。」
「おつ、ちよつと待ちたまひ、眠つてるよ、吉植が。」

「だが、心配だよ。ちよつと覗いて見よう。さあ手を握れ。一緒に行かう。」
「行かう行かう。」と私はそつと寢臺を飛び下りると、談話室を拔けた。
「吉植はよく眠つてゐるよ。なんだか俺は泣き出しさうだよ、よう、おい。」
ザザザザ、ザアッと浪が舷側を擊つた。外は暗い。キリ〳〵〳〵と帆綱の鐶が鳴る。
「先生。」といきなりYがかじりついて來た。逞しい大きい兩手だ。
「先生。わしも泣く。わしは、わしは子供を棄てて來た。見殺しにして來た。どうなつとるぢやいわからん。わしが出る時なア、もう危篤ぢやつた。とても助かつとるめえ。行かにやならん、仕方んなか。死ぬなら死ねち言うて出て來た。葬式は嬶アに賴うで來た。もう死んどろ、死んどるかも知れん。わしはこの胸ん中が張り裂きゆごたる。先生、泣えたつちやよかろ。」
「うむ、泣えたつちやよかぞ。泣け泣け、おれにつかまれ。」
きようきようと、何かが翔る。

*

「もうよし、君のところへ行かう。」
「ええ、行かう行かう。」
「や、ちよつと待て、一等の船室を廻つてみよう。みんなが眠たかどうか見て來よう。」

「よかよか、人ん事心配せんちやよか、金持どもは卑俗くしなん、構ひなはらんがよかたい。」
「よか、三等へ行かう。あつちも眠て了ふぢやいわからん。」
眠てゐる、眠てゐる、眠てゐます。
醉つてる、醉つてる、醉つてます。
「え、おい、歌はう歌はう。」
「眠てゐるですかい。
眠てゐる、眠てゐる、眠とらすたい。か。
醉つぱらつて、醉つぱらつて、梯子酒か。」
「おい、
眠てない、眠てない、眠てやしない。
醒めてる、醒めてる、醒めてます。

かう聞えないかい。眠てゐる、眠てゐるが。」
「歌うて見なはれ、もう一度、きこえるかも知れん。うむ、きこえるやうな氣もしますたい。」
眠てゐる、眠てゐる、眠てゐます。
醉つてる、醉つてる、醉つてます。
「おや、まだ起きてるやうだな。いや、風かい。」
私たちはもう、一等食堂の前の階段を下りかけてゐた。幾度か二人はつんのめりさうになつた。兩腕を互の首根つ子に廻して、お互にまた引きずつたり、凭れかかつたりしてゐた。
「お、よく眠てゐる。」
私はすつかり燈を消した暗い暗い寢室の間の廊下をそつと差し覗いた。さうして、盜人のやうに足音をひそめた。
「叱つ。」
「Hさん夫婦は眠てますかい。」
「莫迦。叱つ。」

その長い兩側につぎつぎと竝んだ淺葱の重いカーテンは何れもしつとりと垂れ下つて、そよとの音もしなかつた。すやすやとしたいい寢息がした。

「よく眠てゐる。萬歳。あつ。誰だか寢返りした。そうつと、そうつと、いいか、すり抜けるんだ。そうつと。」

私たちはまた肩を組んで甲板へ出た。

「今度は二等室だ。おい。」

「もうよかろ。もう起きとらん。」

「眠てゐりや幸だ。何だか、それでも寂しいな。行かう行かう。」

私たちはまた船尾の方へ廻つた。

階段を下りる。と、咄嗟に白い白い電燈の光がパッと眼に當つた。私たちはくらくらした。

危ふく轉びさうになつて、私たちはやつと私たちの身體を階段の欄干(てすり)に支へた。さうしておづおづと下を差し覗いた。

其處は通路を中にした廣い廣い雜居の寢室であつた。通路には紅い緒の草履や、スリッパが脫ぎ散らしてあつた。

兩側の雜然たる寢姿、それは白い蒲團は兩側に整列してゐるが、足元や枕元には旅行案内、地圖、トランク、雜囊、水筒、ゲートル、浴衣、洋杖(ステッキ)、蝙蝠傘、麥藁帽などが可なりに、はふりつ放しにな

つてゐた。

老いたるもの、若きもの、更に稚きもの、商人、學生、教員、畫家、牧畜家、官吏、玄人筋らしい老婆と娘、各種の中流階級の人々が、仰向き、横向き、斜め向き、手を曲げ、足を蹴ぬき、潛まり、反り出し、齒をむき、眼をあけ、品よく、或は露はに、卑しく、または素直に子供のやうに眠りこけてゐた。

「よく眠てゐる。よく眠てゐる。」

「あつ、起きた。」

と、左側の中央部に、互に蒲團をきつちり引きつけて、さうして、近々と向き合つて寢てゐた一組の若い夫妻の、その細君の方が、ふつと眼を開けて、驚いたやうにくるりと背を向けて了つた。

「あ。」

と言つたまま、私は階段を駈けあがつた。

「いけない、いけない。早く早く。」

私たちはまた暗い甲板の上を歩いてゐた。

「や、無線電信が起きてゐる。だな。ぢやないかな。そうつとそうつと。」

幽かな、それは幽かな金屬性の音律が、閒寂とした夜ふけの暗黑の中に、コチコチとカチカチと、それは遙かな白金光の小都會の何かの點音のやうに、絶えては續き、續きては絶え絶えしてゐた。だ

が、技師も今は眠つてゐる筈だし、無電でもあるまい。それでは何の音であらう。幽界からの音信でも、何かが觸知するのか。何か生きた者が、眼を開いてる者が、紙か、ペンか、受信機か、卓子(テーブル)か、椅子かの中にゐる。

「あ、きこえる、あ、きこえる。」

*

「おおい、誰(だつ)でん起きろ。おおい、先生が來た來た。來(こ)らしたぞ。」

船首へまた大迂回して、測量室の下まで來たところで、Yはいきなり大聲を擧げて、三等船室の階段を駈け下りた。

「居る、居る、パンクしとる。先生、車輛會社が居りますたい。早うござり。」

成程、車輛會社は、三つ四つ竝べた食卓(テーブル)の、とある隅つこと後ろの白ペンキの壁とにもたれて、ぐにやりと、全くのところパンクしてゐる。

「どうした、Sさん。」

「ううむ。どもならん。」

「浪の音、そりや、どつこい、浪の音ウか。どんこつ、おいか。」

「ううむ、お恨み申すぢやよ。」

「はつはつはつ、P公はどげんどんしたかな。P公。」

向うつ側の食卓(テーブル)の一つに、白服の詰襟のボーイ連、P・Q・Rが腰かけたままの突つ伏し姿で、どれもが一同にひつそりと、聲ひとつない。

三等の食堂は一段上になつてゐるので、下の雜居室は眞上からその儘瞰望(みおろ)せるのである。

「おおい、起きろ。や、起きとんな。しめた。先生が來た。さあ起きた。」

と、また、

「醫專、慶應、早稻田ア、二高、日本齒科、青年團、寫眞班、鹿兒島ア起きろ。」

と、起きた起きた。二等よりもより雜然たる諸相の中から、湧き出る、溢れ出る、轉がり出る、飛び出る、それ等の如く、蠢々として、哀々として、莞爾として、突几として、二人三人五人の青年たちがむくりむくりと起き上つて來た。

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「ほう。」

P・Q・R、もまた叩き起されて了つた。

「酒だ、酒だ。やらう、おい。やりまつしゆう、先生。萬歳だ。」
「やらう、やらう。」
祝杯。
「T君、君たちは起きてゐたのか。」
「え、なに寢てはゐたんです。こんな晩にはしやうがないんですからね。でも、眠つてはゐなかつたんです。助かつた。」
「僕も何ですよ、眠つたふりしてゐたんだ、つまらないんですからね。」
「俺だつて、さうだ。Sさんのパンクだつて知つてらあ。P公が弱りはててゐたぜ。」
「さうだ、さうだ、どもならんどもならんだらう。」
「浪の音ウさ。ふつ。」
「や、まあ、いい。それぢやまあ飲まうや。」
「有難い。」
「歌はう、歌はう。や、やれ。」

闘の五本松、一本伐りや四本

「や、誰だ。」と下を。
「おうい、こつちだ、こつちだ。」
「起きて來い。」
「行つていいか。」
「おいで、おいで。」
また一人が、むくりと飛び起きた。
「出よう出よう、ね、諸君、僕のところの甲板に來たまへ。ここは安眠妨害だよ。さあ、出よう。」
出ましよう出ましようで、一同がどかどかと階段を駈け上る。それ、ビールだ、コップだ、いいか。

でかんしよ、でかんしよと、山家の猿は、ヨイヨイ、
花のお江戸で芝居する。ヨウイヨウイでつかんしよ。
でかんしよ、でかんしよで、半年や暮らす、ヨイヨイ、
あとの半年や寢て暮らす。ヨウイヨウイ、でつかんしよ。

青年はいい。活氣そのものである。風の音も、大海の浪の響も、今は彼等の感興を煽るばかりに、暗く暗く輝いて來た。

「さあ、ここだ。たうとう還つて來た。そこで、そこらの籐椅子をすつかり集めた。さうだ。一列に、みんなくつつけて。よし、さあ、歌つた、歌つた。」

一同はこれに勢を得て、歌つたも歌つたり、「春爛漫」から「都の西北」「春は春は」のボート歌、「城ヶ島の雨」「あわて床屋」「かやの木山」「りすりす小栗鼠」「煙草のめのめ」「さすらひの唄」みんなが知つてる限りの校歌民謠童謠流行唄は一つも殘さず唄ひ終つて了つた。

「ああ、もう知らねえ。」

「草臥れて了つた。」

「寢ようや。もう。」

「萬歳。」

どつこいしよと腰を叩く奴、ううむと唸る、ああと一人が兩手を高く差し上げて欠伸をする、眼をこしこしとこするのもある。

「泣きたくなつたよ、おい。」と、また一人が駈け出して了つた。

「ぢやあ、これで解散だ。君が代君が代。」

流石は、そこで、肅として、竝んで唱へた。

ほろほろと涙が滾れ落ちさうになる。

「萬歳、さよなら。」

「萬歳、さよなら。」

「諸君。また明日(あした)だ、さよなら。さよなら。」

後はしんとした。

キリ〳〵〳〵と帆綱の鐶が鳴る。大海の暗黑の、風の、浪の響が、さうさうとして、急に凄く高まつた。

「先生、わし、先生の裾の方へ泊めてもらひますばい。よかろ。」

Yだけは跡に一人殘つた。さうして談話室までまたはひり込んで來た。

「泊る。泊れ。だが、どうかな、君は九州つぽうだからな。」

「莫迦言ひなさい。」

「俺はまだ美少年だし。」

「ふつ。なんちゆうこつぢやい。」

「言ふに言はれぬ、その。」

「へつ。莫迦言ひなさい。わしあ、そげん卑俗(げさ)きこつ知らん。」

そんなら泊れと、私はソファの一つに寢て毛布を引つかぶる。Yは鍵の手なりに、私の足へその毛むくじやらの兩足を向けると、すぐに、そのまま、ぐうぐうと深い鼾をかき出した。

私もまたそれなりぐつすりと眠入つたらしい。

ふつと、眼を醒ますと、まだ夜は暗かつた。足元を見ると、いつの間にかYの姿は掻き消えてゐた。
ああ、浪の音だ。
宗谷海峡も過ぎたであらう。もう夜が明ければ樺太だが。
キリ〳〵〳〵と帆綱の鐶。
空はまだ暗い暗い暗い。

おおいおおいと何やらが
海の底から呼んでます。
どうせ、くらやみ、北の海、
おおいおおいで夜もふける。

安別

薩哈璉州（サガレンしう）ピレオ　北方二里
アレキサンドロフスク　北方約三十里
海岸の白木の角標にはかう記してあつた。日露境界第四方とまた一面に大書してあつた。
十三日の午前のことである。どうにもひどい強雨であつた。

＊

本來から言へば、小樽を出て翌朝、私たちは樺太西海岸の本斗（ほんと）に上陸して、眞岡より野田へ汽車で行き、一晩泊つて、それからまた海路を國境の安別（あんべつ）まで續航する筈であつた。ところが、恰度攝政宮殿下の行啓と差合になるので、急に模樣換へになつて、そのまま北へ北へと直航することとなつた。その十二日は全く薄らさみしい日であつた。右舷にはいつでも鮮かな草の綠と寒い黑椴（くろと）の丘陵とが眺められて、何となく樺太らしい物珍らしさが感じられたものの、いよいよ北緯四十五度の線を越した

かと思ふと、曇天の日の圓までが、ただ白くぼやけて、さむざむと頼りなく仰がれても來た。海は黑く滑らかな大きいうねりが續いてゐるばかり、やつぱし明るいやうでも輝きはしなかつた。それに午近くになつてぽつりぽつりと雨さへぱらつき出すと、風までが、これに加はつて、どうにも怪しい雲行と變つて來た。

「今夜はともするとひどい時化になりますよ。」

すれちがひに私に挨拶した事務長の言葉がこれであつた。

「明日はうまく上陸できませうかね。」

「さあ、どうも、ちとむづかしさうですな。ここの海岸線はかなり荒いやうですからね。」

さうして帽子をちよつと脱いで、向うへスッスと行つて了つた。

これまで、私たちはあまりに惠まれた航海を樂しみ過ぎて來た。少しぐらゐは時化にでも遭つた方が面白さうな氣もしたが、夜に入つていよいよ本ぶりになると、誰もが言ひ合はしたやうに晩飯もそこそこに濟ますと、早くからてんでの船室に引つ込んで了つた。その中で一人、お能の笛を吹いてゐる音色がしてゐたが、それもすぐに止んで了つた。

終夜が波の響と風の音と、それに雜多の——それは檣に降る、船室の屋根の上甲板に降る、吊ボートに降る、下の甲板に降る、通風筒に吹きつける、欄干に降る、——雨の音であつた。船の搖れは益益激しく、私の所謂王様のベッドの洋銀の欄干、網棚、カーテンの鐶などは、しつきりなく音を立て

て鳴つた。

「おやおや。」と私は思つた。だが、いつのまにかぐつすりと眠入つて了つたものらしい。夜が明けると、早くから飛び起きて、すぐにメリヤスの襯衣に浴衣で、ドアを押してみたが、颯と來る雨霧に慌てて首をすつ込ますと、早速にレインコートを引つかぶつてしまつた。

「なるほど、樺太は寒いな。」

オートミルとフライエッグズと一二杯の珈琲。どうにも洋式の朝飯は日本人にはしつくりゆかないものらしい。そこで、その朝は船室に籠りきりで、番茶に梅干で溫まると、ないしよで味噌汁に飯をあつらへた。酒の翌朝はどうしても味噌汁に限るのだ。白い飯からはほかほかと湯氣が立つ。

「どうにもこれがいい。」

「うむ。やつぱりな。」

私と庄亮とは、自分たちの談話室のソファに凭りかかつて、それこそ水入らずで、また澤庵をかりかり嚙んだ。

「咽喉はどうだね。」

「まだどうもいけない。妙にそのう、ここが痛んでね。」と反對にぼんの窪を片手で叩いてみせた。

「濕布でもするといいんだがな。」

「いや、僕には按摩がいちばん利くんだがね。」

「あのアスピリンはどうだ。」

「やあ、あれも君のをもう半分もいただいたんだがね。熱は下つたやうだが、腹の工合がどうもよくない。」

「西洋の藥はさうしたものだよ。局部的なんだからね。利くには利くんだが、何かの反應が外へ禍する。所謂全科的ぢやないんだね。だから僕は草根木皮主義だ。漢法の方が東洋人には適してゐるよ。」

「さうかなあ。」

「さうだと思ふね。煎藥といふものは微妙なものだよ。たとへば風邪の藥にしたつて胃の藥も腸の藥も適度につまんで入れるし、十種も二十種も調合して、それは丹念に刻み込むんだからね。あれがまた同じ處方でも、やはりコツがあるさうだよ。極めて精神的なもので、それは創作的なものださうだ。藝術にしたところで、何といつても東洋精神に限るよ。」

「實相觀入かい。」

「近頃の歌壇の慣用語で言へば、さうさ。だが、寫生の語義を傳神とか實相觀入とかに轉用するのはちよつと變だね。寫生は普遍化された語義としてはやはり單なる寫生だからね。子規の寫生にしてからが、空想味の深い羅曼的な詩歌に對しての寫生說だつたんだからね。一種の反抗運動としてみるべきだらう。寫生文にしてからがさうだ。ありの儘の平面描寫といふことになる。南宗畫などの象徵的省略とは違ふ。若し寫生と言ふ言葉を文字どほりに生命を寫すと解して、傳神にまで深めて來るとす

ると、寫眞でも寫實でも、おなじ意味にとつても差支ないといふことになるね。だが、寫眞と言へば寫眞器械によつて撮影され現像されたもの、ハイカラに言へば印畫のことだらう。寫實と言へばまたゾラ以降の觀法だらう。應擧あたりの精緻な寫實もさうだ。だから寫生といふことも語義としては在來の寫生である筈だ。實相觀入にまで及ぼすぐらゐなら、もつと外の適當な言葉を持つて來るのが正しいだらう。殊に寫生の語義を內觀にまで利用するのは考へものだよ。サンボリズムとリアリズムとは楯の兩面だからね。それも主客圓融といふことは渾然として境涯的のものであつて、寫生は畢竟寫生に過ぎないからね。實感に卽する抒情までも寫生とするのは少々索强附會ぢやないかな。そんなことと言つたらまごころでさへ歌つたものは何でも寫生歌といふことになるね。だが、藝術上の語彙には一々特殊の色も香ひもあり、習慣もあるのだから、傳統的に意義づけられ差別されたものは在來の意義や差別をおとなしく受け繼いで置いた方が、混雜しなくてよささうに思ふね。それに寧ろ東洋の藝術精神は實を徵して虛に放つたところにあるのだからね。隱約とか省筆とかだ。で、實相の觀入と言つたところで、單なる平面描寫の寫生とは少くとも格段があるのだからね。もつと立體的な內觀的な象徵的なものだからね。ところで、話はまた草根木皮に還るよ。聽くかい。」

「あつはつは、こりやおもしろい。聽くよう。」と庄亮は、兩肩から首を振つて、豪傑笑ひをすると、兩手を蠅のごとくに頭の上で揉み上げた。

「いつたい、この頃は藝術でも教育でも何でも彼でもあまりに專科的分業的になり過ぎてゐる。でい

よいよ偏狹になり不統一になりやしないかと思ふね。我々にしたところで、詩人とか、歌人とか、やれ民謠作家だとか、童謠詩人だとか、一面からばかり見て、手つ取り早く何かに片づけられて了ふが、これは少々擽つたいものだな。何故一個の藝術家と見ないのかな。兎に角迷惑至極なものだよ。人體からいつても解剖的にばかり見るのは近代醫學の惡弊だな。だから肥厚性鼻炎の切開をすると肺や肋膜を惡くしたり、――それはどちらに基因があるかわからないがね――感冒の藥を飲めば胃をこはしたりする。體內の各種の機關は凡てが連絡なしには作用しないのだからね。病源といつたところで、それからそれへと繰つてゆかねば、一局部の兆候だけですぐにきめてかかるのは飛んだことになりやしないか。漢法では全的に見るのだ。寧ろ直覺的にだね。僕の知つてゐるH老先生なぞは、患者の顏色を見ただけで投藥して了ふ。病氣の器が面前にあるのだ。何で手を執つて診る必要があるといふんだ。理窟だね。さういへばさうに違ひないさ。それで百發百中だから驚くさ。その先生は觀相もやるし、佛典にも通じてゐる、易學なぞは大家だといふんだがね。人體を宇宙と觀ずるといふ漢法醫の道は術でなくてやはり道であるのだらう。單なる學理でなくて、創造的な直感的なものだらう。つまり心で觀るのだ。」

「歌とおんなじだね。」

「さうだ。實相觀入だね。あはは。そこでその先生は自分でコツコツと刻むのだ。一人前の藥を三十分もかかつて彼是と調合するのだね。僕らが詩や歌を作る時のやうに、コツコツとやつてゐる。そ

の事に遊びほれるのだ。色々の草や木の香ひを嗅ぎ分けながらだよ。そこがうれしいぢやないか。いつたい感冒の藥は杏仁水が何グラムで何が何グラム、一日三回分服といつた風に、すつきりときめてもかかれまいぢやないか。もつと藥劑の配合は靈感的なものだと思ふね。そこで面白いのは、かういふ青年があるんだよ。もと僕の家にゐたのだが、外國語學校の英文科を苦學して出ると、語學の先生になつたところで莫迦々々しい、漢法醫になると言ふんだ。今時には變つてゐるだらう。學生時代にすつかりH先生に傾倒して了つたのだ。そこで易などに凝り初めて算木を寄せたり筮竹などをジヤラジヤラやり出した。や、なかなか當るよ。」

「あ、あれか、僕も知つてる。それ、君のところで何時か逢つた、あのT君だらう。ありや、うまく當てたよ。副業線が莫迦に發達してゐるから、家業は繼げなささうだとか、結局親父の腰巾著だと來たね。どうも、やあ、閉口しちやつたよ。」

「さうさう、あの時は君も參つたやうだね。」

「ところで、何かい、T君は今どうしてゐる。」

「臺北へ行つてゐる。中學の英語の先生さ。止むを得ない事情があつてね。だが、すぐに歸つて來るだらう。H先生の內弟子に住み込む覺悟でゐるんだからね。何でも臺北で病氣をした時、總督府の病院へは行かないで、ないしよで土人の醫者のところへ禮を厚うして診てもらひに行つてゐたとかで、同僚たちからすつかり愛想をつかされて了つたらしい。いや、みんなが呆れて了つて、舊弊も舊弊、

頑愚度すべからずと笑はれてゐると消息して來た。それがまだ二十三四の青年だからね。おもしろい。だから、構はない、やれやれとこちらも激勵してゐるのさ。ところで僕の方もこの頃はすつかり草根木皮で、ぶんぶんさしてる。藥でも日本酒のやうにお燗をした方がほんたうの藥らしいからね。ビタミンAがどうのBがどうのもあるものかい。はうれん草のひたしでも食べたがずつといいんだぜ。」

「そりや、こつちで言ふ事だよ。俺んところの大蒜（にんにく）や大根のうまさはどうだ。君はいつたい美食すぎるよ。あんなに肉ばかし食べては危險だぜ。胃癌だとか糖尿病だとか、おしまひはきまつてる。」

「そりや、君のところの野菜はすばらしいさ。印旛沼は格別だよ。ところで、僕にしたつてこの頃はすつかり調味法が變つたね。ほとんど生のままの味で煮出してゐる。それにだんだん菜食黨になつて來た。そりや年齢にもよるだらうが、やはり東洋精神への還元だね。」

「なるほど、そこで水墨集ができたわけかね。」

「僕ばかしぢやないよ。畫の方だつて、だんだん還元して來るからおもしろい。兎に角東洋は東洋だよ。眞の象徴藝術は東洋にあると思ふね。」

「ウォスキーより、俺あ日本酒だ。」

「だらう。だから芭蕉の句なぞが、毛唐にわかつてたまるものか。童謠だつてほんたうは境涯のものだよ。極めて單純化された。むしろ禪でなければなるまいと思ふね。實相はあくまで深く觀ての上のことだよ。スティヴンソンとかウォター・デ・ラアメエヤだとか、大したものではあるまいぢやない

か。殊にスティヴンソンの童謠などは常識的で、大人が推測した童心らしいものであつて、畢竟の境涯的の童心ぢやない。毛唐でさへあれば新進作家だらうとへボ詩人だらうと忽ちにどえらい偶像にして了ふのは悪い癖だ。日本語が世界語でありさへしたら、古來からの日本の詩歌人たちの方がどれだけ偉いかわからないと思ふね。よくは知らないけれども。民謠にしたところで、『外國の牧歌が素朴で快活だ。日本のは消極的でお座敷趣味だ。淫蕩だ。享樂的で無智だ。』なぞと、すぐに日本を打ち消して了ひたがる人があるが、それは記紀から萬葉、催馬樂、田樂、諸國の地謠といふものを眞には研究してみないからだ。すばらしいぜ、田歌なぞは。でなくとも、今の信州その他の青年たちが作る短歌はどうだ。立派に歌壇の水準を出てゐるぢやないか。それもほとんどが耕作したり、養蠶したり、繩を編んだり、馬を追つたりしてゐる。それぞれに自己の生活を凝視めてゐる。しかも彼等の歌がただに素朴な農民の歌謠だぐらゐのものでなからう。立派に短歌道の上からも教養があり鍛錬も經てゐる。人數からいつても歌人としての價値からみても、恐らくこれ程高い民衆藝術は西洋の田園にはあるまいと思ふね。何故もつと日本の藝術を内省してみないかと齒痒くなるな。一にも西洋二にも西洋だ。それに昨今のアメリカ化はどうだ。」

「だから、俺は印旛沼を開墾するといふのだ。よからう。やるぞやるぞ。」

と、「安別だ。安別だ。」と誰か走つてゆく聲がする。

「や、安別だな。」

「おお、さうか。著いたな。」

驚いて、二人は立ち上つた。

激しい雨の音と、波の響だ。

*

鮮かな綠の低い丘陵、そのところどころの黑と立枯れのうそ寒い椴松林、それだけの眺めの下に、ぽつぽつと家が五六戸。冬ならば、とても凄じいであらうところの邊土である。これが日露國境の安別かと思ふと、鬼界ヶ島にでもまざまざと流されて來た感じである。

いや、それでもまだ平らかな丘の端れに白い小さな洋館が見えた。測候所ででもあらう。そのまた北寄りのこれはやや小高く滑り上つた傾斜面の中程に、鼠いろの天幕が一つ角錐狀に張られてある。

見てゐても激しい荒波である。それも强雨の霧しぶきの中の濱邊で、あちこちと奔走してゐる黑い人影までが、つぎつぎと吹き飛ばされさうに撓(たわ)んでゐる。

ぼう、わう、わう。

あ、犬が吼えてる、吼えてる。

と、小さな鈍いろのランチが高く低く、のめりさうに高く低く、その荒浪を乘りあげ乘り下ろして來る。ぼう〳〵〳〵。汽笛ばかりがけたたましく彈みをつけながら、横さまに倒れ倒れ起き上つて來る。と、後に曳いた大きな艀(はしけ)に、洋服や半纏著の二三人が立つて、何かしきりに帽子を振つてゐるが、とても凄じい搖れ方である。

その時、私たちは思ひ思ひの防水用意をして、既に右舷のブリッヂの傍に犇々と詰めかけてゐた。

ランチは程よい距離に近づいたところで、曳綱のロップを放すと、代つて艀(はしけ)がひたひたと近づいて來た。巡査と村長さんらしいのが直立してゐる。いかにも素朴な風をしてゐる。此處にもさうした人たちが住んでゐたのかと思ふと、何かしら心强くもなる。

雨は幾分かづつ小降りになるやうであるが、波のあふりはいよいよ激しくなるばかしである。ともすると、艀(はしけ)が舷側のブリッヂの中程まで躍(せ)り上つて、ガチガチとやると、スッと墜ち込んで離れて了ふ。

「そおれ、あぶないぞ。放せ、放せ。」

「やいやい、そのロップを投げろ。」

「それつ。ちえつ。駄目だ駄目だ。」

「莫迦、こつちへ寄越せ、なあんだ。あつはつは。」

それも、やつとのことで、どうにかブリッヂに繫ぎ留めると、第三班からどかどかと氣早の連中が降り出す。「あぶない、あぶない。」である。

と、ランチにまたロップを放(はぶ)る。ランチはまた波飛沫(なみしぶき)を上げ上げ、半弧を畫いて、ぽつ〳〵〳〵と

引き返してゆく。

「萬歳。」と舷上から誰やらが麥稈帽を振る。艀からは、タオルをかぶるもの、マントの頭巾に眼ばかりのもの、蝙蝠傘、ハンチング、誰、誰、誰、誰、誰、いつも見知つてゐるそれらが一齊に「萬歳」である。彌次る、はしやぐ、手を振る、顏で笑ふ。

すばらしい波と雨と霧。艀は見えつ隱れつ、思はぬところに帽子の幾つかを見せてまた波の向うにずり込んで了ふ。さうしてわりあひに早く小さくなつてゆく。その間にも濱ではもう一つの團平が騷いでゐるのだ。

「これは大變だな。命がけだな。」と笑つてゐると、つい傍にH夫人が小豆色のコートをつけて、タオルで頰かぶりの、鼠いろの眼鏡をかけて、ちらと愛嬌笑ひをした。

「や、あなたもいらつしやるのですか。驚いた。」

「ほほ、えらいでしよ。この恰好。」

「えらいな。タオルはいい。僕もかぶつてみようかな。もう一つこの上から。」

「さうなさいましよ。これ、浴室のタオルですの。」

「しめた。」笑つてゐると、いきなりぴしやりとズボンのお尻を叩かれた。

「白秋さん、しつかりなさいよ。」

ひよいと振り返ると、旦那樣のH君だ。

「やあ、しつかりしてゐる。してゐる。」

これには驚いて了つた。

ところで、私たちの第一班がやうやく艀に乘り込んだ時には、第三班のそれより恐らく一時間は遲れてゐたらう。

と見ると、もう先發の一群は黑蟻のやうに、北寄りの緣の斜面を、默々と螺旋狀にのぼつてゐる。角錐形の天幕（テント）が一つ。その上の頂ちかくまで匍ひ上つてゐる影も二三は見えた。

「あれが國境だな。」と私は見た。

波のながれが颯と頭からかぶつて來た。雨がまた勢を盛り返して來た。

*

それから、白木の角標の薩哈嗹（サガレン）州ピレオ北方二里に遭遇（であ）つたのである。

そこで、さきほどからの强雨はいくらか細めになつたか、細身の洋杖（ステッキ）蝙蝠傘をとほして、私はまつたくのづぶ濡れになつて了つてゐた。私は黑の背廣の上に薄綠のレインコートをつけ、白の運動帽をかぶつた上から、浴室用の厚いタオルをかぶり、それも吹き飛ばされない爲に、その首根つこを、また一つの手薄なタオルで、後ろからキツと引き締めて、首で結んで、あまりを長く垂らした。まるで白い諏訪法性の兜を冠つた川中島の信玄といつた風である。

かうして私は國境安別の砂濱に立つたのであつた。

上つて見ると、沖から見た通りの、それは荒涼たる寒村であつた。

先づ眼についたのは鑵詰工場らしい、ほとんど吹き曝しのバラックだ。大きい、犢ほどの樺色の樺太犬がのそりと、その前には出てゐた。ざくりざくりと薄墨色の砂を踏むと、昆布や、赤い大きな蟹の殼や、流木の碎片や、何かの脊椎骨までが、雨にじつとりと濡れて、北海の漁村らしい臭氣が鼻をついて來た。

たうとう國境まで來たのかと思ふと、ひえびえと私は雨の濕りに顫へたが、また、子供のやうに其處らを駈け廻りたくもなつた。

「や、車前草だ。素敵々々。」

それは樺太車前草とでもいふのだらう。すばらしく大きな葉だ。それが、踏めば實に柔かな綠をしてゐる。砂濱から一段上ると、その車前草に緣どられた徑が續く。大勢通つたのでひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩く。

「や、驚いた。馬鈴薯の花だな。」

內地では五六月の薄紫の馬鈴薯の花だ。蕋の黃色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓からは女の子がたつた一人面を出してゐた。その前の畑には、いかにも雨に濡

れた黃の菜の花が咲き群れてゐた。それに豌豆の花、背の低い唐黍、葱坊主。

この國土のはてに來て、この鮮かな野菜の花を見ることは。この暮春と初夏との色。

私はまたびしやびしやと綠の上を歩いてゆく。この車前草の踏み心地は。

雨がしだいにあがりかけて來た。が、まだ橫なぐりに吹きつけるものがある。

砂濱には、細い丸太の長方形の高い柵が、その雨と風との中にさびしくわびしく續いてゐる。網小屋のやうなのも眼につく。私は道連れの巡査さんに訊ねてみた。

「これは何です。」

「鰊乾場であります。これは廊下と申しまして、ここへ鰊を乾すのであります。」

「この小屋は。」

「これは納壺であります。網や雜具を入れるのであります。」

その外に大きな釜が二つづつぐらゐ据ゑつぱなしで、何れもが激しい鰊の臭氣でとろんでゐた。釜の中のは鰊粕であらう。粕の上には雨が降り溜り、脂がぎらぎらと浮いてゐる。そのにほひだ。季節はづれだし、無論そこらには鰊らしいものは影も見えないで、たまたま昆布などがヒラヒラとしてゐるきりであつた。

と、鴉が飛んだ。大きな黑い鴉だ。

ぞろぞろと汚らしい男女の童どもが出て竝んだ家の戶口には、軒ごとに紙製の日の丸の旗が揭げら

れてあつたが、それも紅が流れにじんでもうピラピラになつてゐる。髭むじやの男の顔も、そそけ髪の淫らがましい女の顔も、むさくるしい二階の窓から好奇らしく私達を眺めてゐた。それはたつた一軒の旅館兼料理屋らしかつた。襖の染點までが淺ましかつた。

大きい納壺の一つは戸が開けつぱなしになつて、とてもすばらしい黒熊の毛皮がその形なりにぶら下つてゐた。その黒い黄の交つた粗々しい毛竝には雨霧が降つかかり、内側の白い皮までがすべすべと冷えきつて、何か無氣味なその納壺の奥には網が網臭く積まれ、土間には赤子を負つた赤い髪の眼の大きな女の子が、ただむつつりと時化波の荒海を眺めてゐる。團員の二三はその中へづかづかとはひつて行つた。吊るされた熊の毛皮がくるくると、顎から廻り初めた。

駐在所があり、郵便局があつた。間を隔いてぽつりぽつりと、それはバラック式の果敢ないもので あつた。以前に、國境守護の駐屯兵が住む爲に急造したといふ小舍のままであるらしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舍のうしろ、丘の崖から下の裾まで、叢生した虎杖の早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間には、今まさに淡黄緑の花盛りであつた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目ざましさは、私はまた佇ち停つて、これ等の初めてみる樺太の景趣に眼を圓くした。

それは燃え立つやうな細い赤い實のつやつやとむらがつた名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實。」

「ななかまど。」

と一人の男の子が私の問に答へた。

風と雨とがまた激しく音を立て初めた。

「おおい、おおい。」

前から、後から、わが團員の數々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び應へる。かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねりうねりして登りにかかつたのである。

*

既に天測點を見極めて續々と降りて來る誰彼は、頭の上に大きな驚くべき蕗の葉を傘代りにかざしてゐた。杖にしてついてである。

「ほう、それが樺太蕗ですか。」

「ええ、大きいでせう。」

「何處に生えてゐます。」

「やたら一面です。」

ほうとまた驚きながら私は登る。靴に卷ゲートルだが、わざわざと普請して土もまだ柔かなところへ、大勢で雨の中を踏みくづしたのだ。靴も何も泥まみれになる。それに足がかりも悪く、坂は急になるので滑ることおびただしい。私はたうとうのめりさうになつて、強く突き立てた蝙蝠傘に思はず全身の重みを託したので、それが弓のやうに撓むと、その柄からポキリと折れて了つたものだ。柄にもない華奢な洋杖蝙蝠傘などを買つて來たのがそもそもの過りであつた。私は苦笑して、その柄と尖とを兩手に持つた。

斜面の中腹に出たところに、例の天幕(テント)があつた。天幕の裾ははたはたと風にあふられてゐた。人聲がしきりに笑つてゐるので、濡鼠のまま飛び込むと、それは私たちの爲に村の青年團の人たちが番茶の接待に出てくれてゐるのであつた。

ビールにウォスキー、キャラメル。

まことに赤いシトロンと草の綠は天幕の內部を明るくする。

私はビールを拔いて貰つたが、凄じい强雨と荒海の潮鳴とに耳傾けながら、この國境の山上で味ふビールの味はひえびえとしてそれもいい思ひ出になるだらうと思へた。その色も泡も。だが、私は金を拂ふことを忘れて、一氣に斜面を駈け上つてゐる私自身をその後で見出した。

*

そこらは虎杖の花盛りであつた。樺太虎杖の花は內地で見るやうなほのぼのとした淡紅(とき)いろを含めてゐないが、その綠がかつた薄黃は却つて虔ましくてあはれであつた。それが雨と霧とに濡れしづくになつてゐるのである。

太い丸太の無造作な二坪ばかりの周圍の柵があつて、その柵は朽ちかけて、既に外皮のところどころはボロボロにくづれかけてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が儼然と立つてゐるのだ。正方形の臺座に据ゑられた鼠いろのその標石は高さは二尺にも滿たないであらう。北面に鷲、南面に菊の御紋章が浮彫にしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た。

北を眺めると、その海岸線は南と同じやうなさして高からぬ丘陵が續いて、立枯れの椴松の疎林が、しきりなく流るる雨雲の下にほうほうとうち煙つて見えた。寂とした國境であつた。

露西亞人村のピレオは、つい一つ二つ向うの丘の陰にあるのだと聞いた。時々出獵する彼等の或る者の姿さへ見かけることがあるといふ話であつた。國境とはいへ、警備隊も監督官もゐるわけではなし、出入自在であるやうにも見られた。簡單なものだと私たちはまた顏を見合せた。

ここでカメラを向ける者がかなりパチパチやつた。

私と友とは、ここで一つ撮つてもらつた。武田信玄と國定忠次といふ奇異な恰好でである。

誰だか露西亞の方を向いてつくづくと放尿してゐた。

天測點はついその上にあつた。海上一キロメートル若干の地點である。

其處にも虎杖の花は今がまさに盛りであつた。

この虎杖は露西亞領の花

歌の四五句が口をついて出た。だが、上の句はどうしても出來ないで、私はまた歸路についた。
そこで天幕（テント）に再びもぐりに行つたものだ。
「ビールの代は拂つて置きますよ。」
それからシトロンを一本あけてもらつたが、また金は拂はずに飛び出す私を私は見出した。
慌ててまた引き返した。
すばらしい斜面の綠、滑る、滑る、滑る。

*

ワレラコクキヤウニアリ

妻子を初め東京の諸友に、その安別から打電した時には、私も亦意氣軒昂たるものがあつた。
小學校の粗末なテーブルの上で、私はしきりに賴信紙の皺をのべてゐたが、庄亮君はまた繪葉書に
卽興の歌などを走り書きしてゐた。

國土のはたてに我は來りけり薄紫の馬鈴薯の花

「これはどうだい。」と訊くから、
「さうした四五句は僕の三崎の歌にもあつたよ。」と言ふと、
「こりや困つたな。馬鈴薯の花でなくちやならねえところなんだがな。」と、笑つて頭を搔いた。
「君も氣がついたんだね。」と言ふと、
「驚いたよ。全く。あの馬鈴薯の花の新鮮なことつたらないぢやないか。あつはつは、こりや困つた
な。兎に角。」となつて、

ことごとく名は知らぬ草ばな

と訂正した。
駐在巡査のYさんが、そこで扇面など擴げて來る。が、しかたなしに私も筆を執つた。

この虎杖は露西亞領の花

「半分しか出來て居りませんよ。」

この時こそ、泥靴の、びしよ濡れの、異樣奇體の團員の群集で、いつぱいに充たされた校舍であつた。喧々囂々たるものであつた。

熱い熱い湯氣のたつ番茶の土瓶を持つてしきりに奔走してゐた人の中で、まだ若い都會風の色の白い夫人があつた。郵便局長の奥さんだといふことであつたが、誰だか、

「かうした處においでになつてお寂しくはありませんか。」とそぞろに同情してゐる者があつた。

「おほほ、それは寂しうございますけれど、馴れればそれほどでもありませんの。」

「でも、冬はたいへんでせう。」

「ええ、それはもう。」と流石に肩をすぼめたものである。

見まはすと、窓の上、四方の板壁には、フランクリン、リンコルン、ビスマークだ。西郷南洲、さうした世界的英雄の廉物(やすもの)の三色版がさも大業に掲げられてあつた。なるほど、此處は明治の二十年代だなと思ふと、果してどんな教育が行はれてゐるものかと微笑された。

「童謠はやつておいでですか。自由詩は。」

「いや、一向にまだやらして居りません。内地にゐました時は、考へてもゐましたが、かうした邊鄙な處では、ごくごく程度が低いのですからな。お恥かしい次第です。」と教員さんの一人がすつかり

恐縮して了つた。

生徒といへば、あの納壺の熊の毛皮の傍にゐた赤毛の大眼玉の女の子や、アイヌ式の、または劉生式の童男童女どもだらうと思ふと、それもあはれであつた。

解の幾度かの往復に、自分たちの順番を待つ間を、私たちは、そのとつつきの鑵詰工場の中へはひつてみた。仕事は休んでゐるとみえて、その板敷きの廣間はガランとして、例の大きな樺太犬なるものが、獅子のやうに傲然と、その眞ん中に蹲(つくば)つてゐるだけであつた。ただ、これも大きな一つの溜桶に透明な掘りぬきの水がなみなみと溢れ、こんこんと湧き出てゐるのが珍らしかつた。奥では燻製の鰊や、蟹の鑵詰の鑵や、シトロン、ビールの罎などが、賣品として、二三の卓上に飾り立ててもあつた。楣間の卽製のビラを見上げると、

黄ストロン　一本參拾錢
赤キング　一本參拾錢
水雷サイダー　一本貳拾五錢

と拙い字で、しかも赤インキで○○をつけたのが、「成程、此處は樺太だわい。」とをかしがられた。その黄ストロンをまた一本あけてもらつた。

*

本船へ歸ると、私たちは初めて自分たちの塒に戻つたやうな氣安さを感じた。何かさびしい、あつけないやうな國境の印象であつた。

午後には、やや西の方が霽れかかつて、時が經つにつれて、赤いぼやけた雲の色になつた。日が短くて、薄ら寒い空氣であつた。

能樂の笛がまた何處かの甲板に鳴り出した。

人々はまた椅子を持ち出し初めた。ずらりと外洋を向いては竝んでゐる。

「赤化は絶對にいかんです。」と誰やらが叫んでゐた。

「兎に角、現代はあまりに無秩序です。學生間にでもですな、この際大いに尊王の精神を鼓吹せなくちやならぬ。そこでですな。私は天照皇大神宮と、阿彌陀佛と、我が皇室と、この三體を一つに祭つて、いやその祭壇を私の家庭にこさへたのです。私は神でなければならぬ佛でなければならぬといふやうな偏狹でなしに、それに皇室と、つまり神を敬ひ佛を信じ皇室を尊むといふ、この主義信念を持つて毎日禮拜してゐる。家人にも禮拜させる。訪ねて來る學生にも禮拜させる。これが實に日本人であるところの。」

「あれは誰だい。まるで中學生の演說口調ぢやないか。」と一人が伸び上ると、

「京大のA博士だよ。叱つ。しづかに。」とまた誰やらが慌ててすつ込んだ。

「さうです。現代の人心は實に浮薄です。救ふべからずです。」とまた頭の頂邊から火のついたやうな、外の聲がする。

「へへん。」と醫專が舌を出した。「ブルジョアが何だい。階級が何だい。チエッ。」と何かしきりにスケッチをしてゐる。

「俺が處來てみろ。西鄕先生の城山で切腹さした短刀ちゆうもんが、チヤンと藏してごわすぢや。手紙でん何でん持つとる。來てみい、そりや、えさつかぞう。」

「喧嘩ぢやないかね。ひどく暴れてるぢやないか。」と自分たちの談話室では庄亮が湯上りの浴衣の胸をはだけて、濡れ手拭で、きゆうきゆうと、まだ紅みの殘つたその首筋を拭き出した。

「なに、あれは地聲だよ。薩摩人だよ。ほら、あのA爺さんさ。」

「さうか。あの人はたしか城山に家があると言つてゐたね。」

「うむ、あれで、汽船も持つてゐれば自動車も持つてゐる。山も持つてゐるといふ話だ。何でも富豪だと聞いてゐる。」

「えらい元氣だね。喧嘩だつたらひとつ出てやらうと思つたがね。」

「ぬうつとかね。」

「あつはつは。」

「お得意の劍道も當にはならないよ。尾山の篤二郎と相上段といふところでね。」

「やあ、これは參つた。いつかの歌の會のテーブルスピーチかい。失敬々々。」

「だが、今日はずゐぶんみんなが興奮してるぢやないか。」
「草根木皮の祟りだらうよ。」
「あははは。まあ紅茶を一杯いただかう。」
私たちは、早速に船室（ケビン）の浴槽で、身體を溫めて、さばさばした浴衣の著流しで、卓（テーブル）に對ひ合つた。
それから間もないことであつた。
「今夜は飲めさうかね。」
「いや、どうも咽喉がこれぢやあね。」
「困つたね。大切にしたまへ。僕は三等へでも行つて遊んで來よう。氣樂でいい。」
「三等も今夜は興奮してるぜ。」
「なにしろ、あの吹き降りに國境を見て來たんだからね。少々は變になるだらうよ。」
「だが、A博士はなかなか國粹黨だね。」
「あれでね。まあいいさ。日本精神への復歸といふことだらうから。僕はこれで眞實の尊王だからね。」
「さうだな。それは知つてる。」
「結局日本は日本だよ。日本人は日本人だ。」
「となるね。」

「何でも東洋藝術に限る。さう思はないのかな。」
「あつはつは、思ふよう。」と、我が庄亮はまた蠅の如くにその兩手を頭の上で揉みあげた。
銅鑼が鳴る。
お、夕飯だ。
船が出る。スクリュウが響く。汽笛が鳴る。お馴染の船室の搖れが、コトコトとまた笑ひ初めた。

附記

安別の小學の生徒たちの爲に、私は一つの童謠を玆に贈り物とすることをせめてもの私の心やりとする。

海は韃靼、
夏の暮。
犬よ、のそりと
出て見ぬか。

鰊乾場の
葱坊主、
鴉つついて
啼かないか。

ここはお國の
北のはて、
赤い夕日も
もう寒い。

パルプ

甚深微妙の音もなき響の響が其處にはあつた。内に黒く剛い、然し外に灰銀の柔かな、平滑な光の面、面は縦に大きく圓く、極めて薄手の幅を持つて、その兩面が、一方は紫の陰影を而もまた旋轉光の數かぎりなき細かな輪の線を滑らしながら、眼にも留らぬ速さで廻つてゐた。無論腕木の支柱があり、黒鐵の上下槓が横斜めに構へてはゐた。その把手を菜つ葉服の一人が兩手でしつかと引き降しに壓へた刹那である。

椴松の伐りつぱなしの丸太の棒が、一本づつ、續々に、後から後から、鱶のごとく、鯨のごとく、鮫のごとく、生き、動き、搖れ、時には相觸れ、横轉しつつ、二條のレールの間を、エスカレータ式の流れに乗つて、遠い屋外の白光から、一旦黄色光に變じ、黄色光から、宏壯な機關室に入つて、やや本然の木地の明りにその色は沈靜して、しかして、コトリコトリと首をもたげて來る。その一列の丸太を載せて、流れは極めて單調である。疾きがごとく、遲きがごとく、流るべくして流れ、移るべくしてただ移る。所謂淡々たり寂々たり、虚にして無爲だ。

時にまた、レールの上、十二三吋の空間をあけて、かの直徑七十吋餘の截斷刄が、むなしくその靈妙音を放つて、ただに嚠喨蕭々として空廻りをしてゐるのである。その旋轉光。

と、第一の丸太が流れてその關門にかかつて來る。恐ろしい刄の下に。

丸太はすでにその荒皮を剝がれてゐるのだ。何時のまに如何なる機械によつて、かくもすべすべとなまなまと、木地も露はにめくられ引きむしられたかそれはわからぬ。その生肌が目を瞑つて來る、仰向いて、觀念して。うち見るところ、恰も兩手兩足を斷ち斬られた素裸の美女の首附きの胴體である。しかも生きてゐる、顫へてゐる、わななないてゐる。氣死して、醒めて、痙攣して、極度に蒼ざめて、また赤く熱して、膨らんで、張つて、眞つ白に死ちかかつてである。最早や逃れられぬ運命が、瞬間が、しんしんと、淙々と、その目前に鳴つてゐる、待つてゐる、澄んでゐる、閃いてゐる。と、ものの一尺ばかり遣り過して、

じゆう……である。

その膨れて張つた、すべすべとつやつやとした美女の生肌の、丸太の首根つこに、灰銀色の旋轉光の截斷刄が、物の氣持よく、それも音もなく、（恐らく澄心の極とはかうした無音だらう。）閑かに、無氣味に、降りて、その圓弧の端が觸れると、

じゆう……うである。

その儘、ぢいいいい……と、底無しに喰ひ入り、壓しつけ、放して、すうつと空へまた十二三吋あが

ると、流るる胴體は二つになつて、截目も見せずに滑つてゆく。その腹部をまた、

じゆう……である。すうつである。

幽深見難し、甚大無量の、また、圓滿無礙の、謂ふところのおぎろなき物、この靈妙音は何から來る。おそろしい截斷刄はただ廻つてゐる。神性の慘虐、虛無。

私は息を呑んだ。

丸太はまた、次から次から流れて來る。菜つ葉服はただ、上下槓を下げ、また上へ放つ。これしも默々と、秒をはかり、吋を見、ぢいいと深く、それも瞬時に壓へて、殺して、すうつと放つだけである。だが、何とすばらしい截斷であつたらう、虐殺で。

靜かに佇んで、私は身じろきひとつしなかつたが、また目ばたきひとつしなかつたが、私は確かに心でわなわなした。だが、何といふ快感、恍惚たる無上の殘忍感。

私はまつたく美女の胴體を、その戰慄の對照として想像した。ああ、この言ひ知れぬ怪異の殺人。そればかりでない。私は流るる丸太に自分自身の肉體をすら感じてゐた。

じゆう……である。

何といい氣持だらう。ああ一と思ひに殺られたら。うんともすんともいふ間はないのである。ぢいいと深く寸のめりに喰ひ込まれて、すうつと放たれる。その刹那の快感。恐らく、突かれ、斬られ、射たれ、搏かれ、絞められ、毒されるあらゆる死難よりも、どれだけ恐ろしくて、また安らかである

か。無量苦と無量喜。

廻轉する截斷刄は、瓏喨と、また、音なき音を深める。何といふ靈妙な誘惑、誘惑、誘惑。

さうだ。じつと眼を瞑つて、仰向いて、觀念して、流れるままに、この截斷刄の下を、かうして肅肅として遣り過ごされて、じゆう……うう。

あつ、私はその時、青くなつて、飛びあがつて、我に返つて、駈け出す私を見た。

*

斧だ。

大きな部厚な斧、上の緣が黑く、中が兩方から內へ反つて、また開いて煌々とした斧。

これが、ゆつくりと、寬々と、まるで象がうなづいて、また鼻を退く、そのやうに、立てた六七吋ばかりの高さの丸太を、ちよいとやる。ほんのちよいと觸れて退くだけだが、ばらり、すんすんと縱に割れてゆくのだ。音ひとつ立てるものでない。

截斷された丸太が、ころりころりと、ころがつて他のレールへ移ると、敏捷く菜つ葉服の一人の手に捕へられ、重々とこの吊り下つた大きな斧の下へ立たされ、ちよいと緣を割られ、くるりとなると、また他の緣をちよいちよいと割られ、ぱんとまた、二つに三つに割られて、ぱらりとなる。

槓杆の、片手は輕い。だが、大斧の、威力は籠る。

鼻が無くてしかもかの象の鼻のアンダンテ。

斧は重くて輕い。ちよいである。

これはまた思無邪の慘虐。

知るがごとく知らぬがごとく、鈍重で、宏量で、斧はうなづく。虛心平氣とはこの事であらう。

斧はうなづく。

「則天無私。」「則天無私。」

ちよい、すん、ぱらり。

漱石の非人情もここまで來ればおもしろい。

天とは、言葉を換へて言へば「絕對の冷酷」そのものであらうか。

*

囂々々々々々、轟々々々々々。

混雜、擾亂、壓搾、粉碎、散亂、微塵、芳香、光、光、光。

や、木つ羽だ、木つ羽々々々、木つ羽微塵だ。流出だ。氾濫だ。と、私は呆然とした。

コトリ、コトリ、トンタンと、割られた、丸太の、體のいい薪ざつぽうが、レールの間を流れて、

ゴトリ〈ガラ〈と、放り落される、と、その井堰型の粉碎機の中での、たちまちの雜音囂音、大

動亂である。

何とすばらしい短時分の粉碎、まさにこれ、霹靂的の粉碎也である。

椴松の、丸太の、美女の胴體の、今のこの無慙である。

形態すでに無し、椴松の生體はここに一切木つ羽微塵となつて了つた。

何とまた驚くべき强力の、暗室内の慘虐だらう。

思ふに、前の大斧は則天無私のちよいであつたが、これはまた魔神の怪異である。少くとも一千人の金剛力者は、この機械の中に暴れてゐる。何といふ破壞力だ。

「おそろしい機械だな。」と參觀の誰かが言つた。

「パルプと言やはるのは、へえ、この木つぱだすかいな。」と誰かが、その木つぱの二三片をその生つ白い掌の上でザラザラとあけた。

ああ、さうだ。パルプ、パルプ。

高麗丸船上から、この朝、私たちが瞥見した、あの濛々たる黑煙を吐いてゐた五六本の大煙突の立つ眞岡工業會社の内部に、私たちは今まさに、兢々然たる胎内潛りをやつてゐるのだ。

パルプ、パルプ。

*

觀光團員の一人は、鼠色のセメントの壁面に挿まれた、青色の急階段の半で、よろよろと倒れかかつた。顏が眞つ蒼になつてゐる。慌てて、その男を誰かが引つ擁へて下へ降りた。

「毒瓦斯だ。」わあつと白いヘルメットの近眼鏡が、その背後から轉げ轉げ降りたものだ。一種異樣の惡臭が私の鼻をも衝いた。うむ、うむむである。

「あはは、亞硫酸瓦斯だよ。大丈夫。」と言ふ上からの笑ひ聲もした。

そこでまた、どかどかとあがつた。それでも半數は階下の開き戸から表へ飛び出して了つた。

空氣、空氣、空氣。

なにしろ、一同、生れて初めて見た截斷刄、大斧、粉碎機などに仰天し戰慄し畏怖しきつてゐるのだから、突然、しゆうしゆうと斜め下ろしに吹きまくつて來た亞硫酸瓦斯の惡氣流には、全くのところたじたじとなつたにちがひない。

蒸し熱い、激しく臭ふ、沸々沸々沸々とした何かが、階上に充ち滿ちてゐた。樺太とはいつても八月の炎暑である。鼠色の壁の幾つかの煤けた硝子窓からは、流石に强烈な日光が流れ込んで、そこらの麥稈帽や、鳥打帽や、赭ら面や鼈甲緣の眼鏡や、アルパカの詰襟のぼんの窪などが、一時にくわつと燃え立つ、それ等がその光線を壁の影へ越えると、また後から後からと來る浴衣や、女帽や、桃色のスカートに明つて搖れて熾つた。

ハタハタと白い扇子やハンカチーフが群蝶のやうに舞ひ出した。おほかたは鼻孔を固くふさいだも

のだ。ところで、「やあ、こりやあ、どえらい羊の胃袋だなあ。驚いた。」と、頓狂な、金魚眼をひんむいて、また、「ひやあ。」と叫んだ道化者がゐる。

見ると、大きな大きな木釜のどれもが、にちやにちやと、まるで口の中で嚙みつぶしたラブレターそのままの椴松の纖維で、薄ぐろく、盛り高く、一杯に滿ち溢れてゐた。阿剌比亞夜話の魔法にかかつた王子や王女達の羊の、一千匹も捕へて來て、それらの胃袋を斷ち割つて、中のどろどろを搔きさらつて、一ところに集めたら、成程かうでもあらうか。

だが、片々に粉碎されたとはいへ、あのパルプの薄紅い光澤の木つ羽が、木の肉片がこのもこもことした、軟柔かな、粘りの酸つぱい、纖維の、一種の木の練り粕にたちまちの間に變形するとは。

沸々沸々と、瓦斯の立つ痘痕の面、これがあの丸太の、美女の胴體とは。

階下はおそらく焦熱地獄の機關室であらうか。

沸々、沸々、沸々々々……沸。

*

清淨な、さうして莊嚴な大伽藍。

空氣は沈靜し、天井は高く、光はほの青い何かの陰影と織り交つて、ひえびえと、さうして明るく、幾つかの室內は次から次へ見通しに廣い。さうしてまた場外の外光が遠くの遠くに小さく、正方

形に白く眩ゆく切り開かれてゐるのだ。

その取つつきの本堂といつたところに、高さ百吋以上の巨大な鐵製の機械が二列に、間を廣くあけて竝んでゐた。如何にも均齊を保つた配置であつた。それらの凡てがまた極めて摩訶不思議な生命力の威嚴を顯現してゐるのである。

靜中の動、動中の靜、兼ね備へたこれらの紙漉機械のあらゆる細部の機關、細きもの、平たきもの、圓き、網狀の、腕型の、筒の、棒の、針金の、調革の、それらが齊しく動いて、光つて、流れて、搖れて、廻つて、幽かな幽かな微妙な複雜音と、製紙特有の淸らかに爽かに鮮かな芳香と氣品とを發して、眼に見えぬ電動力の表象體そのものとしての、絕間なき活動を續けてゐるのである。

何とまた其處らに動いてゐる菜つ葉服の人間の、さうして參觀人の私達の小さなことだ。私達は啞然として見上げてゆく。セメントの床を踏む靴音までも畏れて謹んでさうして叩頭してゆく。

あの固形體のパルプが、ねとねとの綿になり、乳になり、水に漉され、篩はれてゆく次から次への現象のまた、如何に瞬時の變形と生成とを以て、私達を驚かしたか、この化學の魔法は。

あの鈍色の液狀のパルプが、次の機械へ薄い薄い平坦面を以て流れて落ちると、次の機械では、それが何時のまにか薄紫の、それは明るい上品な桐の花色の液となつて滑り、長い網の、また丸い網の針金に漉されて水と纖維とに分たれ、殘された纖維はまた編まれて、吸水函に入り、ここでいよいよ水分が除かれると、たちまちの間に、その次では既に既に幅廣の紙らしく光澤めき固まつて來て、次

のまた強く熱したローラーの幾つかに巻きつき巻きつき、そのローラーを蔽うた毛布の上を通される
その幾廻轉を以て、遂に最後の乾燥を了ると、はさはさ、さわさわと、白い白い音と平面光とを立て
ながら、ここにすう〳〵〳〵と閃めき出して來る。すつとまた切られて同型同吋の長さとなつて、一
枚々々と、大きな卓上に、寸分の謬りもなく、はらりはらりと滑り止まつて、積り、積つてまたその
層を高めてゆくのだ。

何とまた、あの幅の廣い廣い、さうして薄手の白紙がローラーからローラーへ、一間の餘の空間を
滑つて卷き附くその全く眼にも留らぬ廻轉と移動とを以てして、些の裂けも破けも、傷つきも飜りも
しないことだ。何といふ叡智と沈著と敏捷と大膽と細心とを、祕めて、また示してゐることだ。その
神のごとき巧妙、靈性の作用は何から來る。

ほんのたまさか、それも奉仕(さうだ、監視ではない、奉仕そのものだ。)してゐる人間の過失で、
何か觸れた手の疎忽で、ほんの何かの裂傷でも生じた場合に、慌てて、閃めき流れて來る紙の一端を
强く裂いて除けてる、その刹那こそはまた、如何に老練な工人どもがほとんど始末し整理しきれない
速さでもつて、後から後からと、出來たてのぷんぷんする白紙は奔り出して來るのである。それを手
に觸れるが早いか、次のローラーへ、つつと卷きつける。卷きつけるとまた朗々として續いてゆく。
その間の菜つ葉服の恐慌は何とまた高麗鼠のやうではないか。

積まれ積まれる白紙は、所定の、高さに層むと、眼の廻る速度でまた除去して、空にし、空へまた

奔つて來て乘る白紙へ備へねばならぬ。人間の手より紙の滑りの迅さは、それこれ彼等を同所に同一
點に、幾廻轉をさせるか、思半ばに過ぎよう。それどころでない。實に無量の、また極度の迅速生産
である事實が、次の室へ移つてもまた、幾百の女の二十日鼠がいかに天手古舞であることか。笑へる
ものではないのである。

若い女たちも、實に機敏で手馴れたものである。卓の數列に向つて竝んで、手頃に重ねた幅廣い白
紙の層を、ちよいと片端へ右の手の指を觸れると、パラ〳〵〳〵〳〵とめくる。その速さには驚く。
また、破損紙を識る直覺的の眼と指の確實さと速さにも驚く。だが、如何な彼女らも、後から後から
と送られて來る生産力のそれには、絶えず追つ立てられ、焦躁させられ、慄へさせられ、しまひには
へとへとにされて了ふ。見ろ、彼女らは髪もそそけ、どれもどれもが面色は蒼白になつてゐる。

ここにまた、碧い包裝紙を擴げ、檢査された完全紙の層を、としりとしとしりとしと載せ、重ねて、
揃へて、整へてまた、パタパタと四方から包み、サツサツと糊刷毛で掃き、レッテルを貼り、押し、
叩き、次の荷造場へ送る中年をんなの活躍もさることだが、彼女らもまた同じ種の高麗鼠である識は
徹頭徹尾免れない。何とあはれな女奴隷であらう。

ところでまた、見てゐる間に破損紙が天井に屆くばかりに積まれ高まつてゆくのにも、私は目を瞠
つた。菜つ葉服らのそれは、敗戰の實證であつて、抄紙機に驅使され頤使されて、周章狼狽の果ての
過失から、まざまざと彼等は弱者たる彼等自身を彼等の運轉する機關の前に曝さねばならない慘めな

ヂレンマに墮ちて了つたと言つていい。機械は本來人間が發明し製作し運轉するものであるが、一旦火力や電動力の導火をつけられるその瞬間から、たちまち一の箇性を確立して來る。偉大なる生命の大活動が始まる。全く、一の神祕な人格とさへ成つて了ふ。その時、人間は寧ろ却つて被驅使者となり、奴僕となり、これ命これに從はねばならなくなる。個々としての人性は蹂躙せられ、生活範圍は制限せられ、遂には絶對の權威を以て壓倒されて了ふ。この時、機械や機關は決して生命の無い無機物ではない。現代の文明によつて生まれた機械は現代人に血と肉とを與へると共に、また之を啖ふ。傲然として勞働者の父となり王となり、富豪を額づかせ、國家の政治をも左右する。しかも知るがごとく知らぬがごとく淡々として無爲なのも彼等である。

さて、私は一人の矮人(ひと)が、雪山のやうに高い、白い白い破損紙の層を背に負つて、この大伽藍の中を匍ふやうに動き出したのにも驚いた。考へてみると空(くう)と空(くう)とを孕んだ紙の層はいかに高くとも實に輕々(かるぐ)としたものにはちがひない。だがあまりの不釣合ではないか。おお、紙の入道雲が歩く歩く、光り輝く紙の雪山が。

そこで、原料叩解機に移される。その山と積んだ白紙の層が、また瞬く間に、その大腹中に吸ひ込まれる、と、どろどろの綿狀になり、纖維になり、液狀のパルプになつて、また紙漉機械へ流れ入る。桐の花色の寒天體になり、乾燥し、また紙に還る。虚心で、迅速、無常光明世界だ。その世界にだ、人間の高麗鼠がちよろ〳〵〳〵と駈けまはる。引つ込む。面を出す。

戰場のやうな騷ぎはまた荷造にある。然し、此處にも誰として一の私語すら發する餘裕を與へられた高麗鼠はゐない。事實空氣は沈靜してゐる。ただ機械力の冷酷と暴虐とはこの工場の空間のあらゆる隅々にまでも及んでゐるのだ。あの無量生産から寸時の隙なく引きずられこづき廻されてゐる人夫たちの沈默の苦力と繁忙とは見る目も痛はしい。彼等は彼等の意志も呼吸も壓迫されどほしである。

壓搾機がある。既に包裝され、レッテルを貼られた紙の數連が送られて載る、バタ〳〵〳〵……トントンと四方に板を當てる、蓋をする。針金の位置が定まる。すうと壓搾機が下りる。ピシヤンコになる。そら、函が出來た、よろし。運搬臺が來る。ガラ〳〵〳〵〳〵、走り出す。また紙包が來る。

パタ〳〵、トン〳〵、スウッ、ガラ〳〵〳〵〳〵である。

また紙包が來る。

また來る。

また來る。

また來る。

また來る。

また來る。

また來る。

また來る。

また來る。

丸太の截斷から、この荷造まで、果して何分間を要したであらう。恐らく、私たちの見た時間は二十分と經つてゐない。

畏怖と驚駭と、感嘆と、絶大の壓迫感と、憎惡と崇拜と、私たちはあまりに苛まれ過ぎた。

茲で外へ出た。

夏、夏、夏、夏。

「ああ、青空だ。」

私はほつとした。

雲が見えた。山の綠が、さうして白楊(ポプラ)のそよぎが燦々と光り、街の屋根が見え、裝飾された萬國旗の赤、黄、紫が見え、青い海が見え、檣が見え、私たちの高麗丸が見え、ああさうして、白い鷗の飛翔が見えた。

いやそれよりも、私たちの立つてゐる廣庭のこの輝きは、微風は、あ、この涼しさはどうだ。あ、白い門が見える。門の傍の休息所が、

「あ、もし、もし、便所はどちらですかな。」誰かの聲がした。

一齊に、また、觀光團員の群集が、一二丁も向うにあるW・Cへ向つて、いつさんに駈け出す。駈け出す。駈け出す。

眞岡

眞岡(まをか)はアイヌ語の「モウカ」である。「美しい波の上」といふ語義ださうである。

十四日の午前、その美しい波の上に來た。

前の夜、國境安別の海岸と別れた私達の高麗丸は、元來た南へ南へと下航して、黎明に野田の沖合五六丁の處にその機關の運轉を停めた。豫定の上陸地だつたのだ。だが、夜來の激浪がまだをさまらず、空しく迎へのランチも艀(はしけ)も、煙と汽笛と、駄目だ駄目だと言ふかしましい叫び聲だけを、おそろしく高く低く上下させながら、空と浪とに搔き濁して、また踉け踉(よろ)けて引き還して了つたのであつた。で、しかたなしに二時間の餘を續航して、今度は眞岡の鮮かな綠の小山の一連と、市街と、パルプの眞岡工場の數本の大煙突と濛々たるその黑い煙とを、近々とその右舷に指呼し得る距離まで來て停まつた。

浪はやはり激しく起伏してゐた。それでも野田よりはいくらか時も經つて氣勢が衰へてゐた。これなら上れぬこともあるまいとなつて、まづ第一班から迎への艀へ乘り移つた。

棧橋へ上つて見て私の第一に喜んだのは、その前の廣場に群つて客待してゐる簡素な馬車の幾つかであつた。せいぜい四吋ばかりの波型の幌飾が四方を取りまはして、その幌飾の緣が靑で、それが八月の微風に涼しげにそよいでゐた。極めて開放的で、無造作に黑と赤との板枠をはめた座席の上の空間には細い四本の柱が立つてゐるきりであつた。

「こりやいい、ひとつ後で乘つてみたいね。」と私は言つた。

「よからう。」と庄亮も御機嫌だつた。メリヤスのズボン下の尻端折で、リボンもない臺灣パナマの帽子をヒヨコツとかぶつて、不恰好な大きな繻子張りの蝙蝠傘を小脇にかかへ、それから歌のノートを取り出した。

「寫生しておいてくれよ。」と言ふから、「よろし。」と私も早速黃色い小型のノートを開いた。

空はよく晴れてゐた。さうして眞岡の街は歡迎門が建ち、黃や赤や綠や紫の萬國旗で賑々しく滿飾されてゐた。つい一日前に攝政宮殿下の行啓を仰いだのであつた。行啓氣分が到る處に充ち滿ちて、まるでお祭であつた。で、私たちは素顏としての素朴な樺太女「マウカ」に會へる、親しい、それでも物果敢ない旅人としての私達の期待を裏切られた。さうして盛裝した植民地美人「眞岡」に、こちらも同じく鐵道省主催の觀光團員としての挨拶と接吻とを投げねばならなかつた。

眞つ直ぐに一二丁行つて左折すると廣い坂になつて、白い白い銀の葉裏を飜してゐるポプラの片側竝木の輝きがまづ眼に映つた。近づいて見るとそれらのポプラの葉は普通の圓葉でない、楓のやうな

葉であつた。裏は毛ばだつて白かつた。これが馬車の次に珍らしかつた。私はその葉の一つ二つを、早速に拷ぎ採つてゐる誰かから貰つた。

「獨逸種ぢやないかな。」と一人が言つた。

その前に普請中のなにがし新聞社があつた。やつぱり內地ではない何かが感じられた。その隣が役場で、階上が商業會議所であつた。

その階上で歡迎の茶菓を饗せられて、「樺太要覽」といふ小本と繪葉書とを一同が貰つて、また少し上手の新築の小學校へはひつた。日は暑かつたが、校舍の內部はまだ生々しい木の香がぷんぷんと匂つて、何か虔しい旅愁をさへ味はせられた。

昨日、殿下の御休憩所に當てられた一室をその戶口から拜觀すると、廣い、素木づくりの極めて質素なものであつた。床には黃と綠との花模樣のあるリノリユームを張りつめて、上段に正方形の壇があり、壇の上に、これも極めて素朴な卓子と一脚の椅子とがあるきりだつた。私は敬禮をして隣室の物產陳列室にはひつた。

花椰菜、千日大根、萵苣、白菜、パセリ、人蔘、穀物、豆類。海產物でははしりこんぶ、まだら、すけとうだい、からふとます、まぐろかぜ（雲丹）それから花折昆布などが眼についた。私は賣店で樺太地圖を一枚買つて、そこで外へ出た。裏の幔幕の向うでは運動會のおしまひ頃を何か騷いでゐたがそれも聽き棄てにした。ただ出口で海老茶袴の二三と逢つたが、著こなしがいかにも野暮くさく、

面相がいくらか内地とは違ふなぐらゐで、それも輕く擦れ違つて了つた。

それから少し歩いて、いよいよ例の馬車に乘つた。一臺にはA博士夫妻が乘つて、眞岡工場の方へ駈け去り、他の一臺に庄亮とA博士の令息と私とが三人、早速の市街見物である。

りん〳〵〳〵、りん〳〵〳〵〳〵、いくら行つてもさした見物もないので、今度は工場の方へ向きを換へさすと、廣い廣い一本道を工場へ、駈けた駈けた。兩側には裝飾電球の支柱が各戸ごとに竝んで、遠い遠い正面には工場の白い門と大きな灰白色の建物ばかりが埃つぽく見えるだけで、妙に面白くない通りであつた。著いてから馭者のぼり方がひどいのにも驚いたが、そのりん〳〵〳〵もそれでおしまひになつた。

工場の參觀は改めてここに書かない。此所で「樺太のパルプ竝製紙工業」といふ樺太廳版の小册子や紙の見本や繪葉書を貰つて、また私ら二人は一足先へ外へ出た。すると後ろから白髮の支那服の和製タゴールさんが追ひ蹤いて來たので三人になつた。

眞岡は露名エンルモコマブ、樺太西海岸での第一の殷賑な小都會で、鰊漁で有名だといふが、パルプ工場以外、夏にはさして興味を惹く街でもなささうに見えた。

「つまらないぢやないか。停車場へ行つて待つてゐよう。」

「や、何か目つかるよ。」

「目つかつたのは、ほれ、向うの靴屋ぐらゐだよ。少し内地とちがふやうだよ。」

「しやうがねえでさあ。あんな雪沓なら何處にだつてありまさあね。」とN老人。

「とにかく、お晝飯でもやるか。」

「や、しめた、蕎麥屋がある。物は試しだ、はひつてみようぢやないか。」

それは汚ない繩暖簾式の、どかりと腰かけておい一杯といふやつだが、主人公なかなか風流人とみえて、一錢銅貨大の孔があいて日の光が射し込んだその壁の上に拙い字で貼紙がしてある。

貸金はならぬ都の八重ざくらけふ現金の人ぞこひしき

だが、蕎麥は不思議にうまかつた。蠅がゐること、蠅がゐること。

（眞岡をここまで書いたが、書いてゐて自ら興味のないことおびただしい、前のパルプ工場で緊張したので一寸氣拔けのした體である。かうした記錄的紀行は書きたくないのだが、いつたい眞岡といふ街が雅味の無い街だつたのだ。此處の驛を出て了つたら、何とか筆はかはるだらう。ここまではまづ、息休めのブランクペエジとでも見てほしい。觀光團のおつきあひで。）

多蘭泊

汽車は駛る。

玩具のやうな、小さな、薄汚ない、ゴトゴトピーの二三輛の聯結列車である。それが私達觀光團第一班の爲にわざわざ臨時に仕立てたといふのである。これがまた、眞岡、アイヌ語のモウカ「美しい波の上」といふ美しい語義を持つた樺太西海岸での第一の市街から、南へ南へ、終點本斗を指して出た。や、それは今出たばかりの煙の、むくり、むくり、むくり、ぽつ、ぽつ〳〵である。

汽車は駛る。

さして高くない一連の小山の麓に添つて、

「や、これはひどいな、まるでザラザラの石ころまじりの、赤土ばかりぢやないか。この斜面は。」

「それでも上の方に椴松(とどまつ)が見えるぢやないか、あつ、空が青(あう)え。」

「や、虎杖(いたどり)だ、これはどうも驚いた、虎杖ばかりだ。」

「どうも土地が磽确ですな。虎杖の生えたところは碌な地味ぢやありませんよ。」とA博士。

「や、唐黍だ、三尺ぐらゐしきやないね。ほう、紅い房がもう出てるよ。」

「まだほのあかき唐黍の花、か。」

「もう歌かい。」

汽車は駛る。

私は見てゐる。

「や、すかんぽだ、すつかり枯れてる。どうもをかしいな。だが、いい色だな。カステラのふちそつくりの澁さだな、あの穗は。

や、また、すかんぽだな。

虎杖とすかんぽばかりだな。

や、白馬だ。

虎杖から顏を出した。」

汽車は駛る。

「Kさん、二班と三班はどうなりましたね。」と誰やらが聲をかけると、

「ええ、二班は眞岡泊りで、三班は野田へ引つ還す筈になつて居ります。」Kさんは東京鐵道局の旅客係である。

「今朝はどうも野田はひどうございましたな。どうも、あの波ではとても上れさうではございませんで。」と老團長。

「さうでした。上れればよかつたんですが、彼地(あちら)でも歡迎準備をして、花火など揚げてゐましたので氣の毒しました。宿もとつてありますので、三班だけ行つて貰ひました譯で、ええ。」

「野田はおもしろさうですか。」と私。

「いえ別に。」

「それは氣の毒しましたねえ。明日(あす)四時間も汽車で來るのでは大變ですね。」と、これは若い警部のA君。

「ぢやあ、眞岡組が一番當つたといふんですかい。」タゴール老だ。

「いや、これで、ここだけの話ですが、一班の方は、實は大當りで、あした、少し引き還して、アイヌの部落を見に行くことになつて居りますので。」Kさんが伏目で、氣の弱さうな笑顏をする。

「あ、アイヌ部落。それは何處です。」これは小樽からの新來の客の一人で、ラヂオ狂で、いつかの晩ももう碌にJ・O・A・Kが聞えないと悲觀してゐたF君。テニス界の淸水氏の夫人の兄さんだ。

「ええ、この沿線です。多蘭泊(クランドマリ)。もう一時間もしたら通るでせう。汽車から見える筈です。」と向う

の隅から札幌鐵道局の旅客課のS君。

「樺太アイヌですな。」と京大のA博士。

「左樣で。」

「その部落ばかりですか、アイヌのゐるのは。」

「や、まだ、東海岸に五箇所西海岸には三四箇所ぐらゐはありますですが、ええ、此處らでは多蘭泊ぐらゐですな。野田の一つ隣に登富津(とふつ)といふのがありますですが。」これは樺太廳の水産課。

「へへん、何やろかいな。アイヌにも藝妓はんがありまへよか。」神戸富豪のNさん。九州男のYが

「金持なんてん下俗(げさく)してなん。」と言つた人だ。

「あつはつはつはつ。」「はははは。」「ひつ。」

ここで、

「Nさん、本斗(ほんと)にはゐますぜ、そら、お樂しみでさあ。」そこでピーと、やつたはタゴール爺さん。

と、その口から片掌(かたこぶし)をはづしながら、大きな眼鏡を長い紐と一緒に片方ずらかしにして、圓い、光つた、惡童のやうな眼をする。そして、ちよいと、その傍の庄亮の眩をつつ突いた。

「やああ、こりや、あつはつはつはつ。」と庄亮、兩手を頭の横でうち振りうち振り、豪傑笑ひだ。

汽車は駛る。

西日が強いので、左側はすつかり鎧戸を上げてある。それで殘念なことには海岸が見えない。一つ落す。暑い光がかつと差し込む。

見える、見える、草葺の漁師の家が。海はすぐ前だ。一面に今日は光つてゐる。

「や、高麗丸が行つてる。」

その側の皆(みんな)が、トン、トン、トンと、鎧戸を落す。硝子戸までガタガタとやる。反對の側の二三人は立ち上つて來た。

「なるほど、今行くんだな。」

「ちやうど、同時になるでせうね。それとも汽船の方が遲いかな。」

「そりや遲れるでせうね、向うが。」

「だが、心丈夫ですな。」

さうださうだと、誰もがこの時は同感したであらう。永い間自分たちの家にして來た汽船だ。それに今日初めて、眞岡に上げ棄てにされて、團員が三方に別れ別れに今晩は分宿するといふのだから、何かしら心細い頼りないやうな氣がしないではなかつた。それに今朝は今朝でパルプ工場でかなり機械の威力に脅かされて來たのだ。そこで、今、同じ方向に今夜の泊りの本斗を目ざして、自分たちの高麗丸が、稍少し斜め先に、船體を眞横に見せて、さほど遠からぬ沖合を駛つてゐる。

あ、光つてる、光つてる、あれは舵機室の硝子だ。

あ、あの檣(マスト)、煙突、煙、煙、煙。

あ、黄だ、白だ、紫だ、赤だ。

あ、通風筒。あ、あの船室(ケビン)の丸窓。

あ、あれが自分たちの船室(ケビン)だな。

あ、誰か欄干にゐる。

おおい、おおいと、汽車の窓に乘り出して、一人が麥稈帽を振ると、

おおい、おおいと、また一人が麥稈帽を振ると、

おおい、おおいと、また一人が白扇を振ると、

おおい、おおいと、またまた一人がハンカチーフを振ると、

おおい、おおいと、あ、向うで何か振つた、振つた、振つた。

光る、光る、光る、光る。一面の波の光だ。

汽車は駛る。

玩具のやうな樺太の汽車。

カーブだ。や。砂濱だな。

木柵、木柵、木柵。

海老茶だ、あ、すかんぽだ、あ、お襁褓だ。あ、おぶつてゐる。
あ、草家、草家、板壁。日の丸。
向日葵、向日葵、黄、黄、黄、黄。
あ、裸の子供だ。
「わあい。」
「わあい。」
「わあい。」
「ばんざあい。」
「べんぢやあい。」
「ぢやあい。」
と、
「北原さん、無線電信は來てましたかい。」
白髪の支那服の、また牧畜家の、茶目の和製タゴール老人が、西日の窓に向つた私のぼんの窪に、うまく例の揶揄と笑ひとを射撃した。
當つた、と思つた。
私の上衣のポケットの中には、つい、先程旅客課のKさんから受取つたばかりの、今年四歳になる

坊やからの無電のそれがはひつてゐたのであつた。
カゼサンヤンドクレパパノオフネ
アブナイヨ
汽車が停つた。
やや、開けた山裾、家があちこち、みんな日の丸の旗を掲げた、つい前もお祭氣分の運送屋、
毛絲があります。
と、貼紙した店の横の雨戸袋。
ぞろぞろと汽車から下りる、またプラットホームを駈けて來る。茄子とトマトの籠、赤ん坊の眼、頭、帶、帶、足。違ふ違ふ、顔色が違ふ。眉の毛の深い女、娘、廂髪。
「アイヌだ。」
「アイヌだ。」
「や、なるほど。」
「へえ、なあるる、これはよろしいね、なかなか別嬪やないか。毛深うおまんな、へへん。」
「Nさん、本斗がありますよ。」
「そやかて、待ちなはれ。へへん。」

と、

「皆さん、此處が多蘭泊(タラントマリ)でして、ええ、今度汽車が動き出しましたら、その部落の間を通りますから、よくお氣をおつけになつて下さい。それからきれいな川へかかります。その川筋はまた鰊のよく獲れるところで。ええ、後で車掌に鰊漁のお話でもいたさせたいと思ひますから。」と札幌の鐵道局。

ピーと、玩具人形の驛長さんの呼子が鳴つた。

汽車が駛る。

あ、紅葵だ。

あ、また。

どうだ、あの色の新鮮なことは。不思議だな。小田原あたりよりもずつと色が純粹で明るいな。

あ、また葵だ。高い高い高い。

「や、アイヌの家だ。」

「出てゐる、出てゐる。」

「どれ。」

「ほうら。」

「やあ。」

「あ。」

汽車が駛る。駛る。駛る。

アイヌ、まことにアイヌの村にちがひない。彼等はまつたくアイヌだと、私は觀た。

アイヌは、アエオイナ神、別名アイヌ・ラク・グル（アイヌの臭ひある人）に依つて創造された祖先の後裔だと自身に彼等を思つてゐる。アイヌは蕨(はこべ)で頭を、土で身體を、柳で脊骨を創られた、とまた言はれてゐる。アイヌの眼窩(めのくぼ)は深い。髪の毛が深い。神々の髪の毛の人として彼等はその美髪を矜つてゐる。彼等は古傳神(オイナカムイ)オキクルミを矜る、その蝦夷島(アイヌモシリ)の神を。

アイヌは白皙人種であらうか。だが、かの人種の皮膚は銅色がちの蒼色だとジョン・バチエラー氏は言つた、私はそれを信じよう。

何とあの彼等及び彼女等の髪の濃く眉の濃く髯の濃いことであらう。

紅葵は鮮紅で、蕋が黄で、上向きがちに日を仰いで咲く。根から枝が分れて、そろつて延びて、花は段々を成して幾つともなく前に横に上に下につく。多蘭泊の紅葵は高い高い背丈である。乳綠の葉つぱ、莖、枝、みな水々しく、そして毛ばだつてゐる。咲きかけの折目のついた紅い蕾がそれらの頂邊にある。

向日葵の大輪の黄金色もまた、私の想像してゐたアイヌの村には無かつた。然し、この多蘭泊の部

落には、廂よりも越えて輝く五六七八の大輪がひとむらがりに群を成してゐる。これも日に向つて廻る。

家は低い草葺である。でなければ鮮人の小舍のやうに見ぐるしく、またバラックの網納屋のやうである。それらの家屋(チセ)も繪葉書などで見る北海道アイヌの傳統的家屋(チセ)とは殆ど趣を異にしてゐる。あまりに日本化してゐる。日本化したといへ、それは日本の乞食の住居のやうな陋屋がいかにも多く見られたのである。

だが、アイヌである。人種は確かにアイヌである。だが彼等の服裝は浴衣がけである。シャツにズボンである。淺ましいのはまた乞食同樣の風俗もしてゐる。

が、紅葵の傍、向日葵の花叢の中、または戸毎の入口の前、背戸の外に出て、子供まじりに、毛深い男女のぽつんぽつんと佇んでゐる姿を見ると、人種の血肉は爭はれないものだと觀た。日本人の私なぞには通ぜぬ深い何かがある。アイヌのさうした哀愁はまた何から來る。

おお、みんなが今、空を見上げてゐる。

おお、また所謂アイヌ模樣の厚司(あつし)を著た爺がゐる。ゐる、ゐる、二人も三人もゐる。

何と、かの爺どもの胡麻鹽の蓬々と亂れて深い渦卷をした髮の毛、凹んだ黑い兩眼に蔽ひさがつた眉毛、口髭、毛むくじやらの胸まで長々と垂れた頤髯だらう。何と莊嚴な顏貌と威嚴ある風采の持主で彼等はあるであらう。

あ、トルストイがゐる。トルストイがゐる。

おや、あの爺どもも空を仰いだ。

と、

「鷲だッ。」と、誰かが窓から見あげた。

はつと仰ぐと、アイヌ部落の、そのややうち開けた谿谷の上、海に迫つた丘陵の、椴松の黑い疎林の、その眞つ蒼な空に一點、颯爽と羽風を切つてゐるのは、

あ、たしかに鷲だ。

鷲は飛ぶ。飄としてまた流れて、翼を撓めて、あ、大きく張つた。

向うところは韃靼の黑い遙かな大うねりの波濤の彼方である。

鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎　芭蕉

これだなと私は思つた。

あ、アイヌが先刻(さつき)から見あげてゐたのは、あ、これだつたか。

青い青い空ではある。

汽車は駛る。

汽車は鐵橋にかかり、潺湲たる清流の、やや淺い銀光の平面をその片側に、何かしら紫の陰影をひそませた、そして河原の砂の光つた、木の橋がある、ついその下手を駛つて、轟とまた響を立てた。

「皆さん、鱇漁のお話をいたすさうです。」札幌鐵道局のS君が戸口で、立つて帽子を脱つた。前額の禿がてらてらと光る。少い髪を櫛目を透かしてぺつとりと撫でつけてゐる。

まだ若い車掌が、切符改めの通りすがりを、赤い顔をして、引き留められて、克明にハッと頭をさげたものだ。

「こりやいい。頼みますぜ。」

と、誰かが手を拍いた。

旅へ出ると老人組までが、いや、却つて茶目になる。

ピーと、またタゴール爺さんが口笛を吹いた。

「へえ、へえ。」と、車掌は眼を伏せて、「ちよつとちよつと。」と間を頭を下げて、手を戴くやうに、前の車へ切符拜見と出かけさうに、行きかける。それをタゴールさんが、矢庭に引つ捉へると、無理に自分の座席の隣に抑へつけて了つた。

汽車は駛る。

鷲を見つけてから、私の心は閑かになつた。

私は海を、遠い荒波を、通り過ぎる眼の前の濱の小石を眺めてゐる。

汽車は今、ひたひたと湛へた潮の、つい汀を、快い左右動を樂しみながら駛つてゆく。

韃靼海の八月のやや赤みかけた圓い太陽が、まだ水平線から、うち見には四五尺の空に輝き輝きしてゐる。だが、その下の遙かの遙かの寒い霞の曇りはどうだ。向うの何處かに沿海州。

荒れてる。荒れてる。外は飛沫が凄じいが、三四五六丁の彼方はまたとろりとした一面の閑かさで、腐れたやうにも濁つてゐる。劃つてゐるのは飛び飛びの青黑い岩の弧線である。

あ、鳥がゐる。

飛び飛びの岩のひとつひとつに、どれもが同じ北の一方を向いて、鴉よりはやや小さい、鵜鴒よりもやや大きい、南國の鳥とも違つた、何か寒げな、尻尾の動く、嘴の細かさうな鳥の姿である。

外の波濤は穂がしらが白く、内のとろみは乳黄で、またやや光つた銅色で、閑かなやうでもどうにもならない澱みがある。

澱みは凡てが昆布である。

子供がひとり、つッと此方を見て立ち佇つた。濱邊は昆布が散らかつてゐる。

昆布が海を腐らしてゐる。飛び飛びの岩の弧の線まで。

あ、たんぽぽだ。

汽車が停まつた。

「本斗(ほんと)」「本斗(ほんと)」

山高に燕尾服の、品のいい老人が、車窓に向つて直立した。若い従者がうしろに立つた。

老紳士は山高を脱つた。さうして、謹直な叩頭(おじぎ)。

本斗の町長であつた。

本斗の一夜

「おおい。まだかい。」

と、こちらは二階の欄干へ、浴衣がけの三尺帯で乗り出したのは私である。

「おおい、もうぢきだよう。」

廣い通を隔てた向うの理髪店から、椅子に掛け、姿見に對つたまま、その鏡の中から、ザッと刈つたばかりの坊主頭をしきりに振り立てるのはわが友庄亮である。首を竦めてキチンと構へ込んでゐる。何か脹れぼつたい頬の、細い細い眼で笑つてゐるやうでもある。

八月十四日の、樺太は本斗の晴明な暮れがたのツワイライトである。攝政宮殿下の行啓を仰いで、ついその翌晩、お祭氣分の濃厚な、黄や碧や赤やの色々の裝飾の中で、實に鮮かに一齊に電燈が點いた。それから五分とは經たなからう。殊にもこの眞向うの姿見、硝子棚、バリカン、廻轉椅子、カバーの白々々、立ち廻る理髪師の背廣の、ズボンの白、搔き立てなすりつけた客の頬や頤の石鹸の白、琥珀の香水、剃刀の光、鋏のチヤキチヤキ、さうした銀と緑との小夜景がまるで近代劇の或る場面か

のやうに私の前に展開された。その横文字の看板の、そのまた屋根の、町並の上の、近くは濃く青く、はるばると末は冥んだ韃靼海である。またいくらか薄い空の青みである。縁は陰つて白い寒い雲の流れである。

さうして、沖には高麗丸の船室の灯が、美々しく、ちらちらと、今や輝き出した。

チヤラン。チヤラン。チヤラン。

何やら金屬性の透つた音もきこえて來る。

「お腹が空いたぞう、いい加減にしないかなあ。」

と、また、乘り出す。

「ぢきだよう。待ちたまへ。」

「頭は濟んだかあい。」

「濟んだよう。これからお面だ。」

「酒落れるな、おい。」

「酒落れはしねえ。」

と、剃刀がピカリと上へ反れた。危險々々、後ろ斜めに凭れ氣味の、その刈りたて頭を。

ピーと按摩の笛。

おもしろいおもしろい、按摩も白の背廣で、麥稈帽である。

背廣といへば小樽で見た按摩も、これは霜ふりではあつたがやはり背廣でカラをはめ、薄汚れてねぢれてはゐたが、何か黒に赤みがかつたネクタイを結んでゐた。卄旅館でひとりで机に向つてゐた時のことである。縁側からにじり込んで、下座にズボンの膝を折目正しくかしこまつたその紳士を見て、私はまた土地の新進歌人のひとりかと早合點をした。それで、こちらも丁寧に向き直つて、さて、「あなたは誰方ですか。」とやつたものだ。

「ア……ン……マでございます。」

眼をぱしぱしで仰向いた。

流石に北海樺太はちがつてゐる。

白、コツコツ、白、白、コツコツ、ピー。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」

跳ね跳ねして、ちひさな二人の女の子と男の子とが、ややほの白い廣い通のまんなかを歌つて來る。これも白つぽいなと見てゐると、またその後からのはのつぽで白で、大跨だ。支那料理のコックでもあるかな。岡持さげて、また。

「エンヤラヤアノヤアヤ。」である。

ひらひらと、海の空では鷗か何かが飛んでゐる。一等星、二等星、生れたての幽かな星。

あ、波の音らしい。急にざわついて、またひつそりとなつた。

「まだかあい。おおい。」

妙に心がひもじくなる。で、煙草に、マッチをシュッと擦る。

と、隣の室でも誰かが立つた。

欄干に出る。

またその隣の室でも咳をした。

欄干に出た。

白の支那服の、白髪の、白髯の、和製タゴール老人の姿も見えた。

かうして、アーク燈のやうな薄い紫の空氣の、遠くは重い匂ひの紫となる。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　　芭蕉

白い障子を閉めきつて、何だか薄ら寒いなとなつた。夏は夏でも夜分は急に冷えるのがここらの氣候だと思はれる。褞袍（どてら）を浴衣の上に重ねる。それからぽつんとちやぶ臺の前に坐ると、傍の手あぶりには炭火がかつかと熾つてゐる。それでも、ひしやげた鐵瓶が、觸（さは）れば周（まは）りの疣々がまだ溫（ぬく）みかけたばかしである。

そこでお盆の上の蓋物のつまみを取つて開けて見る。なんと貧弱なビスケットだ。なすつた白の薄紅の花模樣を一つかじつて、淋しいなとなる。

お、電燈は無論點いてゐるのである、それもコードがダラリと垂れ過ぎた。立つて一と結びくくりあげると、白い陣笠形の上の埃が兩手にくつつく。

ところで豪傑笑ひの友人はまだ歸つて見えない。

「あはは、どうです。今夜はひとつ探險にでも出かけますか。」

隣から聲をかけた。小樽からのちかづきの、あの俊敏な紳士の、麥酒會社の重役の、ラヂオファンのF君である。さつきからこちらの悄氣かたをすつかり觀察してゐたものとみえる。傍にはこれもその連れのもういい年輩のHさんが長者らしく正坐して、またこちらを眺めてゐる。HさんはF君と同じS市の人で、同じく札幌の農科大學出（さういへば和製タゴールさんのN老人もその第一期の卒業生ださうである。）の有名な牧畜家だと聞いてゐる。溫顏の、それでゐて重厚な犯し難い風采である。I公爵の從弟だとも、また人格者だとも私に話してきかした人もあつた。俊敏と重厚と、いい取りあはせであるが、そのうへ、二人は非常に仲がよささうに見える。F君は眉根をキツと寄せて金緣眼鏡で、聲をあげて笑つたが、Hさんはこれも眼鏡だが、ややすこしく禿げあがつた廣い額の、髪は正しく搔いて、鼻の高い、それで眼元で優しく笑つた。なかなかよく練れてゐさうである。それと較べるとこちらの二人はどんなものかな。これも非常に氣が合つて、それで二人とも駄々つ子で、何か野呂

間のやうでもある。兎に角私も我儘者でかなり氣むつかしやだが、この私を一度も怒らせぬところは、不思議に庄亮えらいところがある。「まだ一度も喧嘩しないね。妙だね。」と、いつか私が笑つたら、「喧嘩してたまるものか。」と彼も笑つた。

「だが隨分長い旅行だぜ。誰だつて一度ぐらゐは氣まづい思ひをするものだよ。」とまた笑つたら、「あつはつはつ、僕なら大丈夫。」と頭を振り立てて豪傑笑ひをした。その庄亮はまた、いつもになく、チョボチョボの不精髭など剃つてゐる。

「出かけるかな。だが、飲めないでせう。お酒は。」

「ビールなら少々はいけますよ。」

「でも、ここのビールぢやね。」Hさんが火箸をいぢつた。

書き忘れたが、隔ての襖は初めつから開けつぱなしにしてあるのだ。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」とまた表を通つてゆく。

「エンヤラヤアノヤつて、ありやいつたい何の唄です。」F君。

「ソオレ漕げ、ヤアレ漕げといふのです。たしか中國邊の船唄だつたと思ひます。本歌は忘れました。がね。一寸かうした節だつたやうです。船頭かはいや、穩戸の瀨戸で、エンヤラヤアノヤア。ソオレ漕げ、ヤアレ漕げ、エンヤラヤアノサ。一丈五尺の、一丈五尺の、艪が撓る、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラサノサア。尤もこの歌詞は別物ですよ。」

「なるほど。でも、何だかちがつてやしませんか。あのエンヤラヤラアノヤアヤは。」

「さう、少々妙ですね。」

「や、はるかに見ゆるは本斗の港とやつてゐますよ。」

「ほう、それぢや替唄でせう。」

「本場ぢやないんですね。追分はどうです。」

「忍路高島ですか。あれは、流石に松前から此方のものですね。信濃の追分とはまた味がちがつていい。」

「信濃の追分といふと。」

「あれこそ追分の本元でせう。馬方節なのですね。西は追分東は關所せめて峠の茶屋までも。あれです。」

「すると、こちらの追分とはどうちがひます。」

「こちらのは船頭唄の追分です。節廻しが凡て艪拍子に連れて動いて、緩く、哀調になつてゐます。信濃のは馬子唄ですから、上り下りの山路の勾配から、轡の音、馬の歩調に合せて出來上つたものなのです。シャンシャンと手綱の鈴が鳴つてです。小諸……出て見いりや、となります。小諸節とも言ひます。」

「おもしろい。はは、それで、どつちも追分ですか。文句もおなじな。」

「いや、やはり信濃のが本場の追分ですね。西は追分だとか、今の小諸出て見りやだとか、

小諸出て見りや淺間の嶽にけさも三筋のけむり立つ
さまが來ぬ夜は雲場の草で刈る人もなしひとり寢る
淺間山から鬼や尻出して鎌でかつ切るやうな屁を垂れた

あはは。まつたく淺間山の麓から生れた唄ですな。あの信州の追分は今では寂びれ果てて了ひましたが、昔は中仙道と北國筋との追分でしてね。沓掛や輕井澤と竝んで淺間三宿と言つたのださうです。大名行列は隨分盛んだつたでせう。その追分には馬頭觀音が立つてゐるんですがね。いつか行つて見た時には、まだ早春で枯草の中にぺんぺん草の花が咲いてゐましたよ。古い旅籠屋では油屋といふ、元は脇本陣だつたさうですが、以前の儘の大きな古い建築で、軒下には青い獅子頭などが突き出てゐました。剝げちよろですがね。二階が出張つてゐましてね。それに入口の板の間が廣く、柱が大きくて、少くとも國寶ものですよ。それに淺間の裾野一帶が落葉松林でしてね。や、翁草がずゐぶん咲いてゐましたぜ。あの幅の廣い林道を材木をつけた二輪馬車がカラ〳〵〳〵と通るのです。霧のやうな雲が流れてね。や、これは話が横道に逸れて了ひましたが、碎けたところでは、

碓氷峠の權現さまよ、わしがためには守り神
送りましよかよ送られましよか、せめて峠の茶屋までも

といふやうなものになつてゐます。この信濃追分が北越の航路から蝦夷地へ流れ流れてゆくうちに、いつとなく波の響や艪拍子の中で洗はれ揉まれて、遂にあの船唄としての追分の哀調になつたのでせう。その土地々々で松前追分とか渡島追分、江差追分とか呼んでるのがそれです。新潟邊ではそれを松前節としてゐますが、それは逆輸入から來た一種の錯誤感で、かういふことは東洋と西洋との間にもよくありますよ。浮世繪と後期印象派、芭蕉あたりの象徴句とマラルメあたりの佛蘭西象徴派との關係、調べるとまだいくらもあるでせう。ところで忍路高島ですがね。

忍路高島およびもないが、せめて歌棄磯谷まで
帶は十勝にそのまま根室、落つる涙の幌泉

これがこちらでの最も古い追分でせう。この頃では前唄とか本唄とか組にしてゐるやうですが、さうさう、前唄の方は所謂松前前歌で、調子が輕い。」

「忍路高島には義經傳說がどうとか言ひますが。」とNさん。

「積丹土人の酋長の娘の話でせう。いや、あれはほんたうぢやなささうですよ。外のアイヌ傳說と混同したらしいのです。理窟は何でも後でよくくつつけますよ。」

「替唄といふものも澤山ありますかしら。」F君がまたこちらを眼鏡越しに透かした。

「それは年代が經つうちに、その歌曲に合せた新作も出來るでせうし、諸國の俚謠だの、小唄などが混入して歌はれることは隨分あります。大概の唄は二十六字調ですから、融通が利き通ぎるくらゐです。で、大島節の歌詞が安來節でも歌へるし、都々逸の文句が相撲甚句にもなるといふ風です。それに有名な歌詞はよく方々の土地で盜まれもします。坂は照る照るでも地名だけを變へて歌はれたり、

男伊達なら千ヶ崎沖の潮の早いのを留めてみよ

といふ大島のがつしやがしやが節が、小笠原の父島では八丈のしよめ節で、

男伊達ならワントネの岬の潮のながれを留めてみな

といふ風に轉化されて、それが小笠原特有の歌のやうに思はれたりします。それにをかしかつたのは、つい昨年でしたが、中央公論か何かで或る人の島々の民謠の事を書かれた中に、私の八丈風の新

作の民謠が、昔からの八丈の古謠として入れられてあつたことです。向うで歌つてゐたので、生粹のしよめ節の唄と思ひちがへたでせうが、かうした例はいくらもあるでせう。で、多少とも年代的に知つて置かないと飛んだ恥をかくことになります。民謠の精髓といふものはやはりその土地で生れたところに生命があるのですからね。樺太本斗のエンヤラヤアノヤアは、こりや眉唾ものですよ。」

と、「やああ。」と、やや顏を赤めて大にこにこで、庄亮が飛び込んで來た。つるりと片手で刈りたての頭を撫でて、著ふくれた褞袍姿の、陀々羅な足どりで、「はつはつはつ。」とまた笑つた。

それを見ると急にまたひもじくもなつて來る。

「どうしたんだい。もう夕飯だよ。」

「あつはつはつ。失敬。」と眼を細めて、首を振り振り、坐ると、また、「やああ。」と肩をゆすつた。

「お洒落だなあ。いつまで面なんぞあたつてゐるんだい。」

「なにそのう、海岸へ行つてゐたんだよ。明日は魚釣りに行くんだぞ。」

「見て來たかい。」

「うむむ。釣れるさうだ。舟でひとつ出かけるか。」

「どんな魚です。」とF君。

「いやあ、しまつた。訊くのを忘れた。なんでも魚だよ。」

「のんきだなあ。」と、今度はこちらで笑ひ出した。

「樺太横斷はどうする。きまつたら眞岡の自動車屋へ電話を掛けることになつてゐるんぢやないか。」
「どうもそのう、この感冒ぢや冒險はむつかしさうだね。明日は半日休養しようと思つてゐる。やはりみんなと一緒に大泊へ直航することにしようよ。」
「少々弱つたね。」
「今夜は按摩でも呼んでひとつ。」
「按摩はさつき通つたよ。白の背廣で。だがよく按摩の好きな人だな。僕なぞは擽つたくてしやうがない。」
「はつはつはつ。君はとても駄目だよ。」
「それにしても飯の遲いには困るな。ベルをひとつ押してくれ。」
「よおし。」と後ろの床柱の方を向く。
「ははは、ベルはさつきからのべつに押してますよ。」そこはF君抜け目がない。
「だが隨分悠長ですな、ここの家は。北海道から此方は妙にベルが利かない。」
「凍つちやつたんでせうよ。」
「ですがね。すこし變つてますよ。ぢやないですか。」
「まつたく、これあ、虐待ですよ。」
「それにしても、まるでバラックですね。梯子段だけでもつてるやうな宿屋だ。」

ここで言つて置くが、このSS旅館なるもの、何か下等な材木の木の香ばかしが生々しいが、スリッパでも穿かねばとても脂つぽくて歩けさうにもない薄汚さで、そのうへ、廊下の突き當りにはきまつて凸凹の姿見ばかりが、白ペンキ塗の厚縁の燦々で、脾弱い、すぐにも撓つて外れさうな障子や襖の割りの、そこらの間毎には膏藥のいきれがしたり、汗つぽい淫らな聲が饐えかけたりしてゐる。浴室へ行けばぬるりと滑るし、暗くて狹くて、天井が低くて、息抜きも無ければ、上り湯も無い。歪形のペシャンコの亜鉛の洗面器が一つ放つたらかしで、豆電燈が半熟れの鬼灯そのまま、それも黄色い線だけがWに明つてるだけだから驚いた。それにしても店の眞正面の梯子段の堂々としてゐることは、赤澁のニスの塗り立てで、まるで、しやいしあい、トン〳〵〳〵の遊廓式である。えらい梯子段だなとはひる時に見て上つた。
「手を拍くかな。」と庄亮。
「や、待つてゐようよ。神妙にしよう。恐れ入つた。」
と、ポン〳〵〳〵〳〵。さては和製タゴール老か、警部さんか。これはきびしいせつかちだ。
「エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」
外は祭の電光飾。

*

「へへん、來やがれ、畜生、何が何だつて、今頃になつて、碌でもないあまりもののお客なんぞをふり當てやがるんだ。と、てめへも小つぴどくやつつけやした譯で、へい。」

痩形の、小柄の、巾着切りか刑事みたいな、眼が迫つて險しい、青いしやつ面の、四十前後の、それは鼻つぱしの恐ろしい番頭君が、蟷螂さながらの敷居際の構へで、ヤッと片手の利鎌を振り立てた。宿帳をつけに來て坐り込んで了つたのである。

のつけから、あまりもののお客とやられて、思はずギョッとしたのは、庄亮、H、F、白秋だ。悲觀した。

「ふつ、あまりものとはひどいぢやないか。」とF君。

「へつ、これは御勘辨を。それでも何で、やつぱりBB旅館のあぶれ……。」

「あつはつはつ。あぶれは驚いた。こいつはおもしれえ。」と庄亮。

「あぶれのお客をおつつけやがつて。——と。」

「おいおい、いい加減にしないか。」とF君。

「あぶれだよ、あぶれだよ。」と白秋。

「おもしれえ、おもしれえ。」

「あぶれぢやないよ。こつちの勝手で、別れて來たまでさ。BB旅館があまり混んでゐるやうでね。まだ團長へも私たちがここに來てゐることを知らしてないくらゐだからね。あまりものを向うで意地

わるく押しつけたといふ譯でもないさ。」これは重厚だ。

「失敬きはまる。出ようぢやありませんか。」これは俊敏だ。

實際私たちは、怪しいお客の剩餘ぢやないんである。驛から町長の案内で、海岸寄りのBB旅館の前に初めは立つた。

何でも鐵道局との打ち合せも濟んでゐたものと思はれたし、東京の旅客課のK君も附いてゐることなり、や、お疲れさま、どうぞとあつたので、そこで一同が安心して鞄を投げ出し、埃つぽい編上げの紐も解いたのである。だが少々澁つたのは桃色のスカートの、鼠色の華奢な眼鏡の、海老茶帽子の、さうした夫人同伴のB重役H會社員K工學博士あたりであつた。別室があるかないかの問題である。ところが廊下でかなり騷ついたのは昨日からの客がかなり混み合つてゐるやうで、それに旅館の方でも、例の講中式團體客竝に何でも一坪に二三人の鮨詰で濟ませるものと多寡をくくつてゐたらしいのだ。一等船客の贅澤連が三十人も押しかけて、それで別室々々では狼狽したのは町長ばかりでなかつた。やつと兎に角どうにか收まつたらしいが、そちこちの形勢がまだ蜜蜂の函の穩かならぬ呟きをひそめてゐた。私たちも一旦その後から上りかけたが、往來から何か意味あり氣にF君が目交をするので、また靴の紐を結び直して外へ出た。F君はHさんを語らつてサッサと歩き出した。さうしてその筋向ひのこのSS旅館へはひると、前の會話に出た堂々たる遊廓式のまた博覽會の龍宮風の赤ニスの梯子段をトントンであつた。私たち四人に、N老人にA警部、それにわが友若山牧水に似た鼠頭

巾の小爺さんにその連れの萬世橋はなにがし宿屋の主人公、この二人はお江戸の酒徒だが、さぞ今頃は縮こまつて、悲しい無言の憤激をその衰へた眉根の皺に寄せてゐることであらう。

「へへ、どうも相濟みませんで、お客様には何とも申し譯ございませんが、じたい、かうしたいきさつでがして、へい。」と、スッスッと乘り出した。この蟷螂少からず神經性だとみえる。その利鎌を今度は二た振り右と左で空に反す、その柄の兩膝に確と立てると、張り肱の、何かピリピリした凄い蜂谷になる。

青い青い青い青い、青臭い。

「いや、なんでございますな。癪、癪でして、ええ、そもそもBB旅館なるものが、そりやあ本斗一の大店でせう。でせうがね、何かあればこれ見よがしだ。見識面をしくさる。役人共とは結託する。勝手氣儘の爲放題で、宿屋仲間の公德を蹂躙する。……」

公德がをかしいのか、ふふつと誰かが笑つた。

「てめえどもは、御覽のとほり、安普請のバラック旅館にはちがひないのですがア。」

「梯子段はえれえよ。」

「へつへ、御常談でせう。」とちよつとたじたじとなつたが、それでもすぐに立て直して、ギヨロリ眼の半腰になつた。

「何がBB、何が町長でございますだ。昨日も昨日、團體客が三百人も來る、宮様の行啓中だ。さあ

騒ぎだ、この潮時に一軒で獨占するのも氣の毒だ。半分別けてあげよう。へん、別けてあげようが聞いて呆れるぢやありませんかね。さあ、收容おぼつかない。自力にあまるならあまるで、SS頼む、弱つた、助けてくれでいい。そりや平生は平生、さうでがせう。向うと此方だ。商賣敵だ。角突き合ひならどつちもどつちだ。だがいざとなりやお互の公德心に訴へる。相互扶助でがさあね。」

「ほほう、相互扶助。」

「へえへえ、さうした理窟ぢやありますまいか。よしんばプロでもブルでも水平社でもでさあ。」

「おもしれえ、おもしれえ。」と庄亮。

「恩を著せるにやあたらねえ。畜生、生意氣ぬかすな。と、ここまでかう癇の蟲がぐつと込みあげて來ましたね、だがでがす。まあさうしたもんぢやねえ。町長さんの口添もあり、これも本斗の爲だと一先づ胸をさすつて、そこは潔く引受けたのでがした。」

「さうかい。ふうむ、流石だ。」F君も茶目だ。

「ところで、畜生、今朝になつて、話がちがつた、三十人しか來ない。こちらだけで引受ける。はい左様なら。よくもぬかした。鯠粕、强突張り、どうするか見てやがれ。と、こりやあてめえの怒るのが無理はありますめえ。」

「さうさう。」とHさんもうまく遣る。

「それに町長も町長でがさあ。さうなれば知らぬ顔の半兵衛さんだ。山高でフロックコートで、お從

者を連れてすうと素通りで、や、SS、氣の毒した、御苦勞とも拔かすこつぢやねえ。何といつてもブルはブルでがす。大店のBBの肩ばかり持ちやがつて、成つちやゐねえ。たかだか植民地の町長ですからな。無鳥島の蝙蝠でがすな。」

「溫厚ないい町長さんぢやないか。風采の立派な、ちよつと珍らしいよ。」と、これは私だ。

「そりやあ押出しは立派でがせう。知れたもんぢやありやせん。お客さんがはひられた。今度は賴むだ。ちえつ、莫迦にしてゐやがる。」

「まあ怒るなよ。七八人でも僕らが來たからいいぢやないかい。」

「いけません。」

「夕飯でも早く持つて來さしたらどうだい。」少々心細くなる。

「そりや差し上げます。でがすがな。三百人の二分の一で、百五十人だ。よしきた、やつつけで、暗いうちからコツ〳〵〳〵〳〵、なにしろ、切り込みでも容易なこつぢやねえんで、やつと用意が出來て、さあいつでも來やがれとなつたところで、たつた八人、それもあまりものの。」

「おいおい、止してくれ、またまた、あまりものかい。」

「へへえ、それでも積に障りやがるんで。や、こいつあ失禮を。はつはつ。」

「笑ひごつちやないぢやないか。もう支度は出來てゐるんだらう。」で、ぢりぢりとなつたのはF君である。

「いや、昨日の御行啓の後でして、なにしろ、樺太廳のお役人は來る、新聞記者は騷ぐ。それに軍人、商人、何々團員で、すつかり滿員の大盛況で、實は家内中へとへとになつたところで、今朝の切り込みで、それで見事にスカ喰つたんですからな。一同張合ひ拔けの體でしてな。昨夜だつて誰ひとり寢やしません。いつたい團體客に碌な……いや、へへえ。」

「悲觀、悲觀。」

「おやおや。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

あははは、みんなで笑ひくづれたが、

「兎に角、食べさせるのか、いつたい。」

「へええ、差し上げますには差し上げますですがな、もう一切合切種切れで、看も附け合せも何にもありやしねえでがす。」

「それでも百五十人分。」

「いや、あれは胸くそがわるいので、根こそぎ外のお客さま方へ御馳走しちやいました。遺恨骨髓に徹すで。かうなるとさつぱりしたもんでさあ。日本晴で、へへ。」

外のお客さま方が呆れる。我々の外には一室か二室しか塞がつてゐないのにと思ふと噴き出したくもなつたが、

「そこで、こつちはどうなるんだい。」とまたF君。
「ええ、とんとまだ何ですがな。支度を致させますならこれからでがす。」
「ふふむ。」
「や、どうも、へへ、それでは宿帳の方をなにぶん。」
くるりと身を飜すと、スツと一と飛び、トン〳〵〳〵〳〵と、梯子段を駈け下りて了つた。

*

「驚いたな、これは。」
「おやおや、罐詰の筍かい。」
隣は隣で、
「やああ。酸つぱい椎茸だな。これは固い。や、なんだ、大和煮か。」
「はは、鰯の附け燒とは初めてだね。」
「どうです、食べられますか。ひどい晩飯ですな。」とF君の眼が眼鏡越しに笑ひかける。お互、かうなれば何か問題が起きる方が結句茶目氣分の幸福を感ずるのだ。
「プーアですな。プーアだな。」
「おもしれえ、おもしれえ。」

「吉植、おもしれえおもしれえで兩手を振つてばかりゐたつて七面鳥の卵が湧いて來る筈はないぞ。ベルをひとつ押してくれ。」
「あつはつはつ、美食家の君にはたまるまい。俺はこのトマトで結構。」
「トマトだつて心がコチコチぢやないか。俺は御免を蒙る。ビフテーキでもとらう。」
「そのビフテーキが小樽式。いや、もつとコチコチだらうよ。」
「弱つたな、F君。これはやつてゐますか。」と、そこで左手を一寸と口の邊。
「サイダーにしましたよ。ビールはまたサクラでせうからな。」
「こつちは言つてあるかい、酒は。」と庄亮の方へ。
「言ひつけといた筈だがね。あつはつは、とんと貉の道だよ。」
「鼬の道とは聞いたが、貉の道とは、これも初めてだね。」
「さうかい、鼬かい。あつはつは。」
「弱る。俺はもうむぐつちよで、高麗丸へ歸りたくなつた。」
「印旛沼なら、この頃は鯉のあらひに鯰の丸燒といふところだね。白燒の鰻もおつなものだぜ。」
「俺のところだつて、この頃は鮎のフライがある。それに鰆は今しゆんだな。コールドビーフが食べたいな。おい。」
「茄子、南瓜、隱元、大蒜、うちの畑はいいよ。そりや。」

「だが、あの大蒜には閉口した。」
「あつはつはつ。あの時の君の顰め面つてなかつたぜ。うちでは話の種になつてゐる。」
「ほう、さうかい。」
「ところで、ここの料理だがね。罐詰物などにしなくても、なんでこの土地の新鮮な魚や野菜を附けないのかな。」
「内地の物だと何でもいいことにしてるんぢやないかね。これでも優遇のつもりかも知れん。」
「優遇ぢやありませんよ。」向うから聲がする。
「姐さん。や、酒が來た。まあひとつ遣らう。どうだい。」
「うむ、ありがてえ。」
と、そこで口を盃へ、顔を見合せると、二人とも、や、や、や、
「駄目だな、どうも。」
「こりやいけねえ。」
と、その時、旅客課のK君が「やあ。」とはひつて來た。何かおどおどして、氣弱さうな微笑を眼の縁に湛へて力がない。立ちながら、帽子を片手で。
「どうも手違ひばかりいたしまして、今日はすつかり失敗です。こちらは如何でせうか。」
「面白いですよ。なかなか。」

「あつはつ、素敵々々。」
「虐待極れりです。」
「いや、いいでせう。まあ。」
立ち竦んだK君、
「いや、あちらでは團長が怒り出しましてね。」
「やつぱり鮨詰ですか。」
「ええ、何分昨日行啓の今晩ですから、居殘りでかなり混雜してゐますし、宿でも町の方でもすつかり疲れ切つてゐるので、どうにも行き屆きませんでね。團長などは外出中に無斷で室を取り代へられましたのでね。御機嫌頗る斜めです。我々觀光團の面目に關するといふので、困りました。」
「鐵道省の方では豫め何か打ち合せしてあつたんでせう。」
「ええ、手筈はよくついてゐた譯なんですが。」
「まあ、いいでせう。」
「すると、こちらの方がまだ優待ですぜ。」
「ぢやあ、どうぞあしからず。」と頭を下げて、K君は出て行つた。
ビールの方がまだましだらうとなつて、それから、
「玉子燒にでもするか。」

「玉子燒とは窮したね。」

出來るかと、女中に訊くと、出來ますと言ふ。そこで誂へて、チビリ、チビリ、ビールを嘗めてゐると、何時の間にか隣ではひつそりとなつた。早や影もないのだ。

待てども待てども玉子燒は出て來ない。

「按摩でも呼ぶかな。おい、姐さん。」

「玉子燒はまだかい。おい、姐さん。」

彼是一時間も經つたか。やつと、兩手でうんとこさと擁へ込んだのを見ると驚くべし、直徑一尺五寸餘もあらうと思はれる雅味のない大皿に盛りも盛つたり、恐らく十人前は燒いたであらうところの部厚な白班の玉子燒である。それにおほかたは冷めきつてゐる。さうだらう。これくらゐ多量に燒くうちには何の溫みも飛び去つて了ふであらう。

「おい。二十四匹の黑鶇封じ込まれてパイの中。といふマザア・グウスの童謠があるが、この玉子燒なら三四十匹の二十日鼠は棲めさうだな。いささか非常識だね。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

（ここで書き添へて置くが、この玉子燒は翌日の勘定書には拾何圓とか書き出されてあつた。）

外は明るい電光飾。

エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。……

「あ、やつてるな。」

山の手寄りの驛の空では赤や綠の電灯が深紫の闇の中に煌々と二列に綴られてゐた。何かまたほうほうと汽笛のけはひもした。私達、庄亮と同じく褞袍著のタゴール老人と私とは、うち連れて、冠木門に見越しの落葉松といつた風の軒竝の前の、うち濕つた暗い通をあるいてゐた。夜はもう十時に近かつたらう。

たまさかに、障子が橙色の灯影に燃え立つやうに明つて見える二階はあつたが、それでもまだ素見の客の姿も、そこらの格子戸の中には見透せなかつた。

だが、かうして見知らぬこの北方の夏の夜の雰圍氣の何處かで、內地で聽くやうなあの三味の音締めがして、そしてあのエンヤラヤアノヤアヤである。

大きな貸座敷風の構へも一戸二戸はあつた。大概はまた待合風の怪しい景情であつた。

「よう。目つけましたよ。あつはつはつ。」

N老人が突然立ち留つて、上を仰ぐと哄笑した。

土藏風の階上の窓は開かれて、その窓の欄干に横向に凭れて、そのまたほろ醉の棗面を外氣に吹か

れてゐた。Dさんだ。初め私は中學校長かと思つたがさうでもないらしかつた。溫厚な人柄らしかつた。すつ込まうとしたが、どつこい、N老人、さうはさせない。

「押しかけますぜ。ないしよごとはすぐ暴露れまさあね。お連れさんは誰方ですい。」

「や、これあ上りたまへ。」

今は爲方なしといふ風、それで、どかどかとはひつて、何處だ何處だと、梯子段から上つて、やあやあやあである。

「これは驚きましたね。かねての謹嚴組たる皆さんが、やあ、Kさん、貴方ですか。」

そこにはわが親友Mの養父さんたる建築家のK大人が、もう顔も眞赤にして小さく床柱に凭りかかつて、いい機嫌で、旅のころもは篠かけのう篠かけのう、であつた。

神戸の綿商であるNさんなぞは、飄逸な海龜さながらの長い首を前伸びに踉けさして、ヤレ漕げソレ漕げエンヤラヤアノヤアヤである。藝妓とも白首ともつかぬ若い女を二人ほど手元に引きつけて、それもいい加減に本性を露はしかけてゐるのだつた。

我々一同著座。ほどよい陣形に割り込むと、さて、盃の雨がふる。

「へへん、何やな、おまはん狐やろかい。見なはれ。これでも藝妓はんいうてますさかい、阿呆らしやな。」

「ちえ、どうせ、狐ですよう。」と、三味線をペコペコやつてゐたのが、口をヒヨイと尖らした。眼

の縁に紅でもさしたのか、それがなるほど白首の狐の面。

「Kさんききなはれ、これが化け猫や。樺太いふところは凄いもんやな。エンヤラヤアノヤアヤや。」

「エンヤラヤアノヤアヤはおもしろいね。歌つて御覽。」

「はるかに見ゆるは本斗の港、エンヤラヤアノヤア、ヤレ漕げソレ漕げ、エンヤラヤノ。」

「やはり、何だな。本斗の港だな。」

「行啓記念の唄やいひよる。へんな唄やな。」

「ははあ、さうか、ほう。」

これでわかつた。拙い唄だと思つたが、

Nさんはいよいよ出て卑猥になる。

「ストトン〳〵と通はせてえ。これが流行のストトン節や。」

「知つてますようだ。」

「今さら嫌とはどうよくなや。」

「嫌なら嫌だと最初から。でせう。」

「言へばストトンと通やせぬ。」

「ストトン〳〵。」

「籠の鳥はどうやな。籠の鳥。」

「知つてますよう。逢ひたさ見たさに怖さもわすれえ……。」
「さあ立たう、立たう、皆さん。」
「まあ、まあ、よろしいやおまへんか。ええやええや。」
それでも、流石に勘定高い。切り上げることは知つてゐる。直ぐに一緒に立ちかけた。そして、ひよろひよろと狐の面にしなだれかかつた。
「あら——だ。いやあ。助けてええ……。」
と、「なに泣いてはるのや。さあ、來なはれ。」
「出るに出られぬ……籠の鳥。……」
海には高麗丸。船室(ケビン)の灯。町には明るい電光飾。

*

星。
星。
星。
星。
空馬車。

空馬車。
空馬車。
ぽつり、ぽつり、ぽつりと、奉迎門の明るい電光飾に、三人の褞袍著(どてら)の姿が埠頭の廣場に現はれる。
中の一人は白髪に白髯である。
空は暗い。
波の音がする。
高麗丸の灯も近々と綴られてる、その沖に。
あ、ひらひらと何やら白いものが飛んでゐる。
私は兩耳に兩手をあてる。
ほういほういと聲がする。
と、巨大な奉迎門の黑い影、影、影。
正門と兩側の小門。
あまりにシンメトリカルなその投影。
私達は明るい反射光の中を通り抜ける。
綠の杉の葉のアーチには、鰊がゐる。鮭がゐる。眼が光る。腹が光る。口が暗い、尻尾が暗い。
昆布がある。烏賊がゐる。荒布が靡き、大きな朱色の蟹が匍ひ、貝が光る。

暗い、青い、赤い。

凡ては本斗の海産物で裝飾したその奉迎門は思ひつきであつた。

私は脚柱の一つに耳を當てる。

韃靼海の深い、遠い、冥い響が、海鳴が、波の音が、潮騷が。

あ、きこえる、きこえる。

「や、君は此處に何をしてゐるの。」

左手の脚柱の暗い投影の中に、濃い鼠の潮じみ雨じみた角錐形の天幕が一つ。その中に、これも鼠の頭巾附きの汚れ破れた雨外套をかぶつて、誰やらごろ寢してゐた。

テントの中のカンテラの灯、血のやうな豆の灯。

「夜番してゐるのです。盜まれるといけないから。」

「何を。」

「あの鰊や蟹を。」

おお、さうして、昆布を、貝類を、鮭を、荒布を、雲丹を。すけとうだい、樺太鱒を。

エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ……

暗い暗い海。

星。

星。

星。

白いひらひら。

ほういほういと聲がする。

樺太横斷

ひどい自動車である。幌は破れ、車體は彎(ゆが)み、タイヤは擦り減り、しかもごろた石の凸凹の山坂道を駛り上るのである。揺れるの揺れないのでない。これが樺太横斷を決行しようとする私たちの使用車だといふのだから驚く。

西海岸の眞岡から、樺太廳の所在地たる豐原まで、二十餘里の山野を、蝦夷松、椴松、白樺の原生林を拔けて、怪獸のごとくまた疾風のごとく自動車で横斷することは、少くともこの旅行中の一大壯擧にはちがひない。この話は國境の安別から南航の船上で幾度か提議されたが、決死の覺悟なら兎に角まづ見合せたがいいだらうとなつた。それほど危險至極の事だと噂されてゐた。それでもまだ私と庄亮とは諦めがつかないので、眞岡に上ると、市内見物の道すがら、綠の青い波型の裝飾をそよがした例の簡素な幌馬車をりん〳〵〳〵で、最寄りの自動車屋をあちこちと探し廻つたものだ。見つけて、訊き合せると既に出拂つて一臺の客待もなかつた。樺太廳のを借りようとしたが、行啓後のことで、凡てが豐原に發つて了つてゐた。で、名刺を渡して、明朝行けるやうだつたら本斗から電話を

かけるからといふことにして、またりん〳〵〳〵でパルプ工場へ駛らした。本斗の一夜ですつかり興が醒めて、やはり團員と共に大泊へ廻航したが安全だし、半日の小閑をぬすんで、沖釣にでも出かけようかとなつた。それが朝になると、咄嗟に横斷の議が極まつた。N老人と警部のA君が飛び込んで來て、俊敏のF君が奮起し、それに私までが噪(はしや)ぎ出したので、重厚のHさん、風邪ひき鯰のわが庄亮までが、よし行かうとなつた。と、汽車の時間までにもうキッチリ五分しかないと言ふ。眞岡へ電話をかける、勘定を呼ぶ、團長へ單獨行動についての諒解を求める、やれ、シャツ、やれ靴下といふ騷ぎで、大慌てに慌てて停車場へ駈けつけ、それから、汽車へ乘ると初めて、みんなが顏を見合せた。

「さあ、吾々の團長を選擧しようぢやないか。」となる。N老人が最年長者だ、極まつた極まつたで、これは一議に及ばず可決、それから誰言ふとなくロッペン團なるものが出來あがつた。オホーツク海は海豹島に三十萬羽も羽ばたいてゐるといふロッペン鳥を聯想して、吾々の六人をもぢつたものだ。たわいのないことおびただしい。このロッペン團かなり不良である。

眞岡驛へ著いたのが九時。その驛前のなにがし洋食店の階下から見た外光はすでに白く輝いてゐた。自動車の來るのを待つ間に私たちは幽かに沁み出る額の汗を感じながら、爽やかなアイスクリームの黄を啜り、水筒に水を、辯當鞄にサンドウヰッチを、チョコレートケーキ、餡パン、思ひ思ひに用意した。

と、自動車の爆音がした。それが、このひどいぼろぼろの幌の、タイヤであつた。高等の大型だといふのがこれである。それにやつと六人が膝と膝とを突き合せると、運轉手が直ぐに一人十五圓づつの切符を切りはじめた。一臺六十圓の貸切といふ約束とは違つてゐる。それにまた山高帽に青風呂敷の蝙蝠傘の尻端折の男を一人、途中から拾つて無理にも割り込ませようとした。これでは乘合であつて特別仕立ではない。貪慾にも程があると思つてゐると、たうとう庄亮が怒り出した。

「俺は、何だそのう、日本新聞聯盟の外報部長をしてゐる。」

「へへ。」

「鐵道省の鐵道會員としても視察に來たものだがね。第一貸切であるか、そのう、乘合であるか問題だらうぢやねえか。貸切ならば約束外の切符制は間違つてゐる。が、そのう、乘合とするとう、すでにその規定人員を過超して、しかもなほかつ暴利をう……。」

プ……ッ、ピッ／／／／／、急に帽子の後頭をすくめた運轉手は、矢鱈に逃げ腰の、ハンドルにばかりしがみついた。わあ／／／わあつといふ私たちの歡聲に追つかけられて。

だが、危險々々、このぼろ自動車の揺れ方といつたら。

*

光。光。綠。綠。

キヤベッ、キヤベッ、キヤベッ、キヤベッ、キヤベッ。

おや、パルプだ。小舍だ。あ、紅だ、紅だ、陽炎、陽炎、陽炎。

崖だ。椴松だ。熊笹だ。あ、谿々々。や、虎杖だ。

と、パンクだ。

「やつたな。」とそろつて飛び下りる。

と、また私たちは、高原の、一路坦々たる、大虎杖の林の中に在る私たちを見出した。

虎杖のやや赤ちやけた蟲くひ葉の日ざかりである。

自動車は投げ出されたやうに傾いてゐる。黑と灰色との巨大な昆蟲だ。暑い土埃がふつかけて遠く白く奔つてゆく。運轉手はまた同じやうな擦り減らしのタイヤと取り替へる。しきりと尻から蹲んでポク／／カン／／である。

しんしんと蟲の音がする。

さらさらと何かの葉ずれがする。

強い強い草いきれである。青、青、青。

そこで六人が、A、A、A、A、A、Aの形に帽子を脱いで駈け出して見る。麥稈、パナマ、ヘルメット。光、光、光。

「あ、紫だ、や。」

「附子の花だよ。」
アイヌの附子矢の塗料の、有毒植物の附子の花の新鮮さ。
私はすなはち葡萄入りパンをかじり出す。
ひゆう、へう。……
あ、ほととぎすが翔る、翔る。

*

第二のパンクした時、私たちは青い青い樺太蕗の林の中にあつた私たちを見た。
おそらく一丈にも近いだらうと思はれる樺太蕗のすばらしい高さ、その紅い線の通つた六角形の太莖、裏白の、しかも綠の表面の、八月の日光を透かす夕立のやうな反射。
なんと爽快な嵐。
なんとまた大きな蝸牛だ。あ、その觸覺のアンテナは聽く、
JOAK、こちらは東京放送局であります。
あつ、さうだ、今は恰度童謠の時間だ。
そこで、サンドウキッチだ。
私は道端の巨大な蕗の根に兩足を投げ出した。清淨な、また沁み出るやうな葉綠素の濃い香氣がし

た。いや、氾濫だ。大洪水。
庄亮は向うの蕗林を掻き分け掻き分け見えなくなつた。野天の排泄、と思ふと深い呼吸がこちらからも放たれてゆく。
開放された、全く。原始の自由のこの簡朴。
ただ、默々と光る麥稈帽。
私はしみじみとまた、私のホワイトシャツの、自分の汗のにほひを嗅いだ。流るるやうなこの汗。
なんとすいすいしたサラダと辛子だ。このハムだ、パンだ。
「どうですい。」と、白髮白髯の、そして朱面の、白い麻の支那服の、頑健そのもののN老人が立ちながら、その頭の上の蕗の葉の一つを仰いだ。
驚くべき葉脈の太い線。その龜の子形。
綠色の太陽。
ポキリと音がした。
あつ、折つたのだな、
おお、歩いて來る、動いて來る、輝いて來る、飜つて來る、一枚の大きな蕗の葉が。
蹲んで庄亮が構へた、その巨大な莖の中ほどを握つて。
私はマッチを擦つた。一本。なんと生きた赤い火だ。

カメラだ。そこだ。パチッだ。

*

第三のパンクした時、私たちは鬱蒼とした樺太柳の、白楊の、また絹柳の綠陰にはひりかけた私たちを見た。

木の橋があつた。潺湲たる清流があつた。

水は澄み、何か走る魚鱗の光が見えた。

「鮠(はえ)かしら。」

「いや、鮟(やまめ)かもしれない。」

向うに山があつた。椴松の林があつた。熊笹の柔かさうな微風の深い斜面の裾にはまた、紅の華魁草に似た花が見渡すかぎりのお花畑を作つてゐた。

「何の花だらう。」と私は訊いた。

「柳蘭です。」と運轉手は、タイヤに空氣を入れ入れ振り返つた。

來る道でもよく眼についた花だつたなと、私は肯いた。あ、あの紅いのもさうだつたのだ。

黄色い、安別で花叢を成したあの丈高い女郎花風のも咲き亂れてゐた。

下手はまた、風に楊が葉裏を飜してゐた。

その銀、銀、銀。

水面のまた閑かな投影、技垂柳の深さ。

白い雲、やや潤んで晴れわたつた空、大氣。

私はまた立ちながら、ポケットから赤い一箇のトマトを取り出して、しやぶしやぶかじつた。

おお、滴(た)れる、滴(た)れる、トマトの漿(しる)水が。

「ええ、おい、桃太郎の桃でも流れて來さうなところだな。」

*

道は椴松の原野から椴松の山林に入り、幾度かまた原野に下り、また山林をのぼつてゆく。

さうして山々はますます深く、自動車は迂回し、迂回し、山腹をのぼつてゆく。

椴松の梢は寒く、林は黑く、さうしてその間からちらと青い空を覗かせてはまた濃く黑く密叢した林となる。

「ここは何といふ峠だね。」

「熊笹峠です。」と運轉手が答へた。

なるほど、熊笹の大なだれの波のうねりは驚くべく光滑に、また底に暗んで、しかもいかにも寢よげな絨毯の青みを重ねた。それが近づけば近づくほどの深みを撓めて見えた。

光が天の一方から流れる、流れる、流れる。
瀧氣か、冷氣か、雲が迅いか、日がかげるか、自動車の捲き起す疾風か、私たちの胴ぶるひこそは繁くなると、
ああ、古蒼なさるをがせが椴松の高い枝にかかつてゐる。
風邪氣の庄亮に私は私の綠のレーンコートを頭からかぶせた。私の黑のアルパカが吹かれる、吹かれる、吹かれる。

からまつの林に入りて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり、
旅ゆくはさびしかりけり。

この落葉松の私の詩を、私はまた思ひ出した。
ああ、その落葉松の林にもはひつた。

*

おそらく、私たちを乘せた巨大な甲蟲は、今は一千五百尺以上の山中を驀進してゐる。
霧は霧を追つて奔つた。風は風を吹き落して奔つた。
と、遙かに、思はぬところに海の一面が見えた。
あ、黑い黑い韃靼海。
眞夏の卷雲。
まさしく、自動車は逆行しつつある。と思ふ刹那にまた山頂の一角を繞つた。椴松の原野がまた眼下に見えて、今度はひた降りに疾走する。
眞岡から此處までの中、私たちは、ほんの二三戸の一部落を見たのみであつた。
幽邃と幽深と、北方の原生林の陰鬱な植物の威壓と無關心。
と、
「君とォわかァれて、コラサ。」である。
「松原ゆゥけェば、コラサ。」
や、赤、赤、赤、黃、黃、黃、白、白、白。
安來節だ。
三味線だ。
飾り屋臺だ。

や、や、や、襷だ、紅だ、姉さんかぶりだ、浴衣だ、赤い蹴出しだ、白足袋だ。や、や、や、や。一、二、三、四、五人。

コラサッと笊を兩手で、コラサ。

しかも、くわつと明つた眞つ白い大道のまん中である。コラサッ。

私たちの自動車は、思はぬこの娘子軍の出現にいきなり前方を塞かれて、たじたじとなるとガソリンの爆音のみ、徒らに我が天心へ反響さして、さて停まると、ますます噪いで、浮かれて、ひつかかへたペコペコ三味線の連弾と來た。

コラサッとコラサッと、

無言の鰌すくひの足取が左へ左へと腰をひねつて廻つてゆく。

いつたい、此奴ら、人間であるか、ただしは山の貉であらうか。それは知らぬ。ただ踊る姿は人間の女で、笊は手振は足取は鰌すくひにちがひない。

何たる奇怪。

私は眼をこすつた。

一同も總立ちになつた。

「安來せんげェ……エェ……ン……ンッ。コラサイイ。」

「なあんだ、後家さんか。わつはつ。」N老人が、そして、ひゆうと指笛を鳴らした。

「おもしれえ、おもしれえ。」庄亮だ。

「あつはつはつ、こりやいい、白秋さんどうです。」

飛び込んで、よつぽど、その踊の輪の中にはひつてみようかと、麥稈帽を笊に、ワイシャツの、ハンケチの頰かぶりで思はず立ちかけたが、相手を見るとさうもならず、ただ顏を赤くして笑つてゐると、ゐると、

「白秋、やれやれ。」と庄亮が後ろから背中をこづいた、こづいた。

それは全く踊りたかつたのだが、惜しいことをした。夫子まだ悟入しないと恥入つたな。

だが、人ひとりにも絶えて遭はなかつたしんしんとした原生林のこの道中の、突如として起つた、この三味線の、紅の襷の、鰌すくひである。私の動悸はまだ收まらなかつたらしい。

よく見れば、白粉こつてりの女どもであつた。

小さな、玩具よりやや大きな飾り屋臺には櫻の造花をつらね、赤と黃との幕を張り、金壹圓何々殿寄附のビラさへ二三枚は風に吹かしてゐて、さて、曳いて、歩いて、また輪になつてコラサッであつた。

だが、あたりには家も見えなければ人影も見えないのだ。

天には日が小さい小さい。

F君が錢を投げた。